

諏訪台遺跡

茨 城 県

大宮町諏訪台遺跡発掘調査会

平 成 三 年 三 月

諏訪台遺跡

茨 城 県

大宮町諏訪台遺跡発掘調査会

平成三年三月

題字　浅野長衛（大宮町教育長）



第三号土壤出土土偶



第四号土壤出土土器



第六号土壤出土土器



第八号土壤出土土器・把手部



序

諏訪台遺跡の発掘調査は、平成2年8月から10月まで3か月間実施されました。この遺跡は、久慈川が南下する右岸台地にあたり、この付近に展開する河岸段丘は、標高25m程度の平坦地を形成するが、その西側には標高65m前後の中位段丘が複雑に発達し、その一帯に諏訪台遺跡があります。

今回、スポーツ公園整備に伴う発掘であります、古代文化の栄えたこの地に潤いとやすらぎのある公園が建設されることは、まことに意義深いものがあります。

この度の調査によって、縄文時代中期前半の住居址1棟をはじめ袋状土壙13基、竪穴状遺構2基、ビット状遺構4基、溝状遺構3条などが発掘されました。とくに第三号土壙からは板状の土偶、第八号土壙においては蛇形頭部把手を付加した深鉢形土器が出土しております。こうした遺物は、県下でも非常に類例が少なく、古代の人びとの生活を知るうえで、大変貴重な資料と考えられます。

ここに報告書の発刊をみることができましたのは、全面的なご理解とご指導をいただきました県教育庁文化課、水戸教育事務所社会教育課のご厚意と、調査団長の井上義安先生をはじめ関係各位のご協力の賜ものであり、心から感謝を申し上げます。

この報告書によって、祖先の偉業をしのぶことができると共に、文化財に対する認識と遺跡愛護の精神をさらに深められ、郷土を愛する心を培ううえで貴重な資料であります。

是非、この報告書を活用されますことを、心からご期待申し上げご挨拶といたします。

平成3年3月

大宮町教育委員会
教育長 浅野 長衛

例　　言

- 1 本書は、茨城県那珂郡大宮町鷹巣字諏訪台遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は、平成2年8月17日から10月29日まで実施した。
- 3 発掘調査面積は、スポーツ公園整備予定地内の約8,600 m²である。
- 4 発掘調査は、平成2年6月26日、大宮町諏訪台遺跡発掘調査会（会長野沢 弘教育長）を組織し、井上義安（日本考古学協会員）を担当者とし、大芦あさ子、小堤静江、高橋陽子、富岡清子（調査補佐員）と地元作業員の協力を受けて実施した。
- 5 本書に使用した写真は、井上義安と内藤 彰が撮影したものである。
- 6 遺物整理、図面作成、原稿執筆、レイアウト、校正などは、発掘終了後の11月5日から平成3年3月31日までの間に行った。
- 7 出土遺物は、大宮町教育委員会の責任で保管されている。

実測図凡例

- 1 実測図の出土地点番号と遺物番号は同一である。
- 2 接合資料は、出土地点番号、表裏関係（表△・裏▽・立ち▷）、床上レベル（計測単位cm）の順で記載した。
- 3 住居址、土壤内出土遺物の種類は下記の記号で区別した。
 - 繩文土器 ○ 土製品 ▲ 自然石 △ 石器・石製品
- 4 土器破片の表裏関係グラフは、左側から表・裏・立ちの比率をあらわす。
- 5 土壌断面図の崩落上は、スクリーン・トーンを貼付して区別した。



赤橙色土



ローム

本文目次

原色図版

序

大宮町教育委員会教育長 浅野 長衛

例 言

本文目次

挿図目次

図版目次

第一 章 遺跡の位置と自然環境	1
第二 章 調訪台遺跡周辺の考古学的環境	4
第三 章 発掘調査の概要	7
第四 章 遺構の分布状況	9
第五 章 墓穴住居址の調査	11
1 第一号住居址	11
第六 章 袋状土壤の調査	16
1 第一号土壤	16
2 第二号土壤	19
3 第三号土壤	22
4 第四号土壤	25
5 第六号土壤	32
6 第七号土壤	35
7 第八号土壤	37
8 第九号土壤	43
9 第一〇号土壤	46
10 第一一号土壤	49
11 第一二号土壤	52
12 第一三号土壤	54
13 第一四号土壤	58
第七 章 墓穴状遺構の調査	61
1 第一号遺構	61
2 第二号遺構	62
第八 章 ピット状遺構の調査	65

1	第一号遺構	65
2	第二号遺構	65
3	第三号遺構	65
4	第四号遺構	68
第九章 溝状遺構の調査		69
第一〇章 確認調査区出土の遺物		72
第一章 まとめ		78

諏訪台遺跡発掘調査会役員

発掘調査従事者

遺物整理従事者

謝 辞

挿図目次

第一図	眼訪台遺跡付近地形図(鈴木作図)	2
第二図	遺跡地層模式図(鈴木作図)	3
第三図	発掘調査区域図(鈴木作図)	8
第四図	遺構分布図(大芦作図)	10
第五図	第一号住居址遺物分布・接合関係図(井上・鈴木作図)	12
第六図	第一号住居址出土遺物実測図(大芦・鈴木作図)	14
第七図	第一号住居址関係出土遺物実測図(鈴木作図)	15
第八図	第一号土壤遺物分布図(富岡作図)	17
第九図	第一号土壤出土遺物実測図(大芦・富岡作図)	18
第一〇図	第二号土壤遺物分布図(高橋作図)	19
第一一図	第二号土壤出土遺物実測図(大芦・高橋作図)	20
第一二図	第三号土壤遺物分布・接合関係図(鈴木作図)	22
第一三図	第三号土壤出土遺物実測図(井上・鈴木作図)	23
第一四図	第四号土壤遺物分布図(小堤作図)	27・28
第一五図	第四号土壤接合関係図(小堤・鈴木作図)	29
第一六図	第四号土壤出土遺物実測図(1)(大芦・鈴木作図)	30
第一七図	第四号土壤出土遺物実測図(2)(鈴木作図)	31
第一八図	第六号土壤遺物分布・接合関係図(富岡・鈴木作図)	33
第一九図	第六号土壤出土遺物実測図(大芦・鈴木作図)	34
第二〇図	第七号土壤遺物分布・接合関係・出土遺物実測図(高橋・鈴木作図)	36
第二一図	第八号土壤遺物分布・接合関係図(小堤・高橋作図)	37
第二二図	第八号土壤接合関係図(富岡作図)	38
第二三図	第八号土壤出土遺物実測図(1)(大芦・鈴木作図)	39・40
第二四図	第八号土壤出土遺物実測図(2)(大芦・鈴木作図)	41
第二五図	第九号土壤遺物分布・接合関係図(鈴木作図)	44
第二六図	第九号土壤出土遺物実測図(鈴木作図)	45
第二七図	第一〇号土壤遺物分布図(鈴木・大芦作図)	46
第二八図	第一〇号土壤出土遺物実測図(1)(大芦・鈴木作図)	47
第二九図	第一〇号土壤出土遺物実測図(2)(鈴木・神永作図)	48
第三〇図	第一一号土壤遺物分布・接合関係図(鈴木・中川作図)	49

第三一図 第一一号土壤出土遺物実測図（鈴木・中川作図）	50
第三二図 第一二号土壤遺物分布・接合関係図（大芦・中川作図）	52
第三三図 第一二号土壤出土遺物実測図（神永作図）	53
第三四図 第一三号土壤遺物分布図（神永作図）	55
第三五図 第一三号土壤接合関係図（神永作図）	56
第三六図 第一三号土壤出土遺物実測図（鈴木・中川作図）	57
第三七図 第一四号土壤遺物分布実測図（大芦・中川作図）	59
第三八図 第一四号土壤出土遺物実測図（大芦・鈴木作図）	60
第三九図 第一号堅穴状遺構・出土遺物実測図（鈴木作図）	62
第四〇図 第二号堅穴状遺構・出土遺物実測図（神永作図）	63
第四一図 ピット状遺構・土壤・堅穴状遺構分布図（大芦・鈴木作図）	66
第四二図 ピット状遺構（第一・二・三・四号）遺物分布図（鈴木作図）	67
第四三図 ピット状遺構（第一・二・三号）出土遺物実測図（鈴木作図）	68
第四四図 第一号溝状遺構実測図（大芦・中川作図）	70
第四五図 第二号溝状遺構実測図（大芦・中川作図）	71
第四六図 確認調査区出土遺物実測図(1)（鈴木作図）	73・74
第四七図 確認調査区出土遺物実測図(2)（大芦・鈴木作図）	75
第四八図 確認調査区出土遺物実測図(3)（大芦・鈴木作図）	76
第四九図 確認調査区出土遺物実測図(4)（鈴木作図）	77
第五〇図 調査区土層断面図（中川・鈴木作図）	81

写 真 図 版 目 次

発掘現場説明会<平成2年10月23日>

- 図版第 一 遺跡の遠景<東から>
 - 遺跡の遠景<南から>
- 図版第 二 第一調査区の現状<西から>
 - 第二調査区の現状<北から>
- 図版第 三 第一調査区の遺構確認状況<西から>
 - 第一調査区の遺構発掘状況<西から>
- 図版第 四 第一調査区中央部(A-B)の発掘状況<東から>
 - 第一調査区中央部(A-B)の土層断面<東から>
- 図版第 五 第一号住居址の全景<南から>
 - 第一号住居址の遺物出土状態<南西から>
 - 第一号住居址の遺物出土状態<東から>
- 図版第 六 第一号土壤の土層断面<南から>
 - 第二号土壤の土層断面<南から>
- 図版第 七 第三号土壤の遺物出土状態
 - 第三号土壤の土偶出土状態
- 図版第 八 第四号土壤の全景
 - 第四号土壤の遺物出土状態
- 図版第 九 第四号土壤の遺物出土状態
 - 第四号土壤の遺物出土状態
- 図版第 一〇 第六号土壤の全景
 - 第六号土壤北半部の遺物出土状態
- 図版第 一一 第六号土壤の遺物出土状態
 - 第六号土壤の遺物出土状態
- 図版第 一二 第七号土壤の全景
 - 第八号土壤の土層断面
- 図版第 一三 第九号土壤の遺物出土状態
 - 第九号土壤の遺物出土状態
- 図版第 一四 第一〇号土壤の遺物出土状態
 - 第一一号土壤の断面と遺物出土状態

図版第一五 第一一号土壤の断面と遺物出土状態

第一二号土壤の土層断面

図版第一六 第一三号土壤の土層断面

第一三号土壤の崩落状態

図版第一七 第一四号土壤の断面と遺物出土状態

図版第一八 第一号堅穴状遺構の遺物出土状態

第二号堅穴状遺構の遺物出土状態

図版第一九 第二号堅穴状遺構の遺物出土状態

第二号堅穴状遺構の遺物出土状態

図版第二〇 ピット状第一号遺構<西から>

ピット状第三号遺構<北から>

図版第二一 遺構確認面の遺物出土状態

遺構確認面の遺物出土状態

図版第二二 第一号溝状遺構<北から>

第一号溝状遺構<南から>

図版第二三 第一号（左）第二号（右）溝状遺構<東から>

第一号（上）第二号（下）溝状遺構<東から>

図版第二四 第一号住居址出土遺物

図版第二五 第二号土壤出土遺物

図版第二六 第三号土壤出土遺物

図版第二七 第四号土壤出土遺物

図版第二八 第六号土壤出土遺物

図版第二九 第八号土壤出土遺物

図版第三〇 第九号土壤出土遺物

図版第三一 第一〇号土壤出土遺物

図版第三二 第一〇号土壤（上）第一二号土壤（下）出土遺物

図版第三三 第一三号土壤出土遺物

図版第三四 第一四号土壤出土遺物

図版第三五 第一号堅穴状遺構出土遺物

図版第三六 第二号堅穴状遺構出土遺物

図版第三七 確認調査区出土遺物（1）

図版第三八 確認調査区出土遺物（2）

図版第 三九 確認調査区出土遺物（3）

図版第 四〇 確認調査区出土遺物（4）

第一章 遺跡の位置と自然環境

茨城県の久慈川と那珂川に挟まれた河岸段丘上に立地する大宮町は、那珂郡のはば中央に位置する、地形上から巨視的にみれば、北東の久慈川を隔てた対岸には、標高 150 m 前後の山地が連なり、東南方には、標高 15 ~ 30 m の沖積地が蛇行する河川の両岸に分布し、とりわけ右岸の広大な河岸段丘上に大宮の町並が形成されている。

町の北部に位置する上大賀、鷹巣の付近は、久慈川が大きく北にカーブして再び南下する右岸にあたる。この付近に展開する河岸段丘は、標高 25 m 程度の平坦地を形成するが、その西側には標高 65 m 前後の中位段丘が複雑に発達している。対岸の河岸段丘の背後は、南北にのびる標高 130 m 前後の山並が対峙する。

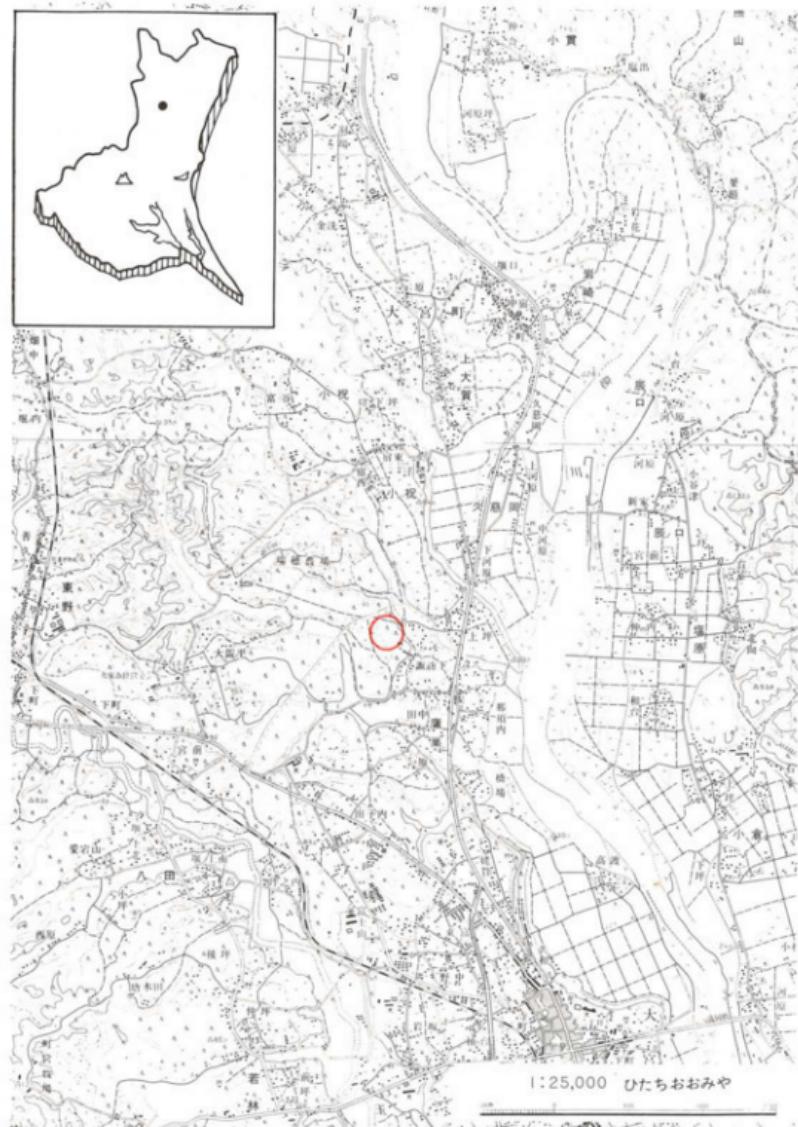
遺跡は、上大賀と小祝の両台地の間を江川が南下し、久慈川に合流する地点から西方に約 1 km の位置である。この付近は、北西から小祝、諏訪台などの舌状台地が張りだし、南側の鷹巣台地を含めて複雑な地勢を形成している。

遺跡の所在する諏訪台の台地は、標高 65 ~ 67 m を測り、台地上には平坦面も僅かに存在するが、緩斜面になっているところが多い。この点は比較的広い平坦地を擁する小祝や鷹巣の台地とは著しく対照的である。こうした両台地間における地形環境的な違いは、遺跡の規模と密接に関係していくので、先般調査した小祝台地の櫛巾遺跡（昭和 59 年発掘）、鷹巣台地の鷹巣遺跡（第一次昭和 56 年・第二次昭和 61 ~ 62 年発掘）の集落規模と、本諏訪台遺跡の遺構のありかたを比較すれば、両者の居住空間に時代的な違いがあるものの、具体的な事例として理解できるのである。

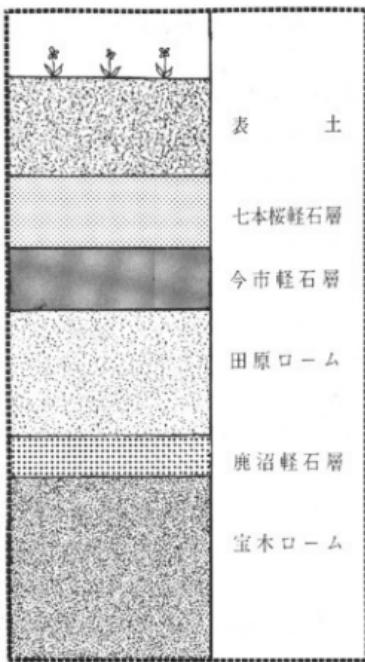
本遺跡は、台地の先端部より約 350 m ほど奥まった東縁に鷹巣神社が鎮座し、境内となっている山林から西方にかけての一帯であるが、ここは以前に茨城県経済農業協同組合連合会家畜市場の建設や野球場を造成したとき、緩斜面は削平し支谷を埋め立てたので、現在の地形環境は大きく変わっている。発掘の結果、遺跡の一部と推測されていた野球場の中央付近には、北東側から浅い支谷があり、台地は東西に二分されることが判明した。（第五〇図参照）

遺構は、台地の東縁寄りに密集する傾向が窺われ、西縁に移行する平坦部には全く確認できなかった。後述する縄文時代中期前半に属する土壤群が中心となっているので、調査区域外の山林や畠地にも同種の遺構が存在するものと想察できる。

遺跡の地層断面を観察してみると、この付近の諏訪台、小祝を含む台地は、久慈川に面する中位段丘面を形成しており、そのありかたに共通した性状が認められる。まず表土の直下には、男体火山末期の噴出物である赤橙色の軽石（浮石）層が存在する。これは七本桜軽石層・今市軽石層と呼ばれ、大宮町の那珂川や久慈川に面した中位段丘上の表土直下に薄くみられる。この軽石層の下部は田原ローム層となり、さらに黄色の鹿沼軽石層（10 ~ 20 cm）を介して、宝木ローム層



第一図 踏訪台遺跡付近地形図



第二図 遺跡地層模式図

に移行する。発掘地点の層序概要は、以上のように説明できる訳で、今回調査した縄文時代中期の袋状土壤群は、鹿沼軽石層から宝木ローム層の上部付近まで掘り下げて構築している。この点は、本遺跡の北方約1kmの小祝台地に存在する櫛巾遺跡の土壤群と全く同様である。

第二章 諏訪台遺跡周辺の考古学的環境

大宮町における先土器時代から城館を構築したいわゆる鎌倉・室町時代に包括される遺跡は、地元の助川四方明・野上公雄氏らが収集した資料と町史編さん時（昭和 50・51 年）の調査によって、総数が 97 遺跡までになった。このうち縄文時代に属するものは、約 41% の 40 遺跡が知られ、中～後期にまたがっている例が多い。諏訪台遺跡の周囲には、先土器時代の遺跡が 1 か所、縄文時代の中～後期の遺跡が 4 か所、弥生時代が 2 か所、古墳が 2 か所、古墳～歴史時代の集落まで含めると、約 20 の遺跡が数えられ、町内でも比較的の遺跡が多く散在する地区である。

こうした遺跡の中で内容が窺知できるものを、北から上大賀、小祝、諏訪台、鷹巣の各台地の順にまとめてみると、大略次のように説明できると思う。

①上大賀台地の主要遺跡

東平遺跡 久慈川に東面する標高 65 m の台地上に位置し、広い範囲に土師器（鬼高式・国分式）や須恵器の破片が散在する。縄文時代の遺物は主として東側の台地縁に認められる。採集資料は、中期の阿玉台式、加曾利 E 2 式、東北系の土器、打製石斧、磨製石斧などである。未発掘の遺跡で多くを言及できないが、住居址や袋状土壤群が埋没しているものと考えられる。

下坪遺跡 台地の南端部近くにあって、標高 50 ～ 45 m の平坦面から緩斜面にかけての畑地で、遺跡の規模は東平遺跡より小さくなる。ここには縄文時代中～後期の遺跡があって、採集資料の中には、中期末葉の加曾利 E 4 式、後期前葉の堀之内式、東北の綱取式の他に土偶、打製石斧、切口石錐、石棒、石鐵などが存在する。遺跡は未発掘である。

②小祝台地の主要遺跡

梶巾遺跡 台地東縁にある大賀小学校の運動場を中心に分布していた遺跡で、標高 65 ～ 64 m の緩斜面に存在する。この地点はごぼう栽培と昭和 26 年の運動場造成工事の際に、多量の縄文時代関係の遺物が出土している。資料は、中～後期の阿玉台式、加曾利 E 式、堀之内式、加曾利 B 式の上器破片の他に、打製石斧、磨製石斧、石皿、凹石、磨石、石鐵などがみられる。また、頭部に彫刻を施した石棒もあるが、これは晩期に出現する石製品であろう。小型の柱状片刃石斧は弥生時代の遺構から出土した石器と考えられる。おそらく住居址を中心とした遺構があったものと思われる。

昭和 50 年になると、先土器時代の調査を目的とした発掘が県立歴史館の諸氏により行われた。この調査においてローム層の上層から石核、尖頭器、石刃などが総数で 2027 点出土した。生活址は未確認に終わったけれども、これらの石器群のありかたから石器の製作に関わる遺構ではないかと考えられている。出土した各種の石器は、この地方の先土器時代の文化を考究する上で非常に重要な資料である。

昭和 59 年 4 ～ 6 月には、小学校の建設工事に伴う発掘調査が行われた。調査した面積は、校舎建設敷地、校庭と通学路の一部で約 2,100 m²である。

発掘調査区内において検出した遺構は、土壙、住居址、溝状遺構などである。

① 繩文時代中期土壙	16基	② 弥生式時代後期住居址	2軒
③ 古墳時代前期住居址	2軒	④ 古墳時代中期住居址	2軒
⑤ 時代不明住居址	1軒	⑥ 溝状遺構（時期不明）	1条

繩文時代の土壙群は、ほとんどのものが袋状を呈し、中期の阿玉台式期に該当する。この時期の袋状土壙は、昭和 50 年に日立市諏訪遺跡で約 30 基が調査され、大宮町では今回の諏訪台遺跡の 13 基を加えると、ほぼ同数に近い数となる。三遺跡の土壙群は、時期的にも中期の前半に含まれるので、この地方の中期文化の解明にとって有意義な資料である。

弥生時代後期の住居址は、十王台式期に属するものである。古墳時代のものは、五領式と和泉式期に該当し、S 字状口縁の台付甕形土器をはじめ注目すべき資料が多くみられる。

本遺跡は、以上述べた発掘資料を基に考えると、全面発掘を行った訳ではないので、集落としての規模を想定することはむずかしいが、大規模な遺跡であることは確かである。時代的に重複した遺構が認められるけれども、さまざまの問題点が解明できる第一級の遺跡といつても過言ではないと思う。

糠塚遺跡 本遺跡は小祝台地の南端近くに存在する。こここの台地からは良好な弥生土器が数個体分発見されたことがある。土器の特徴は、櫛描文と付加条繩文（第二種）を施したもので、先般発掘調査した富士山、櫛巾遺跡の土器〈十王台式〉と類似する。遺物のありかたを観察すると、遺跡の規模は小さいけれども、大略 10 ～ 15 軒程度の集落が形成されているかもしれない。

糠塚古墳群 本古墳群は前方後円墳 1 基と円墳 3 基が現存する。前方後円墳は、前方部の大部分が削平を受けており、詳細な形状は不明である。『大宮町史』（昭和 52 年）は、「前方部の残存高は約 3 メートルで後円部高は平均 5.75 メートルである。また後円部径は約 48 メートルで、標高 65 メートルから 66 メートルの間に東から北にかけての一部に段がみられる。墳頂は、平均 10.5 メートルの範囲で平坦になっている。前方部は南側のくびれ部の付近がわずかに残っているだけなので、長さ、幅、高さを計測することが不可能である」と説明している。

久慈川に面した小祝台地における前方後円墳を含む古墳群であるが、それは大宮台地の南端に占地して、広大な久慈川・玉川の冲積地を擁する経済的・軍事的要所に形成された富士山古墳群（前方後方墳・前方後円墳・方墳など）と比較した場合、被葬者の支配圏は小祝台地の周辺地域に限られていたように思われる。

② 諏訪台台地の主要遺跡

諏訪台遺跡 この付近は全体に山林、原野となっているところが多く、僅かに南端部近くの

鷹巣神社の西南側に本遺跡が存在する。ここは今回発掘調査を行った縄文時代中期前半の袋土壙群を主体とした遺跡である。台地の自然環境から考えると、今後開発工事が行われた場合には、若干の遺跡が発見されるのではないかと思う。

④鷹巣台地の主要遺跡

鷹巣遺跡 台地の南端部近くの標高 61 m を数える平坦部に存在する。昭和 15 年（第一次・調査面積約 5,000 m²）と昭和 61 ～ 62 年（第二次・調査面積約 15,000 m²）に発掘が行われた。第一次調査においては、9 世紀前半から中頃に営まれた住居址 13 軒、掘立柱建物址 2 棟、溝状遺構などが出土した。第二次調査では、8 世紀の中頃から 10 世紀初頭に至る住居址 23 軒を発見した。住居址は約 78% に相当する 18 軒が 9 世紀代に構築されているように考えられるが、集落構成のありかたまではよくわからない。

また西側斜面には、瓦窯址群（推定 10 基前後）が存在する。この窯址に近い住居址の中には、平瓦や丸瓦の破片が多量に廃棄されていた例も認められる。こうした事例から本集落は、官衙や寺院の求めに応じて、瓦の製作に従事した工人集団の生活の場であった疑いが強く感じられる。未発掘の周辺畠地（住居址群が存在する）を含めた本遺跡は、久慈川中流の古代窯業文化を解明できる極めて価値の高い遺跡であり、開発による破壊から守らなければならない。

参考文献

- 大宮町史編さん委員会『大宮町史』昭和 52 年 3 月
阿久津久「梶市遺跡」『茨城県史料』考古資料編 先史器・縄文時代 昭和 54 年 3 月
井上義安『茨城県富士山遺跡』Ⅰ 昭和 54 年 8 月
外山泰久他『常陸鷹巣遺跡』第 1 次調査 昭和 58 年 3 月
井上義安・植田友次他『茨城県梶巾遺跡』昭和 60 年 3 月
井上義安・植田友次他『常陸鷹巣遺跡』第 2 次発掘調査報告 昭和 62 年 12 月

第三章 発掘調査の概要

今回のスポーツ公園整備予定地における発掘前の状況をみると、東半部はすでに野球場を造成したときに削平しており、西半部は大部分が栗林と大小の灌木類、チガヤ類の繁茂した原野で、一部に畠地がみられるような状態であった。野球場の東寄りには、中期縄文土器の小破片が僅かに散在し、この時代の遺構の存在が予想できた。一方、西側の部分は、地形学的にみると東側より約1m前後高くなっている平坦面を呈している。ここはまだ遺構確認を実施していないところで、その存否は全く不明である。

調査区を設定するについては、すでに遺構の存在が予想されている野球場の東側を第一調査区、西側の栗林と原野一帯を第二調査区とした。

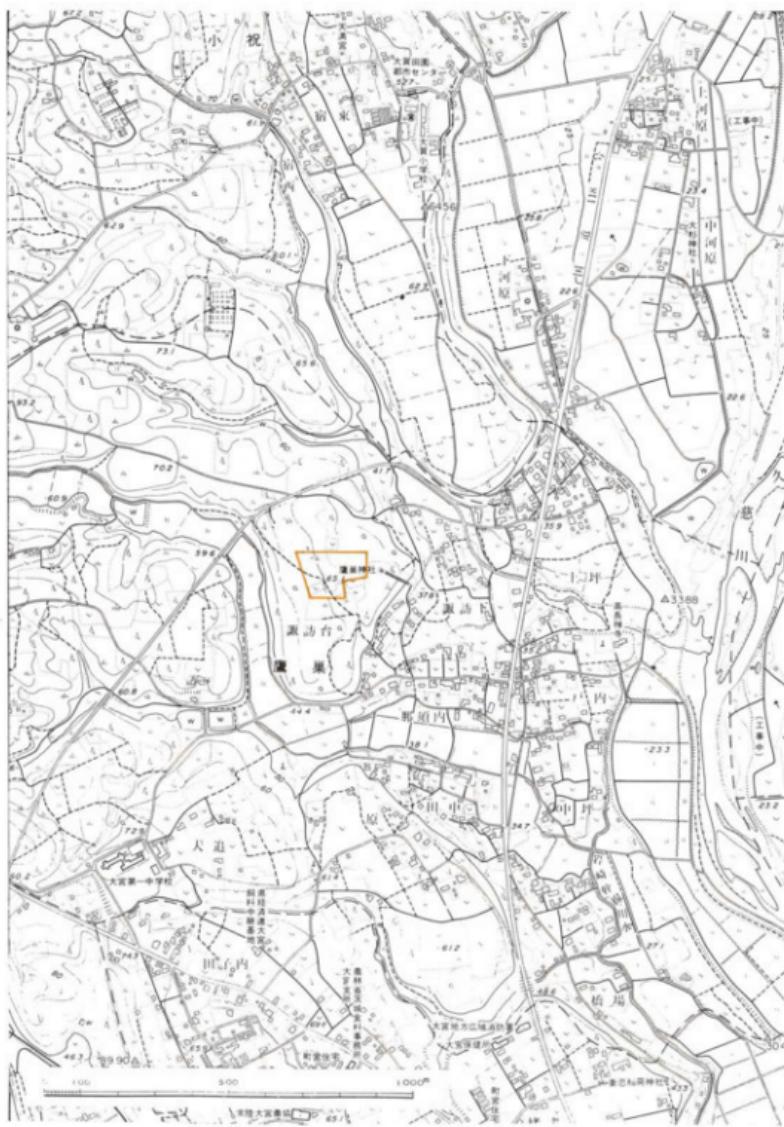
第一調査区は、採集十器片が縄文時代中期の阿玉台式の一群であることを考慮して、昭和59年に調査した梶原遺跡と同様の袋状土壙、住居址の発見が期待できるので、表上をローム面まで全面的に除去することにした。本調査区の発掘面積は約4,500m²である。調査の結果は、後述するような住居址、袋状土壙、土壤状遺構、ピット状遺構、溝状遺構などが発見された。

第二調査区については、中央の畠地を含む未買取地を除き、その南側を約2,500m²、北側は樹木と農作業用通路を避けて確認調査を行った関係で、3地点の配置と面積は多少不規則となっている。ここでの発掘面積は約1,600m²である。調査した区域内には、東半部で発見したような袋状土壙や住居址などが全く存在せずに、若干の摺乱穴と溝状遺構が2条認められた。

調査区内は、一単位10mのグリットを組み、東西方向に横軸をとりアラビア数字(算用数字)、南北方向に縦軸をとりアルファベット記号で表示した。また必要に応じてトレンチを設定し確認作業に当たったところもある(第三図参照)。

袋状土壙の発掘については、個々の実測図から知られるように、開口部径に大きい差が認められ、内部の埋没土砂を搬出し終わらないうちに、しばしば開口部が崩落し危険を伴う状態がみられた。そこで第四号土壙の発掘からは、上層記録用のベルトを残し、上部から20cmごとに壁面のロームを剥とりながら形状を作図した。

遺物の出土状況については、すべて原位置のまま柱状に残し、地点とレベルを記録しながら収納する方法を採った。これは個々の遺物を研究上の基礎資料として活用する際にも重要なことである。この『原位置』論的調査法は、今回の発掘においても可能な限り採用実践されている。



第三図 発掘調査区域図

第四章 遺構の分布状況

今回発掘および確認調査を実施した場所は、すでに述べてきたように鷹巣神社境内の西側に接する野球場と、それより西側の栗林や原野となっているところである。ここは中央付近に南北両方向から浅い支谷があり、その最奥部に相当しているために、あたかも分岐点のような地形を呈する。したがって、この部分は斜面を形成しながら次第に谷側へくだるので、遺構は全く存在しない。

第一調査区においては、東端部付近の $25 \times 20\text{ m}$ の範囲内に13基の袋状土壙が集中して発見され、その分布のありかたは、東側の神社境内と南側の畠地（調査区域外）にひろがる傾向が認められる。土壙群の中心は、東側境内山林中にあって、今回調査した部分はその西縁部に相当するかもしれない。本土壙群の時期は縄文時代中期の前半に比定できるものである。また北西に若干離れた地点からも、袋状土壙の仲間に入らない土壙状遺構またはピット状遺構が数基出土している。

住居址は、第一〇号土壙の西方 15 m の地点において1軒検出された。形状は長方形を呈するものである。廃絶期は土壙群と同じく縄文時代の中期前半と考えられる。

この他の遺構としては溝状遺構が存在するが、これは時代的に新しいものである。

第二調査区は、未買収の畠地において土師器の小破片を数点採集しているので、古墳・歴史時代の住居址を期待したけれども、発掘した区域内からは全くそれらしい遺構が発見できなかった。僅かに東端の斜面に沿って細い溝状遺構が1条確認でき、北側の第一地点にも東西方向に走る溝状遺構があって、そこから分岐する細い溝が調査区の溝に接続するようにおもわれる。第二・三地点においては、平坦なローム面が見られるだけで、土壙、住居址のような遺構は存在しない。以上の調査内容から本調査区内には、未買収地を発掘しても、遺構の発見を期待できないだろう。

発掘調査区内の検出遺構は、土壙、土壙状遺構、住居址、ピット状遺構、溝状遺構などである。

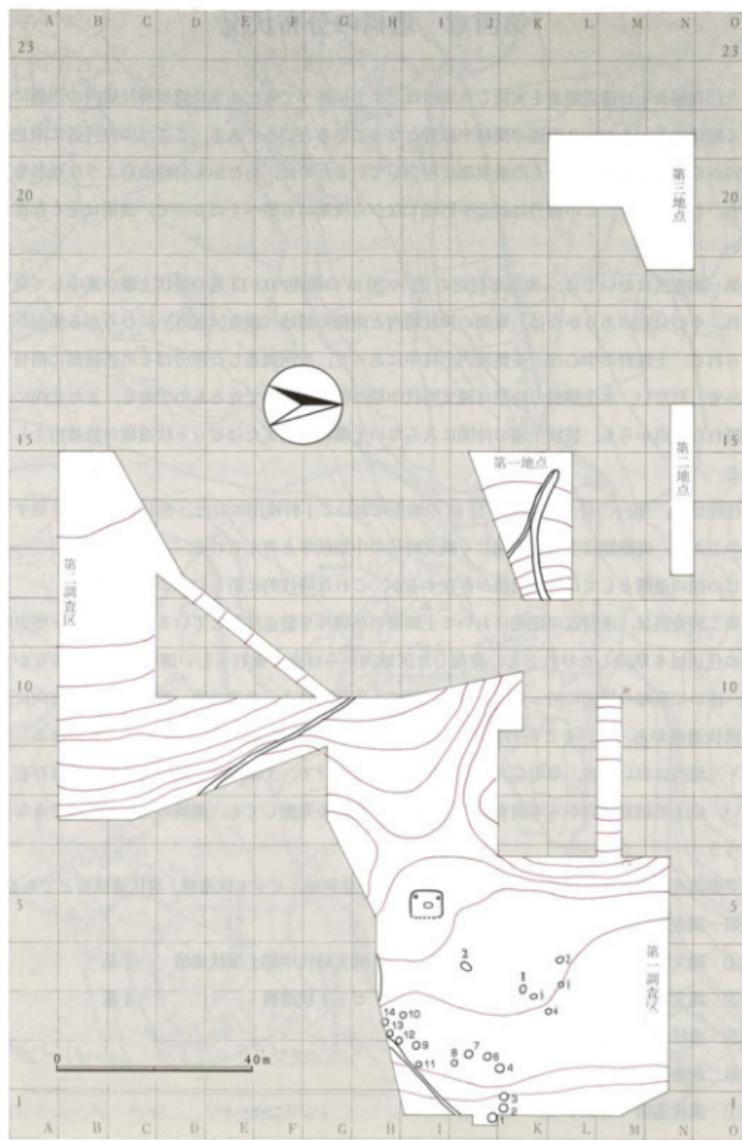
第一調査区

- | | | | |
|--------------|-----|---------------|----|
| ① 縄文時代中期袋状土壙 | 13基 | ② 縄文時代中期土壙状遺構 | 2基 |
| ③ 縄文時代中期住居址 | 1軒 | ④ ピット状遺構 | 4基 |
| ⑤ 溝状遺構（時期不明） | 2条 | | |

第二調査区

- | | |
|--------------|----|
| ① 溝状遺構（時期不明） | 2条 |
|--------------|----|

こうした遺構の分布傾向から考えると、遺跡の主体は台地の東縁を中心に形成されていることは確実であるが、調査の性格上、遺構の部分的な発掘調査に終わらざるをえなかつた。



第四図 造構分布図

第五章 積穴住居址の調査

1 第一号住居址（第五～七図、図版第五・二四）

遺存状態 積穴西壁の掘り込みは、ローム面上に識別できたが、中央から東側に移行するにしたがい、次第に不明瞭となっている。おそらく積穴は黒色土面から掘り込んで構築したものであろう。確認面付近は、野球場を造成したとき、一度削平工事を行っているので影響を受けているかもしれない。

形状・規模 プランは積穴の東半部が不明瞭である。西半部のプラン、炉址の位置、接合資料のありかたから推測できる形状は、隅丸の長方形と考えられる。北壁のW-X間と南壁のY-Z間は推定約5.0m、西壁のW-Y間は約5.0mを測るので、東壁のX-Z間もほぼ同じ長さになるだろう。面積は27m²前後と思われる。現存する壁高は西側が僅かに7cmの高さで残っている。構築時の壁高は、あきらかにしえないがもっと高かったであろう。

床面 おおむね平坦であって、内区・外区の区別なく硬度は2～3に比定できる。

柱穴 西側のWとYコーナー近くに2本（P₁・P₄）検出されているが、XとZの東壁付近には存在しない。P₁は直径約30cm、深さ65cm。P₄は直径約30cm、深さ80cmの規模を有する。この2本のピットは柱穴と考えてよいと思う。

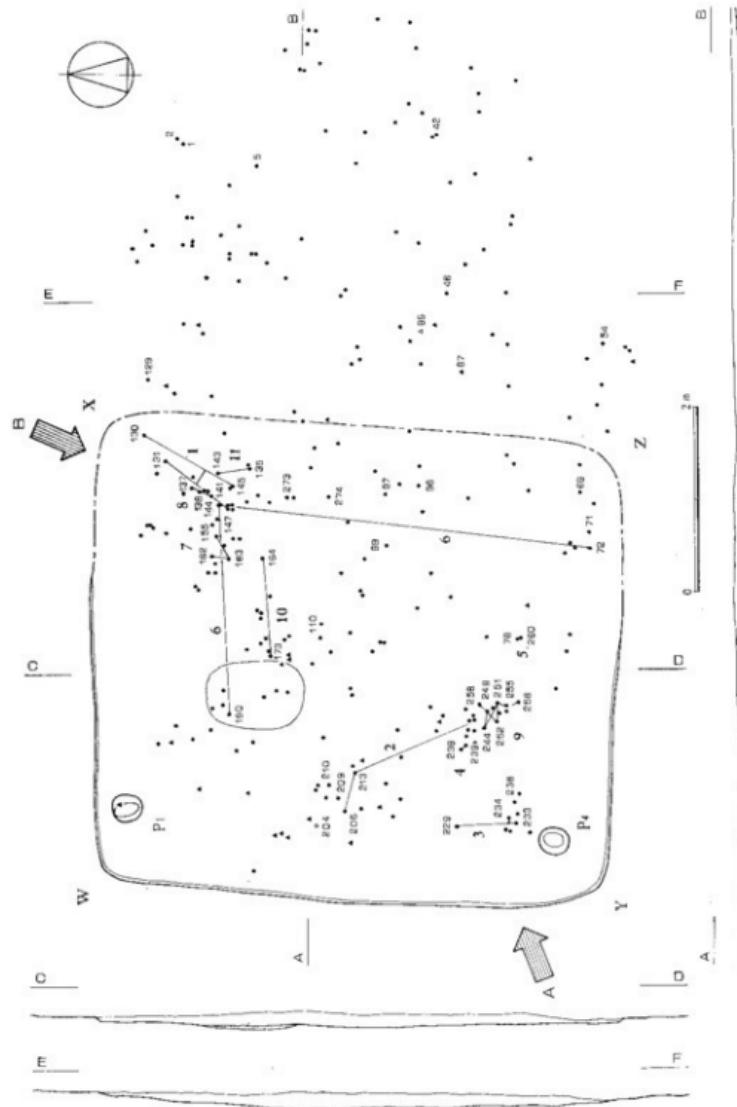
炉址 各コーナーを結ぶ対角線上のやや北側に片寄って検出された。大きさは長径105cm、短径80cm、中央部の深さ10cmで南北に長い。焼土の堆積は非常に少なく、長時間燃焼した炉址とはみなしがたい。

埋没土 積穴内の土砂はローム粒子を微量に混在した黒色土である。東西方向に設定したA-Bセクションには、住居址の掘り込みを示すような層相の変化はみられなかった。

遺物の出土状態 遺物は①住居址と想定した範囲、②それより東側の平坦面にも散在する。②の範囲については、図示したようにドット群が散在するけれども、炉址、柱穴と思われるピット、接合資料などが皆無であり、住居址と想定すべき積極的な事象がえられないで、ここでは①について記述する。

遺物が比較的多く散在するところは、Xコーナーに近い接合資料1・7・8・11が集中する付近、炉址の南側からYコーナー近くの接合資料2・3・4・9を結ぶ空間、炉址の周囲である。こうした遺物は、接合資料のありかたを考えると、主としてA・Bの二方向から廃棄したのではないかと窺われる。

土器破片の表裏関係を調べると、表93個(54%) +裏47個(27%) +立ち32個(19%) = 172個(100%)という比率になって、従来の事例と比較すれば、たしかに裏が少なく立ちがやや多くなる嫌いがある。



第五図 第一号住居址遺物分布・接合関係図

接合資料は実測図に図示するような状態で下記の11例が抽出できた。

接合資料1 <深鉢形口辺部> 147△12・131▽7………145▽11・130△7

接合資料2 < 同 > 206△2・213・△6・256▷4

接合資料3 < 同 > 233△0・229・▽3………234△3

接合資料4 < 同 > 238△2・239・△3

接合資料5 <深鉢形口胴部> 78▷0・260▷0

接合資料6 < 同 > 72△0・144・△11・190△6

接合資料7 <深鉢形胴部> 155△7・163△7

接合資料8 < 同 > 138▽8・137・▷7・141△6

接合資料9 < 同 > 258▽4・249・▽4・244▷0・252△6・251△4・255△6

接合資料10 < 同 > 173△0・164▽9

接合資料11 <深鉢形底部> 143△12・135▷0

遺物の概要 出土遺物の総数は192個である。縄文土器破片172個、有孔円板状土製品1個と自然石20個に区別できる。

縄文土器 無文地に隆起線を貼付して区画をつくり、有節沈線や爪形文、多条沈線を配した一群と、隆起線の区画内に有節沈線文を描出し、さらに縄文を施す一群とに大別される。図示した資料を除くと大部分は小破片で、両者はほぼ同数ぐらいの出土量である。

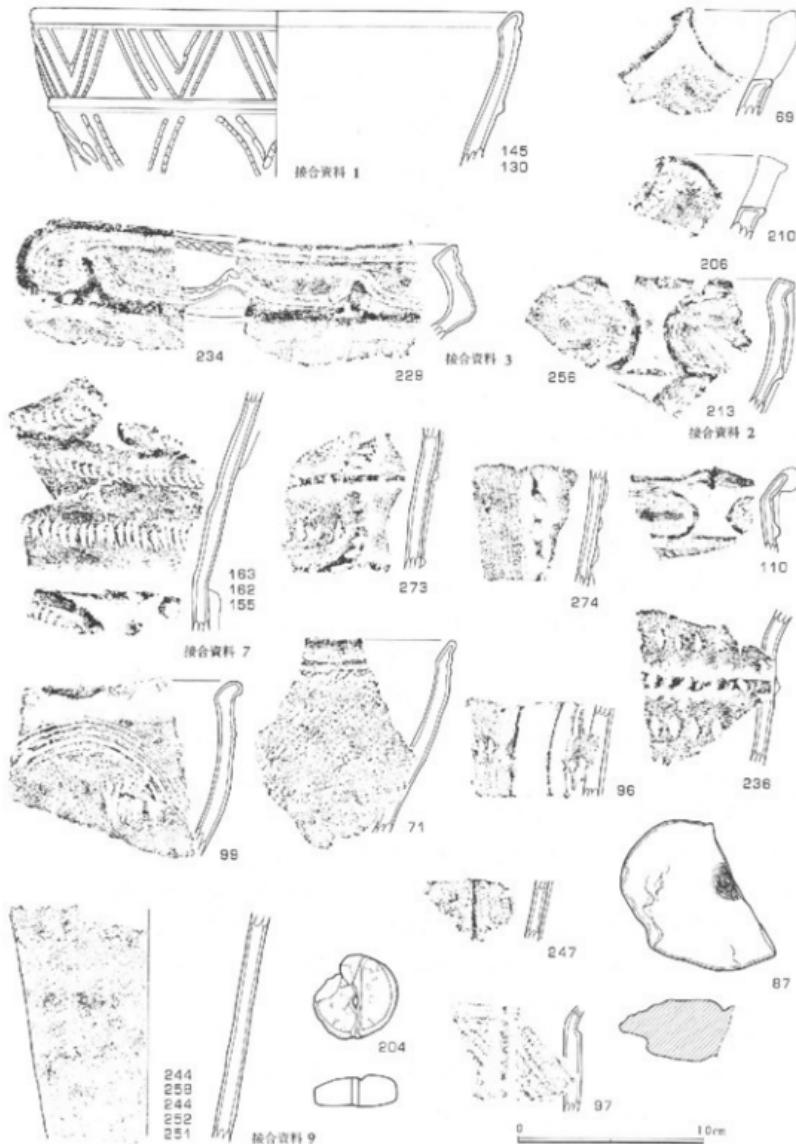
前者に属する土器のうち接合資料1を観察すると、口辺部の器形は弱く内湾曲して開き、口縁の内側に稜を形成する。文様は断面三角形の隆起線を横位に貼付し、その上下に細い半截竹管工具の外側を使った有節沈線を複列で山形状に描出す。接合資料2では隆起線で枠状区画をつくり複列の有節沈線を施す。接合資料3の有節沈線は工具の内側を使用している。110は単列の有節沈線である。接合資料7、273、96は爪形文列が盛行する。99は無文地に多条の沈線が弧状に描かれる。波状口縁の中には無文の69と有文の210がみられる。胎上に金雲母を含む土器が多い。

後者の71は、縄文を地文とした上に半截竹管工具の外側で有節沈線を直線、鋸歯状に施文する。隆起線で方形または長方形に区画した胴部247と97には、直線と曲線を併用した有節沈線の意匠文が構成される。接合資料9の下胴部は継位に縄文を押捺する。金雲母の混入は全体に少ない。

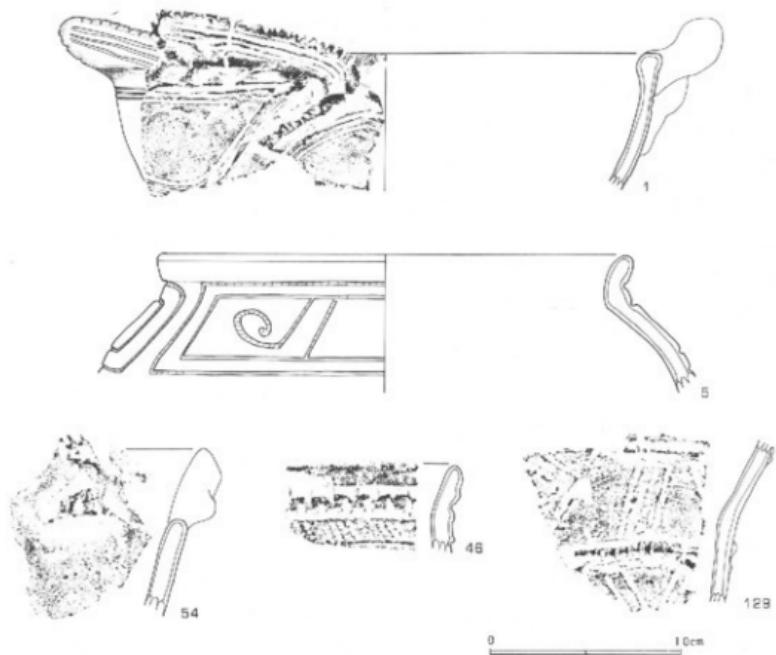
土製品 有孔円板状の土製品で一部に欠損がみられる。大きさは直径約4.5cm、厚さ約1.5cm、中央に小円孔を有する。器面に文様はなく、つくりは全体に粗雑である。

石 器 中央付近で折損しており、原形は楕円形状を呈していたものと思われる。使用痕としてのくぼみは表裏両面に存在する。石質は砂岩である。

なお住居址西側出土の土器破片については、主要なものを参考までに図示した。



第六図 第一号住居址出土遺物実測図



第七圖 第一號住居址關係出土遺物素描圖

第六章 袋状土壌の調査

1 第一号土壌（第八・九図、図版第六）

遺存状態 本土壌は調査区の東側境界で確認され、完掘するために東側を拡張して調査した。頸部壁面に崩落がみられる他は、おむね良好な状態を保っていた。

形状・規模 開口部の確認プランは略円形である。頸部から底部に移行するにしたがい、南壁付近が 20 cm コンターで示すように、やや外方へひろがっている。この部分を除けば、底面も略円形に近い。開口部径は 145 cm、底径は 275 cm、深さ 135 cm の大きさを有する。頸部付近は、赤橙色の軽石層が堆積し、内側に張出し狭くなっている。この部分は、発掘作業中に長時間露呈させ乾燥してくると、しばしば亀裂が入り崩落することがある。断面図の左側（西側壁面）は原形に近い状態を保っていると思われるが、右側（東側壁面）は軽石層とロームが大部分崩落した状態を示している。構築当初の断面形は袋状を呈していたと考えて大過ない。

埋没土 底面から a～e の 5 層に大別できる。底面上の a 層は、ロームを主体とした褐色土で微量の木炭細片を混入する。b 層は暗褐色土の中に軽石層（赤橙色）の土砂も少量含んでいる。c 層は黒褐色の土砂である。d 層は暗褐色を呈し、軽石層やロームのブロックを含む。このブロックは頸部崩落土と見做される。e 層は黒色土であってローム粒子を混入している。

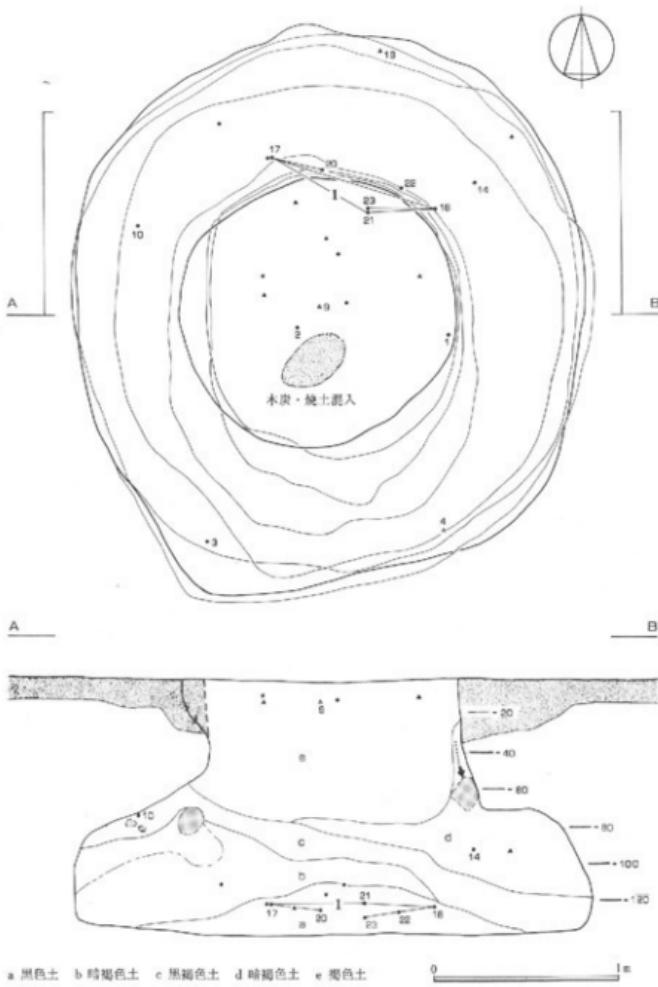
以上の土砂は、断面図から窺われる様に、明らかに人为的に埋め戻されており、特に c・d 層が堆積する時点で、頸部壁面に崩落が行われていることが理解できる。

遺物の出土状態 開口部のほぼ中央（東西方向）に設定した A-B セクションを中心に、平面分布の状況を観察すると、大部分の遺物は中央より北側に散在し、東西方向に接合する土器破片が 1 例存在する。これの垂直分布は、約半数の遺物が a 層内の底部に発見されている。開口部付近の遺物はおそらく混入したものであろう。

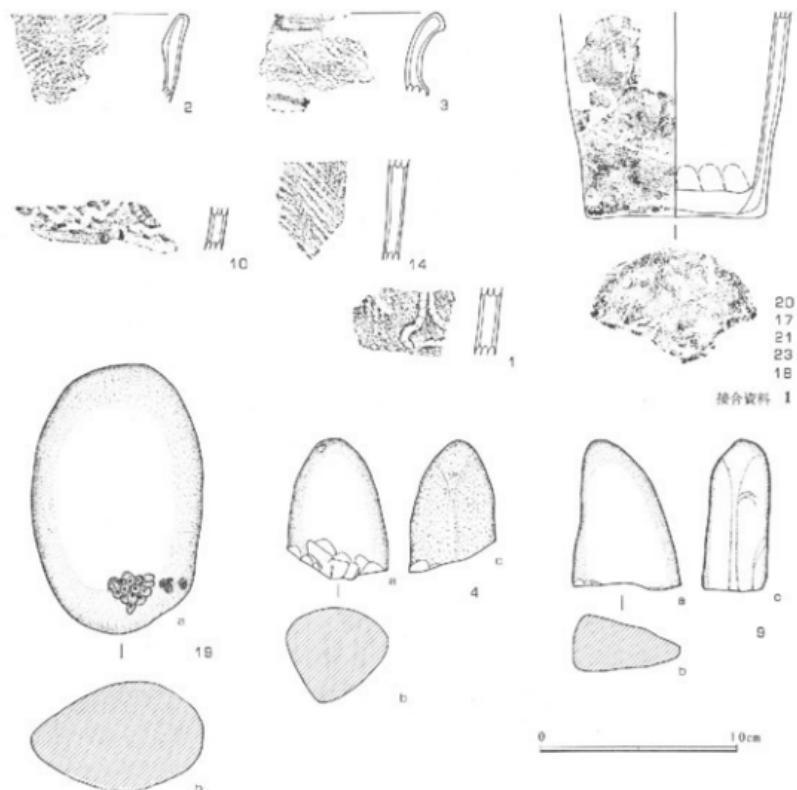
遺物の概要 遺物の総数は 24 個を数える。縄文土器破片 17 個、石器 4 個、自然石 3 個に分れる。接合資料は深鉢形土器の胴部から底部に至る破片である。

縄文土器 接合資料の無文土器を除くと、すべて小破片である。2 は口縁部内面が肥厚し弱い稜を有する。3 は外反する口縁部、14 は胴部で横位、縦位に縄文が押捺される。1 と 10 は縄文地の上に太目の鋸齒状の沈線文。角押文による曲線を構成するもので、大木 8a 式期または直前の土器群に比定できよう。類例は日立市諏訪遺跡の第 7 群土器、水戸市高天原遺跡に認められる。

石器 4 と 9 は整形加工を施した定形的な石器と相違し、長目の自然縫の一端を打欠したもので、打欠面に打撃痕を残している。19 は椭円形を呈する自然縫の一端に、打撃によるくぼみを有するものである。こうした石器には砂岩質の自然縫を利用している。



第八図 第一号土壤遺物分布図

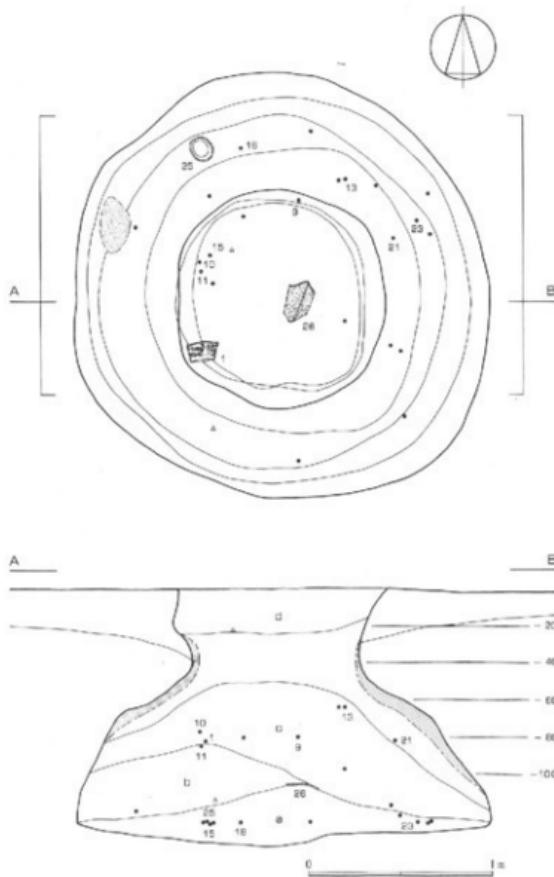


第九圖 第一號土壤出土遺物実測図

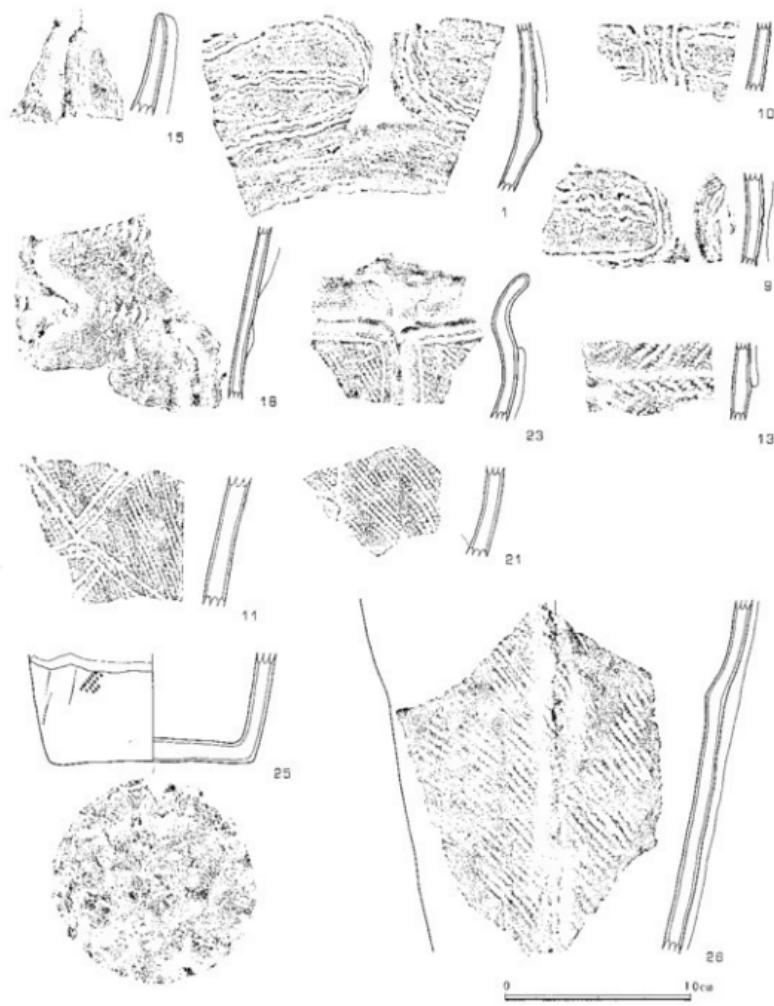
2 第二号土壤（第一〇・一一図、図版第六・二五）

遺存状態 確認面における開口部の状態は、おおむね良好に保たれているが、頸部から底部にいたる壁面の直下に崩落土と思われるロームが堆積する。

形状・規模 開口部と底部のプランは略円形である。開口部径約110cm、頸部はせまくなり約90cm、底部は225cmと大きくひろがる、深さは中央付近が140cm、周縁部は130cmである。断面形は、頸部から開口部が外反して開き、底部は内湾しながらひろがって袋状を呈する。底面は



第一〇図 第二号土壤遺物分布図



第一一圖 第二号土壤出土遺物実測図

周縁部が全体に高く、中央付近が10cm程度低く掘られている。

埋没土 底面から褐色土、暗褐色土、黑色土、暗褐色土の順に堆積している。

a **褐色土** ロームを主体とした土砂で僅かに木炭細片を混入する。中央付近には特に木炭片がブロック状に認められた。

b **暗褐色土** ロームを主体とした黒色土をやや多く含む。西壁際に木炭ブロックが存在する。

c **黑色土** ローム粒子を僅かに含んだ土砂である。

d **暗褐色土** 黒色土にローム粒子を少量含み、上半部はかたく締っている。頭部から袋状を呈する壁面の直下に、軽石屑やロームが剥落した状態で薄く堆積する。

遺物の出土状態 平面分布の状況は、開口部の下から周縁にひろがるように散在しているが、接合資料もなく特に変った傾向はみられない。こうした遺物を断面に投影してみると、大部分c層から底面の間に含まれている。出土した土器は、すべて破片であって、こうした土砂と一緒に投棄されたものと考えられる。

遺物の概要 出土した遺物は、中期縄文土器の破片25個と自然石2個である。

縄文土器 無文地に隆起線文、平行沈線文、有節沈線文や爪形文などを施文した一群と、隆起線文、有節沈線文、縄文などで意匠文が構成される一群とに大別できる。

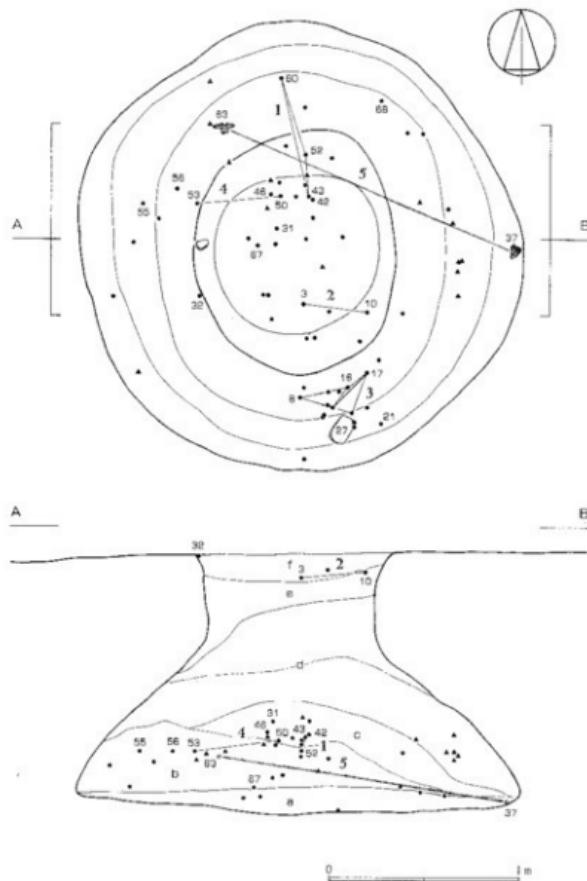
前者に該当する破片を観察すると、口縁部15は断面三角状の隆起線がカーブを描いて垂下し、その片側に細い半截竹管の外側を押した有節沈線文が施される。口辺部の大型破片1、9、10は胎土、色調などから同一個体である。隆起線で枠状の区画をつくり、隆起線の内側と内部中央に半截竹管の内側を使用して鋸齒状風に沈線を施している。胴部18には円弧状に連結して垂下する隆起線の突出部を中心に爪形文列が加えられる。以上の土器は阿玉台式の主要な文様構成である。

後者に含められる23は、口縁部が外反し波状口縁を呈する。縄文地の上から細い隆起線状に格子状の区画を施し、隆起線の両側に半截竹管の外側で単列または複列の有節沈線文を配している。11の格子状文は半截竹管の外側施文の有節沈線文、21は直線と曲線を組合せた文様である。13は隆起線の上から縄文が押捺されている。26の垂下する隆起線も同様で、縄文は縦位に回転している。この一群は日立市諏訪遺跡出土の第6・7群土器に近似するものと考えられる。

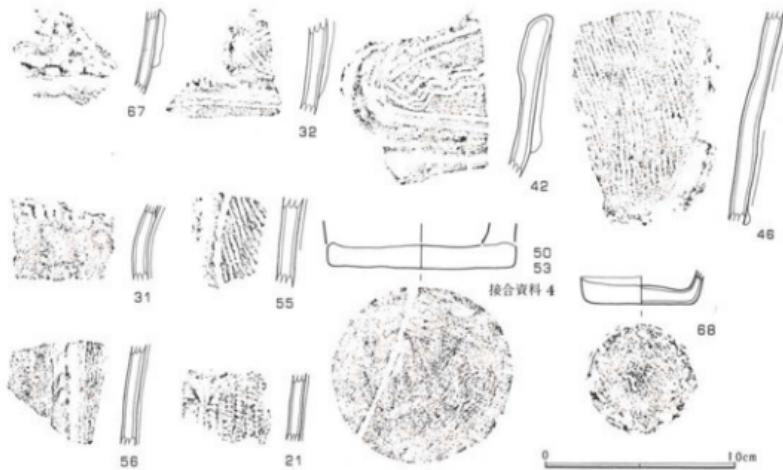
3 第三号土壤（第一二・一三図、図版第七・二六）

遺存状態 開口部の南北両壁の軽石層に一部崩落が認められる他は、残存状態が比較的良好である。

形状・規模 開口部は東西約100cm、南北約125cmを測る。頸部は略円形を呈して90cm、底部の径は約230cm、深さは130～135cmである。断面形は典型的な袋状を呈する。開口部が南北に長くなるのは、壁面の崩落によるもので内部に赤橙色の崩落土が介在する。



第一二図 第三号土壤遺物分布・接合関係図



第一三図 第三号土壤出土遺物実測図

埋没土 底面からローム、暗黒褐色土、黒色土、暗褐色土、暗黄褐色土、黒色土の順に堆積する。aとc層中には、木炭細片や焼土粒子が含まれている。dの暗褐色土は下半部にローム粒子をやや多く混入し、しいて区別すれば細分できるかもしれない。こうした土層の堆積状態と性状は、人為的に埋め戻した土砂であることは多言を要しない。

遺物の出土状態 ドットで記録した平面分布をみると、開口部とその周辺に散在するが、南側にも接合資料3を中心とした遺物が集中する。平面上からは、接合資料1・4・5を含むグループと南側の接合資料3のグループに分けられる。このドット群をA-Bセクションに投影すると、接合資料2は確認面に近いところで接合し、他の大部分の遺物は、自然石を除きa～c層中に含まれる。後者の接合資料を含む遺物は、出土レベルからほとんど同時に廃棄されたと考えられ、北半部の遺物は開口部の南側から、南半部の遺物は北側から投棄したことになろう。

接合資料は、縄文土器に4例、土偶に1例の合計5例が抽出できた。

接合資料1 <深鉢形胴部> 43△39・52△34・60△20

接合資料2 < 同 > 10▽125・3△123

接合資料3 <深鉢形底部> 14▽33・8△16・17▽34・19△34

接合資料4 < 同 > 50△40・53△28

接合資料5 <土 偶> 37▽3・63△25

遺物の概要 出土した遺物の総数は74個を数える。その内訳は、上器破片57個、土偶破片2個、凹石1個、自然石14個である。

縄文土器 無文の小破片が多く器形、文様の構成をうかがえる資料がほとんど皆無である。II辺部の42は、内湾曲して聞く波状口縁で内側に弱い稜を有する。II辺部の文様は隆起線で区画し、内部に半截竹管工具の内側を用いた沈線文が描出される。沈線文は隆起線に沿って引かれ、さらに内部を鋸歯状沈線で加飾する。32、67も文様の構成はほぼ同じであるが、有節沈線の手法も併用される。胴部破片の31は爪形文例がみられ、56は無文地に細い隆起線が貼付されている。

一方、縄文を施した46には円闇文らしい隆起線の区画が認められる。55は隆起線の両側に竹管工具の外側を使用した有節沈線文が複列に施され、21には単列に押されている。

接合資料4と68は無文の底部破片である。

土 偶 板状を呈する土偶である。上半部63と下半部37の破片は接合すると完形になる。おそらく故意に打ち欠いたものであろう。形状は、頭部に相当する上部の中央がくぼみ、両腕部は翼状に張りだし、胸部が狭まり下方の足部に至って再びひろがる。底面は少し部厚く平坦になる。表面には、胸部左右と頭部中央に瘤状突起を有し、その周囲に細い有節沈線による直線や曲線文が描かれる。裏面はおおむね平滑につくられ、そこにも有節沈線を施している。本土偶は高さ約10.5cm、最大幅約9.5cm、厚さ約1.6cmの大きさである。

石 器 形状は周縁部に細かく打矢を加え隅丸長方形に近く整形している。くぼみは打欠した上面のほぼ中央に1か所認められる。下面是全体に平滑で砥石状の使用痕を残す。大きさは最大長17.5cm、最大幅10.0cm、厚さ5.0cmである。重量1.4kg。石質砂岩。

4 第四号土壙（第一四～一七図、図版第八・九・二七）

形状・規模 開口部は、東南の側に若干の崩落が認められて、幾分ひろがっているが、略円形に近い形状であったと思われる。頸部の状態を観察すると、崩落が著しく断面図にみるような形状で残り、特に東南側壁面は崩落土の赤橙色ブロックの大きさから、推定 20 cm 前後の厚さで落下していることが確認できる。底部は外方へひろがり大きくなる。底面は平坦である。構築時の土壙は、実測図の断面よりもっと形の整った袋状を呈していたように考えられる。確認面での開口部径は 115 × 135 cm、頸部径 150 cm（構築時の推定直径 120 cm）、底部径 270 cm、深さ 95 cm の大きさを有する。

埋没土 土層の堆積状態は、底面から暗褐色土、ローム、黒色土、暗褐色土、黒色土の順に識別できる。底面上の a 層は、厚さ 10 cm に堆積し、木炭細片や焼土を含み全体にやわらかい。b 層はロームが主体で赤橙色の絆石層ブロック崩落土が含まれている。c 層も全体にやわらかい土砂で、中央よりやや右側上部に赤橙色の崩落土が存在する。西壁に移行するにしたがいロームの混入量が多くなる。d 層はロームと黒色土を主体とし、上方に移行すると黒色土が次第に多くなり、e 層との区分線は不明瞭になる。d・e 層の分離は一応の目安である。d 層の東壁に接して存在する赤橙色のブロックは、頸部壁面が崩落した状態を物語っている。

遺物の出土状態 完形に近く復元できる土器をはじめ多くの土器破片と石器、自然石などが出土した。平面分布のありかたは、開口部を中心として南北方向にひろがりをみて、東西の底部周縁にはほとんど存在しない。この状態を断面図に投影すると、底部から開口部に至る各層中に間断なく包含される。この事象は土砂の埋め戻しに伴い、ほぼ連続的に遺物を廃棄した行為を意味するものであろう。

ちなみに抽出した 6 例の接合資料は、南北を指向し接合する事例が大部分であり、上下のレベル差は接合資料 3 が 45 cm、接合資料 1 が約 40 cm、接合資料 5・6 が 25～30 cm を測るけれども、たがいに接合関係が認められる。

接合資料は下記の 6 例である。

接合資料 1 <深鉢形口胴部> 116 △ 25・114 ▽ 25・38 △ 11・39 △ 12・30 △ 6・103 △ 4・37
▽ 12・36 ▽ 12・98 ▽ 13・96 △ 16・121 △ 24・113 ▽ 17・72 ▽
43・78 △ 37

接合資料 2 < 同 > 28 ▽ 8・31 △ 12・111 ▽ 16・29 △ 7・33 ▽ 10

接合資料 3 < 深鉢形口縁部 > 49 ▽ 95・81 △ 49

接合資料 4 < 深鉢形頸胴部 > 117 △ 24・118 △ 27

接合資料 5 < 深鉢形胴底部 > 109 △ 40・119 △ 25・45 △ 10・106 ▽ 17

接合資料 6 < 同 > 80 ▽ 51・120 △ 30

以上の接合資料を含めた土器破片の表裏関係を調べると、表 44 個 (53%) + 裏 33 個 (40%) + 立ち 6 個 (7%) = 83 個 (100%) という比率になる。こうした表裏関係の比率は、これまでに発掘した縄文、弥生、古墳時代の多くの住居址例、投棄実験例などと比較してほとんど変りないものである。この数字は、土器の破片を廃棄した場合、その行為によって起りうる一般的な事象と考えられ、竪穴住居址に限定されることではなく、土壤内の遺物廃棄においても例外ではない。

遺物の概要 出土遺物の総数は 124 個である。この内訳は、土器破片 83 個、打製石斧 1 個、凹石 1 個、石皿状石製品 1 個の他に自然石が 38 個含まれている。

縄文土器 大部分は小破片であるが、この中にはほぼ完形に近く復元できる破片、大型の破片が僅かに含まれている。土器は阿玉台式に属する一群に金雲母が多く含み、縄文が主体となる一群には少なくなる。

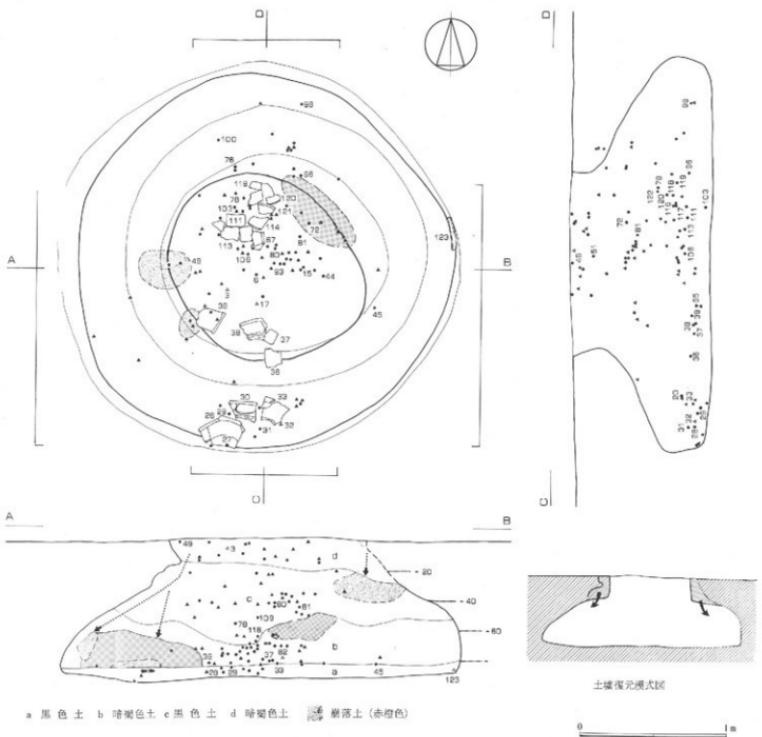
接合資料 1 は、口辺部が僅かに脹らんで開く深鉢形の器形で底部を欠失する。文様は隆起線文と沈線文が基本となる。口辺部は隆起線で棒状の区画をつくり、その内側に沿って半截竹管の内側で刺突した有節沈線が複列に一周し、内部空間の中央に鋸歯状の沈線が配される。胴部は断面三角形状の隆起線を横位に、円弧を描く隆起線を縦位に貼付し、その間に複列の鋸歯状沈線で阿玉台式特有の文様帯を構成する。接合資料 4 の胴部は、棒状区画内に単列の半截竹管工具の外側を使った有節沈線文が施され、胴部は爪形文列となる。接合資料 3 と破片の 6 は、胎土や色調などが酷似し同一個体の可能性が強い。外反して開く口縁部には、粘土紐を鋸歯状に貼付し、その下に波状の沈線が描かれる。胴部は曲線や波状の沈線を縦位に施す。

接合資料 2 は下半部を欠失した深鉢形の器形を呈する。口縁部は粘土紐を貼付して数個一組の山形文を作出し、口辺部と胴部は細い隆起線で方形または長方形に区画し、内部を縦位に押捺した縄文で充填する。67.100.15 には縄文を押捺してから半截竹管の外側を使った有節沈線が加飾される。接合資料 6 は底部付近の破片であって有節沈線文はみられない。底面には網代痕を残している。

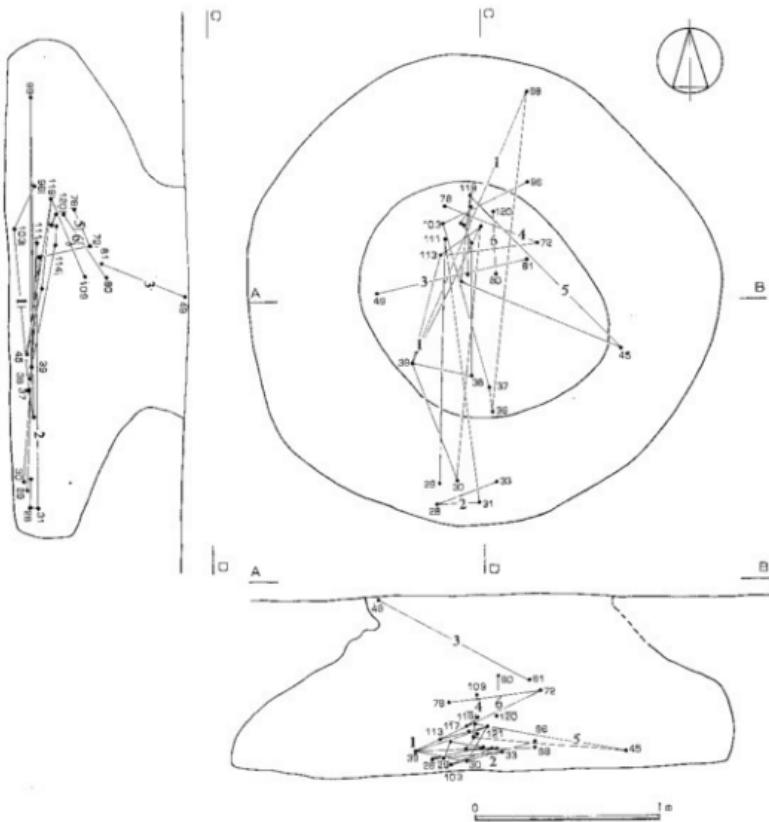
石 器 打製石斧の未製品、凹石、石皿状石製品が各 1 個出土している。3 は分銅形の石斧を製作する目的で a の中央部に入念な打欠を加えたものである。反対側の b 中央部を打撃したとき、大きく縦割れが生じ中途で製作を断念したと思われる。上下の両端にはまだ刃部が作出されていない。石英斑岩。

32 の両端が折損した長目のやや扁平な自然石は、中央部に敲打による浅いくぼみが認められる。凹石として使用されたものであろう。石質は砂岩である。

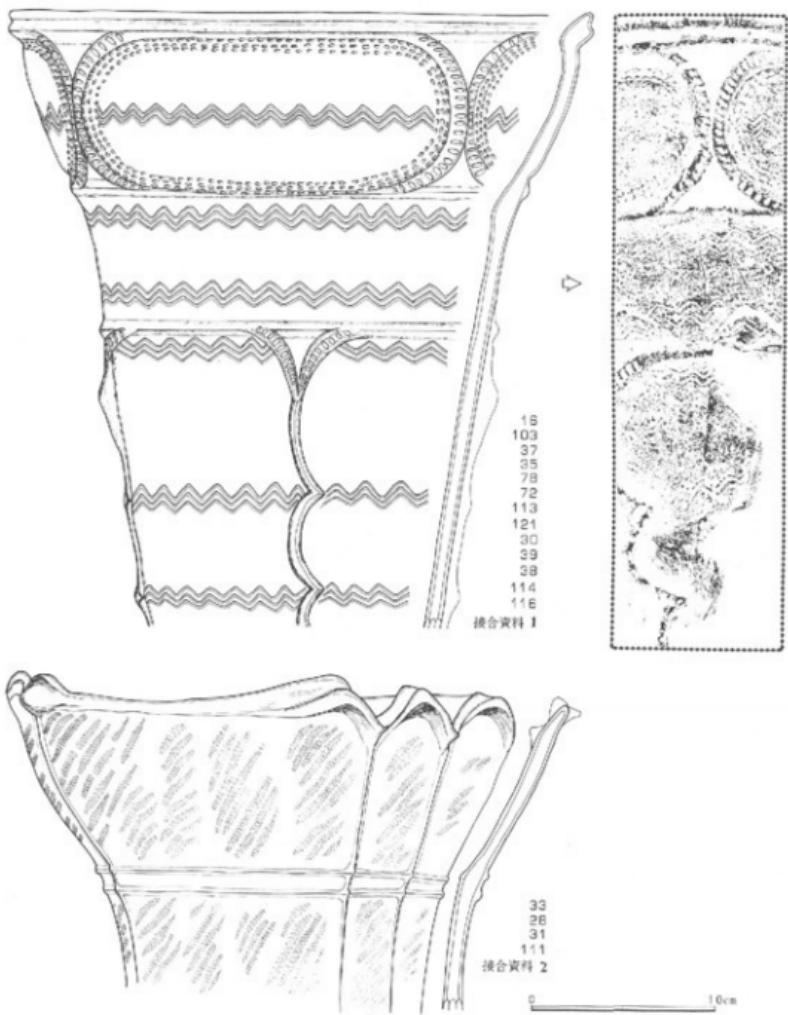
123 は周縁と表裏面を打欠により調整している。形状は一端を欠失するが略円形を呈し、断面は皿状に浅く内湾する。おそらく石皿用に加工を施したものと思われる。長径 23.0 cm、短径 20.0 cm、厚さ 2.5 cm の大きさを有する。砂岩製。



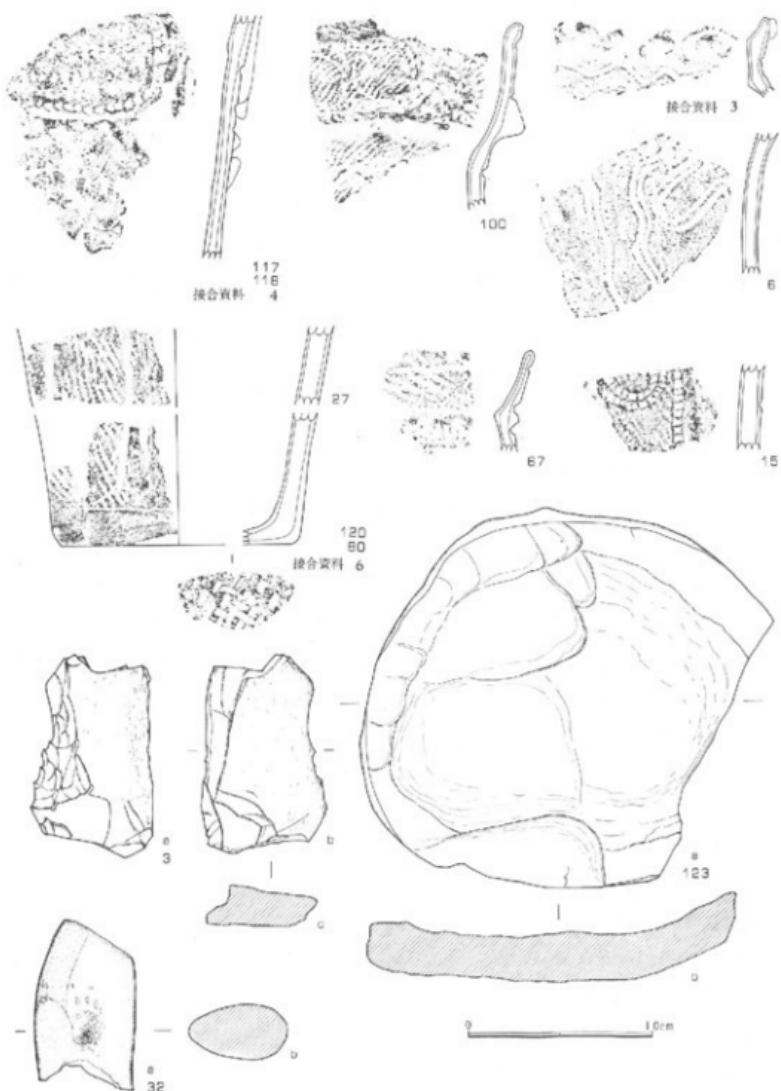
第一四図 第四号土壤遺物分布図



第一五図 第四号土壤接合関係図



第一六圖 第四號土塼出土遺物実測図



第一七圖 第四號土壤出土遺物尖測圖

5 第六号土器（第一八・一九図、図版第一一・二八）

形状・規模 開口部、頸部、底部の平面形は、略円形に近いプランを呈する。西側の頸部下端から底部に移行する付近に一部分崩落が認められる。確認面における開口部の直径は約105cmあり、頸部の直径もほぼ同様である。底部は東西南北とともに260cmを測る。底部周縁は、開口部より約80cm外方に張り出し、典型的な袋状を呈する断面となる。西壁の断面は、頸部直下の壁面が10cm前後の厚さで剝落しているために、本来の形状よりは少し外側に後退し直線状に近くなっている。底面は外縁が若干高く、中央付近が低くなつて深さ110cmである。

埋没土 開口部から自然に流入した土砂ではなく、人為的に埋め戻されている堆積状態を示し、その性状から次の4～5層に区分できる。

- a 暗褐色土 ロームを混入した土砂で、木炭細片を微量に含んでいる。
- b 黒色土 ローム粒子をほとんど混入しない黒色土である。
- c 黑褐色土 ローム粒子を僅かに含み、層中に赤橙色輕石層の崩落土が存在する。
- d 黑色土 上部のe層に比較すると、ローム粒子の混入が少なく黒色味が強い。
- e 黑褐色土 d層よりローム粒子がやや多くなつて、土層は漸移的に変化し、明瞭な区分線は引きがたい。

遺物の出土状態 完形に復元できる2例の土器を含めた総数は38個で、この中に自然石が多く含まれている。平面分布のありかたは、東西側の底部にはほとんどみられず、開口部を中心南北方向に散在する傾向が認められる。接合資料1の接合方向も、遺物の散在傾向とほぼ軌を一にするかのように南北を指向する。A-B断面に投影した垂直分布をみると、大部分の遺物はa～cの3層中に包含されてしまう。開口部付近は自然石を含む数個の遺物だけである。接合資料1は、完形品の廃棄というよりも、破損した破片を別個に南側から棄てたものであろう。浅鉢形土器の35は廃棄後に土圧で割れた状態を示している。

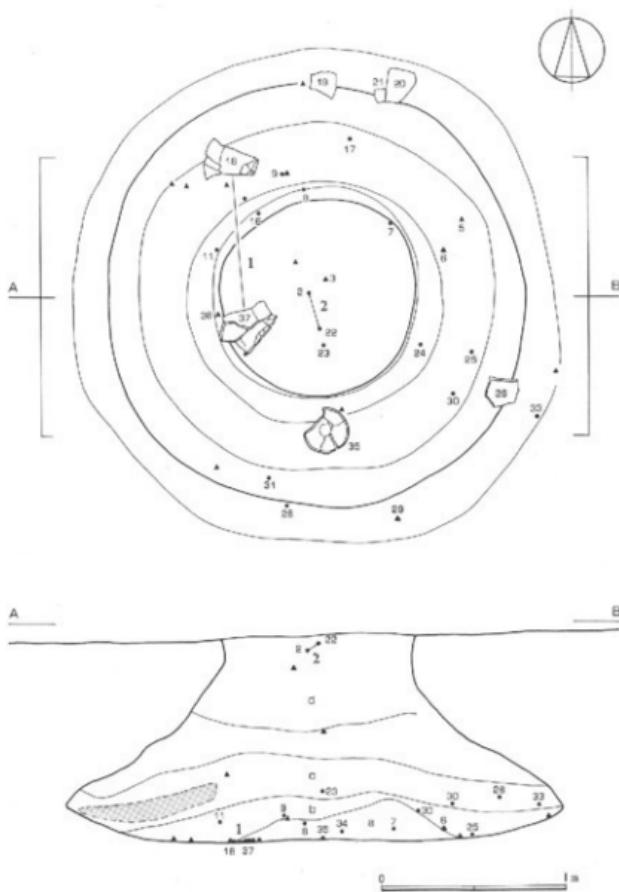
接合資料は下記の2例が抽出できた。

接合資料1 〈深鉢形口底部〉 $18\triangle 0 \cdot 37\triangleright 0$

接合資料2 〈深鉢形口胴部〉 $2\triangleright 100 \cdot 22\triangleright 105 \cdots \cdots 19\triangleright 8$

遺物の概要 総数は38個である。土器は完形の浅鉢形をはじめ接合資料の深鉢形を含む破片が14個、自然石が24個出土した。

縄文土器 口辺部が内湾曲しながら大きく開く19は、口縁直下に角状突起を付し、そこから棒状の隆起線を配する。隆起線上に刻目を並列させ、複列の有節沈線文や平行沈線文を加飾し、口唇および口縁にも同様の施文が行われる。11は波状口縁の一部で棒状区画の内側に有節沈線文が認められる。26の大きな波状口辺には把手状の隆起線が付され、縄文地の上に半截竹管の内側を使用した有節沈線文や鋸歯状沈線文、曲線文などが充填される。胴部の33には円弧状の太い隆起



第一八図 第六号土壤遺物分布・接合関係図

線上に刻目、器面に有節沈線文を施す。28は円形浮文を伴う隆起線文が斜行し、有節沈線文が複列で付随する。接合資料1は口縁部が外反する深鉢形、35は口縁部を内曲させた浅鉢形でいずれも無文である。

胸部17は縄文地に半截竹管の外側で施した有節沈線文である。円形または梢円の構図の他に方形に区画した破片も存在する。8は縄文を綴位に回転している。この種の有節沈線文を配した土器はあきらかに前者の一群と区別できる。



第一九圖 第六号土壤出土遺物実測図

6 第七号土壤（第二〇図、図版第一二）

形状・規模 平面形は開口部、頸部、底部いずれも略円形に近い。開口部と頸部の直径は、約130cmを測りほぼ同じ大きさである。これは断面図が示すように口頸部の周縁が崩落した結果による数字で、構築時の直径は100cm前後であったと考えられる。底部の直径は東西南北ともに約260cmを有する。底面はほぼ平坦であって、深さは確認面から127cmを測る。断面でみると形状は本土壙も袋状を呈する。

埋没土 区分線は上下2層に大別できて比較的明瞭である。底面上に厚さ約30cmに堆積するa層は、ローム粒子をやや多く含んだ黒褐色土であり、この上部に黑色土b層が確認面まで厚く堆積し、部分的にローム粒子や木炭細片を含んでいる。

この埋没土には、a層の上部周壁に接して赤橙色の鱗石層やロームのブロック（厚さ15cm前後）がみられ、さらに東壁寄りのb層中にも同様のブロックが介在する。こうしたブロックは明らかに口頸部付近から崩落したものと考えられ、このために開口部から頸部に移る壁面が著しく変形を受けている。A-Bセクションの右側（東壁）は、ロームと赤橙色上の介在状態によって、少くとも2回の崩落があった事実を物語っている。このために開口部付近の壁面が直線状に変形した好例と考えられる。

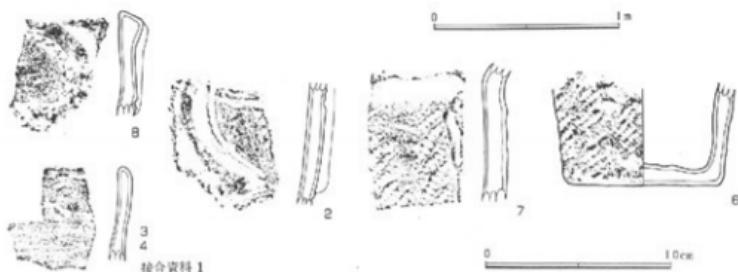
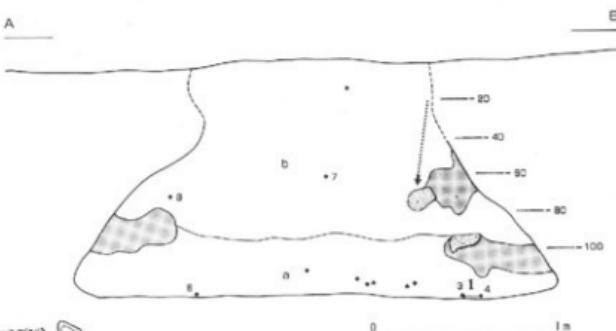
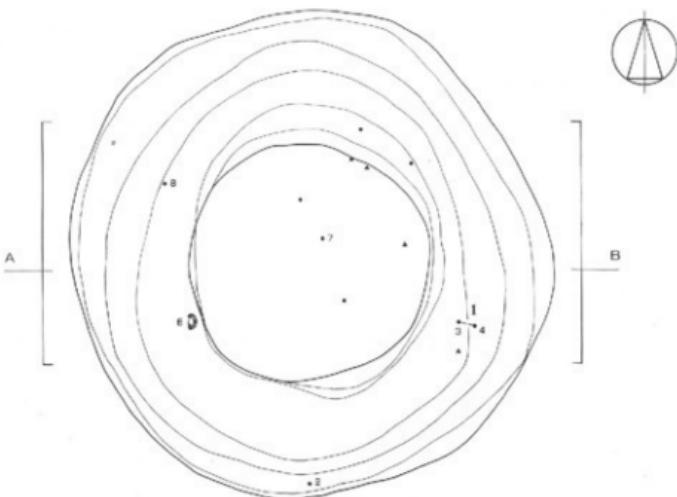
遺物の出土状態 遺物の出土数はドット・マップに示したように非常に少ない。平面分布は、中央より西側に2個、東側に12個がまばらに散在する。こうした遺物の出土レベルは、b層の3個を除くと、大部分のものは底面またはその近くから出土している。遺物は土砂の埋没がはじまるとは同時に廃棄されたものと思われる。接合資料は東側の底面上に1例発見された。接合距離が短小であることは、投棄実験例を参考とすれば、土器の破片が落下したときに割れて飛散したよううかがわれる。

接合資料は下記の1例である。

接合資料1 〈深鉢形口辺部〉 3△0・4△0

なお後述する胴部破片2は、第一号土壤から出土した胴部破片20と、文様をはじめ胎土、焼成、色調などが酷似しており同一個体の破片であるように考えられる。

遺物の概要 小破片が多く拓影として使用できるものは僅かに5個である。口辺部の8は隆起線で枠状文を区画し、その内側に沿って半截竹管工具の外側で有節沈線文を1条押捺する。接合資料1は無文の口辺部である。2は胴部の破片で円弧を描く隆起線文が連結し垂下する。この隆起線には複列の内側を使った有節沈線文が付随する。7の縦文を縦位に回転した胴部には太い沈線が1条みられる。6は底部の破片であり、縦文の押捺法は縦位回転によっている。底面は無文である。

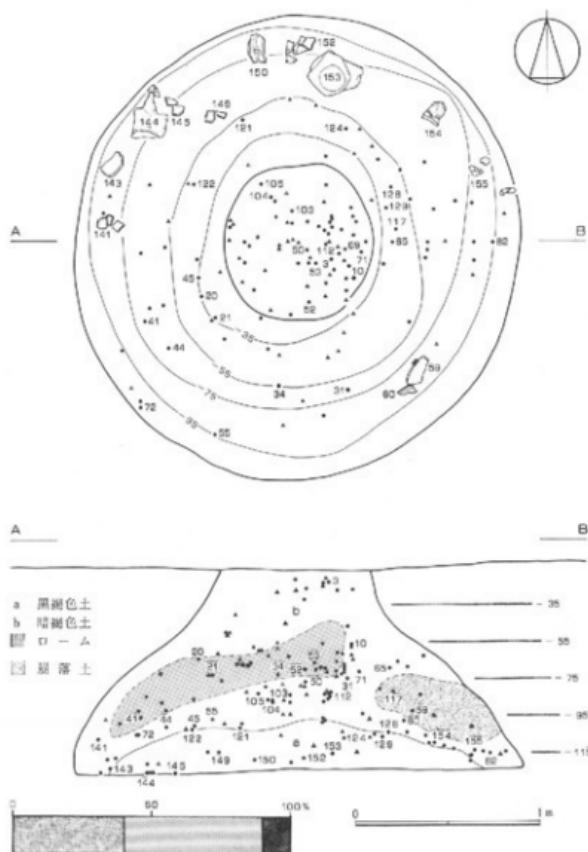


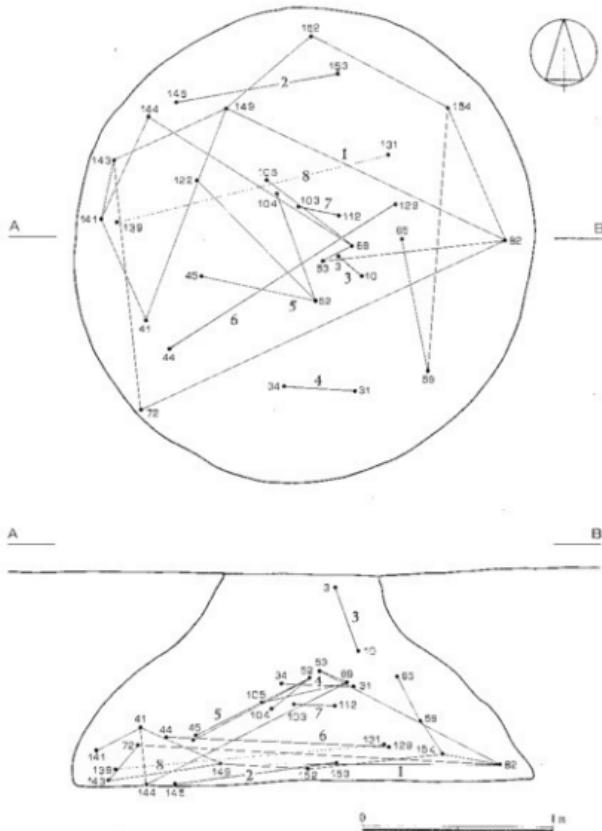
第二〇図 第七号土壙遺物分布・接合関係・出土遺物実測図

7 第八号土壤（第二一～二四図、図版第一二・二九）

形状・規模 平面形は、確認面の開口部、頸部、底部ともに略円形を呈する。開口部の直径は約80cmを測り、良好な状態で遺存しているが、頸部の南西壁面に崩落が認められる。底部の直径は東西240cm、南北250cmの大きさを有し、底面はほとんど平坦である。深さは確認面から107cmである。断面形は袋状を呈する。

埋没土 土壌内の土砂は上下2層に大別できる。底面上の暗褐色土aは、木炭・焼土粒子を混入するやわらかい土砂である。黒褐色土bは、ローム粒子を含んだややしまりのある土砂で確認面まで堆積する。この層中には、ほぼ中央より西南側にロームを主体とした廃棄土が介在



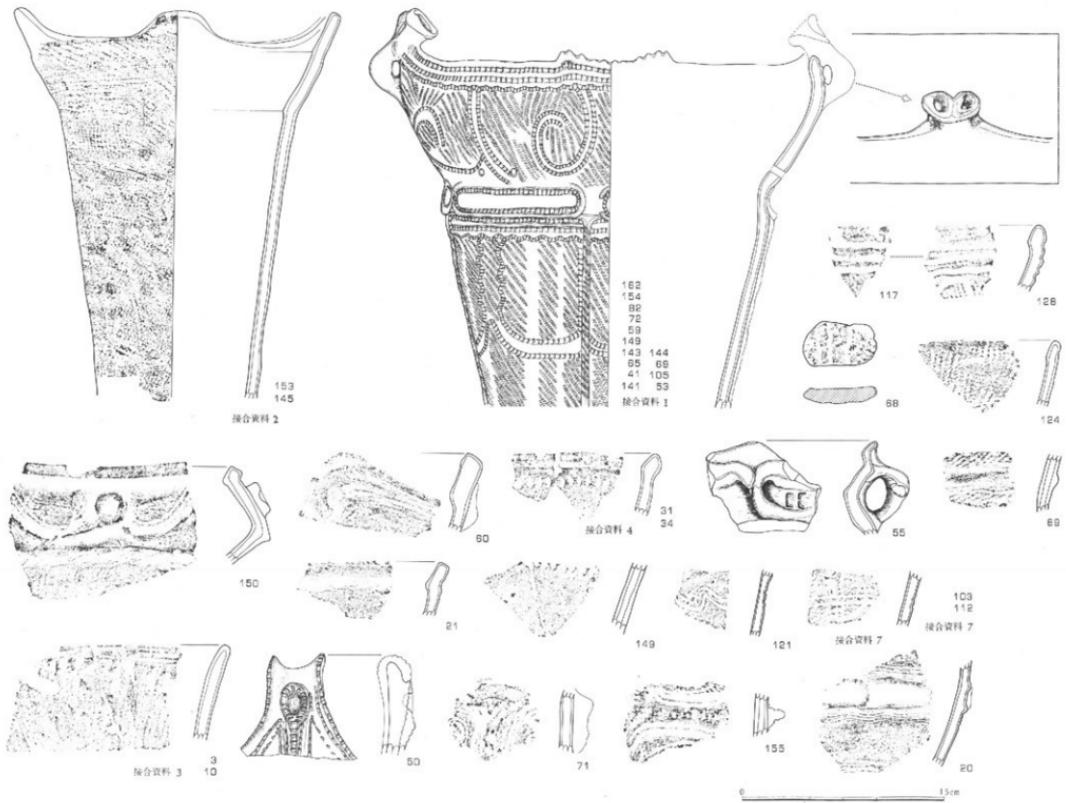


第二二図 第八号土壤接合関係図

し、また東壁の底部近くに赤橙色の大きい崩落上ブロックが存在するが、これは東南側の頭部付近から落としたものと思われる。

遺物の出土状態 平面上から観察したドットの散在状況は、開口部付近に多くみられ、周縁部にも拡散している。特に北西側周壁に沿っては大型の破片が多く存在する。こうしたドットをA-Bセクションに投影すると、口頭部付近には若干のドットが散在するだけで、多くは底面から確認面下55cmの範囲にほとんど集中的に認められる。

接合資料は8例を抽出したが、このうちの接合資料1のありかたは、広い範囲に散在する14個



第二三図 第八号土壤出土遺物実測図

の破片が接合し、その最大レベル差は55cmを数える。他の7例を含めた接合関係図が示すように、すべての遺物はほとんど同時に廃棄したと考えられる。

土器破片109個の表裏関係は、表44個(40%)+裏54個(50%)+立ち11個(10%)=109個(100%)になる。この関係は堅穴住居址における事例と同様である。

接合資料は下記の8例である。

接合資料1<深鉢形口胴部>152▽5・154△15・59▽30・65▷55・53▽55・82▽8・149▽13・41△30・144▽0・69▽50・53▽55・72▽22・143▽5・141▽18・105▽41

接合資料2< 同 >153△10・145▽0

接合資料3< 同 >3△100・10▷68

接合資料4< 同 >31△48・34▷50

接合資料5<深鉢形胴部>45▽25・104▽37・52△53・122▽22

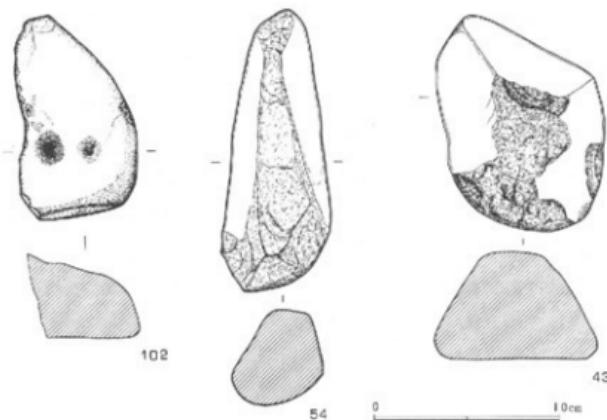
接合資料6< 同 >44▽25・129△18

接合資料7< 同 >112▽40・103△39

接合資料8< 同 >131△18・139△10

遺物の概要 出土した遺物の総数は158個である。その内訳は土器破片109個、石器3個、自然石46個となる。土器破片の中には土器片鍾と思われるものが1個(68)存在する。

縄文土器 出土土器は、阿玉台式の範疇に収まる一群と、この仲間に属しない一群とに大別で



第二四図 第八号土壤出土遺物実測図

きる。後者の土器は、報告例が比較的少ない資料であるが、日立市諏訪遺跡や大宮町梶巾遺跡などの土壤群から類似土器が出土している。これらの土器群は、鈴木裕芳氏が諏訪遺跡の資料を整理分類した第7群土器に該当すると思われる。

阿玉台式の主要な破片の中には、口辺部を内側に強く屈曲させ、環状に隆起線を貼付し、そこから半截竹管の内側を利用した有節沈線が弧状に3～4列配される150。把手の部分で隆起線上に刻目が付され、その両側を複列の有節沈線で加飾する50。平行沈線が引かれる胴部の20。口縁部に爪形文列を施す接合資料4。無文で波状口縁となる60や平縁の深鉢形などがみられる。

接合資料1は阿玉台式に属しない一群である。口辺部を内湾曲させて大きく開く深鉢形などの器形で口縁上に把手が付加される。口縁の内側に突出した把手の形状は、周縁を円形に張りだし、内部をくぼませ両眼を強調したつくりで、動物形の顔面、とりわけその正面と側面観は蛇形に近い表現であるように思われる。

口辺部と胴部の文様帶は、繩文を押捺し有節沈線が多用される点では手法を同じくするが、頸部の細い隆起線区画によって一応分離できる。口辺部に施文される沈線は、半截竹管工具の外側を用いた有節沈線である。この沈線は、口縁に沿って、あるいは湾曲部の空間を弧状、渦巻状に複列で描出する。胴部の文様帶は、頸部から垂下する隆起線によって長方形の区画に分割し、内部を有節沈線で弧状、鋸齒状に組合せた独特の文様を構成する。繩文は2段の原体で縦位に押捺されるが、これは有節沈線で施文した後に行われる

口縁部117・128（同一個体）の破片も半截竹管の外側を使用した有節沈線である。

接合資料2は波状口縁の深鉢形を呈する。弱く内湾曲して外方に開く口辺部の内側に稜を有する。器面全体に繩文を斜行させている。

土製品 68は胴部の破片を隅丸長方形に近く調整し、長軸中央の一端に小さい切り込みを行っている。大きさは長軸5.5cm、短軸3.2cm、厚さ1.1cmである。一部欠損しているが、形状と大きさから土器片鱗の未完成品であろうと思われる。

石 器 砂岩を材料とした3個の石器が存在する。102は実測図左側の折損部に近く浅いくぼみが2か所に認められる。54は長さ15cmの長目の縫を整形し丸味をもたせている。下端部の面に打痕を残し、握持として使うには最適の大きさである。重量520g。43は底面が平坦な台形を呈し、上端面に打痕を留める。地面に固定すれば細工台として機能する。重量680g。

8 第九号土壤（第二五・二六図、図版第一三・三〇）

形状・規模 開口部、頸部、底部の平面形は略円形を呈する。開口部は、東西 120 cm、南北 115 cm の大きさを有するが、東南側は 10 ~ 20 cm 幅の崩落が認められるので、構築時の直径は 100 cm 程度と思われる。底部の直径は東西南北ともに 260 cm を測る。底面はほぼ平坦であり、深さは中央部が約 150 cm である。断面の形状は、底部が大きく開く袋状を呈するけれども、確認面下 20 ~ 80 cm 間の頸部付近にかなりの部分崩落が認められる（A-B セクション参照）。

埋没土 土砂は 5 層に区分できる。底面から暗褐色土 a、黒褐色土 b、ローム粒子を多く含んだ黒褐色土 c、黄褐色土 d、黒色土 e の順に堆積する。東壁寄りの d は、大部分が崩落した土砂であって、ロームや軽石層のブロックも混在している。また c の西壁付近をみると、ここにも崩落した軽石層の大型ブロックやロームが多量に存在する。頸部はこうした土砂の崩落により著しい変形をきたしたものと思われる。

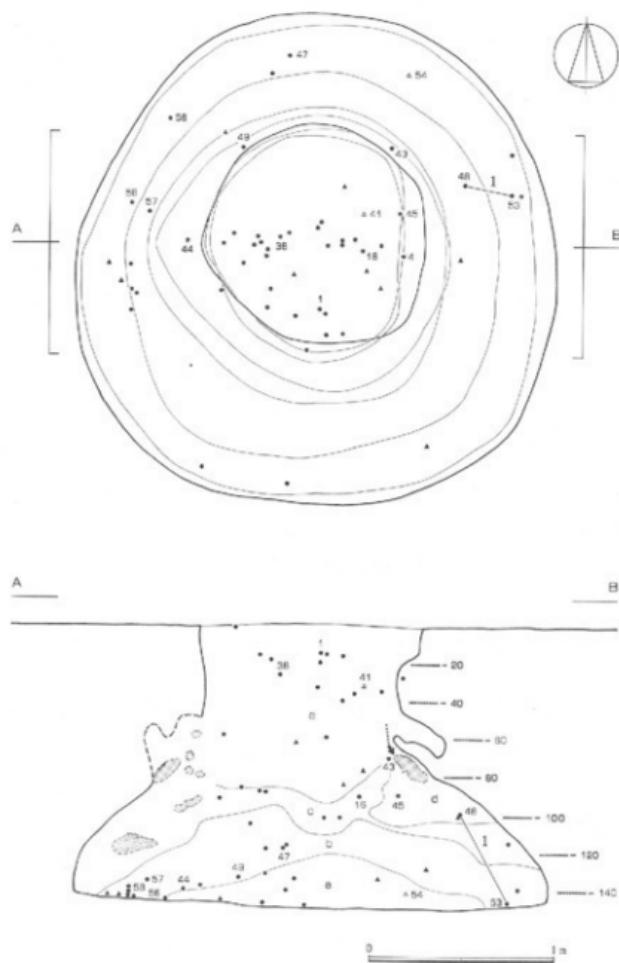
遺物の出土状態 ドットで記録した平面分布は、開口部内にややまとまりをみせ、その他の周縁はまばらである。これらのドットを断面図に投影すると、底面から開口部付近にかけてほぼ全面に散在するような状態で出土している。接合資料も 1 例抽出されたが、これはレベル差約 50 cm で接合する。

土器破片の表裏関係は、表 14 個 (30%) + 裏 19 個 (40%) + 立ち 14 個 (30%) = 47 個 (100%) という比率である。

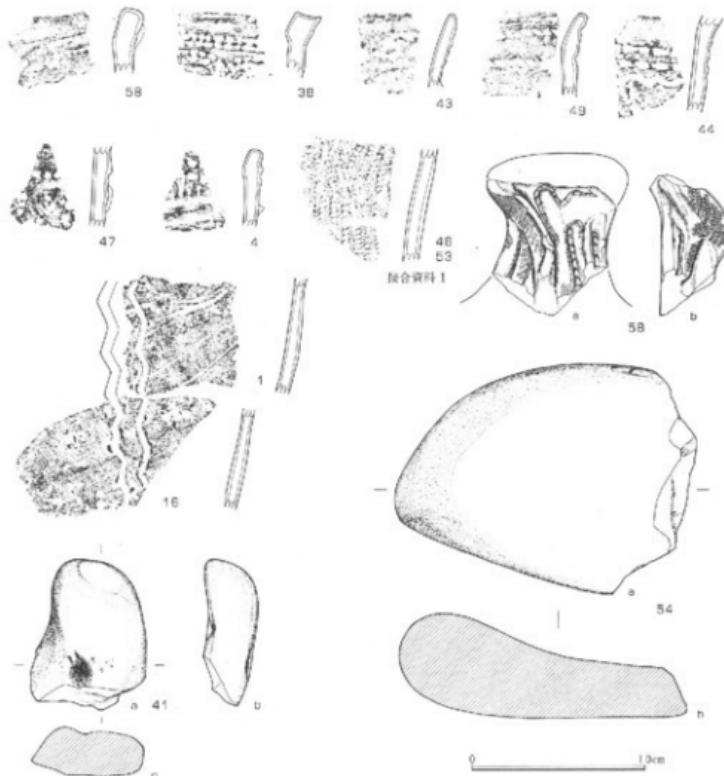
遺物の概要 総数は 58 個を数える。土器破片 47 個、凹石 1 個、石皿？ 1 個、自然石 9 個に分れる。

縄文土器 小破片のために口縁部の形状は不明なものが多い。58 と 38 は波状口縁に、49 と 44 は平縁になるように思われる。口縁部の文様は、有節沈線や鋸歯状沈線を施したものと、無文地に縄文原体を 2 列に押捺する側面圧痕文の 49 は、東北南部の大木 7b 式に対比できよう。また波状口縁の把手部 58 には、隆起線上に縄文がかけられ、その両側に有節沈線を施している。1 と 16 は同一個体の胴部で 2 本の太い沈線が鋸歯状を描いて垂下している。

石器 41 は長目の自然石を利用した凹石で一端を欠損する。使用痕のくぼみは直径約 1 cm、深さ 0.5 cm である。石質砂岩、54 は長径約 17 cm、短径約 13 cm の大きさを有する扁平な砂岩である。実測図上面のくぼんだ部分は、全面平滑になっており、おそらく石皿として利用されたものと思われる。



第二五圖 第九号土壤遺物分布・接合關係図



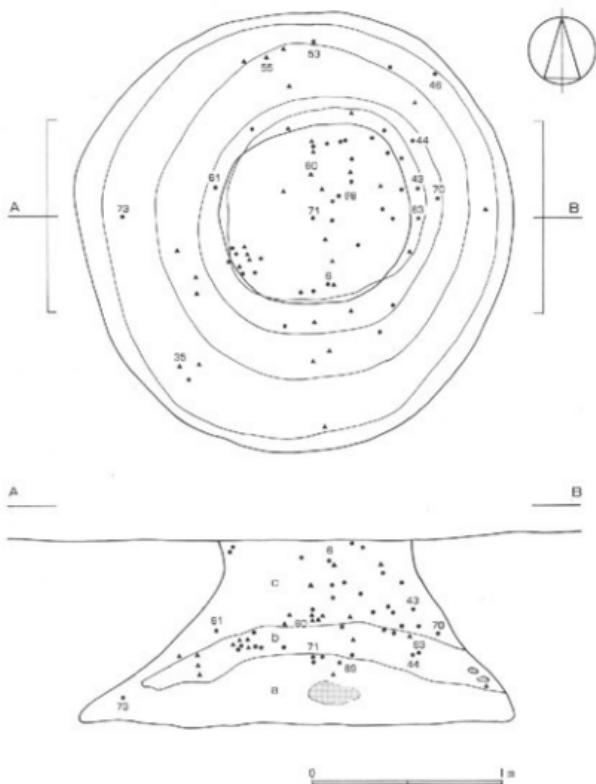
第二六図 第九号土壙出土遺物実測図

9 第一〇号土壙（第二七~二九図、図版第一四・三一・三二）

遺存状態 北東側の開口部と頸部に若干の崩落が認められる以外は、おおむね良好な状態で残存している。

形状・規模 開口部と頸部の形状は、多少変形しているけれども、構築時は円形を呈していたと思われる。底部の平面形は略円形である。確認面の開口部径は、東西約 100 cm、南北約 90 cm、頸部径約 100 cm、底部径約 230 cm の大きさである。深さは 95 cm を測り、その断面形は底部がひろがる袋状を呈する。

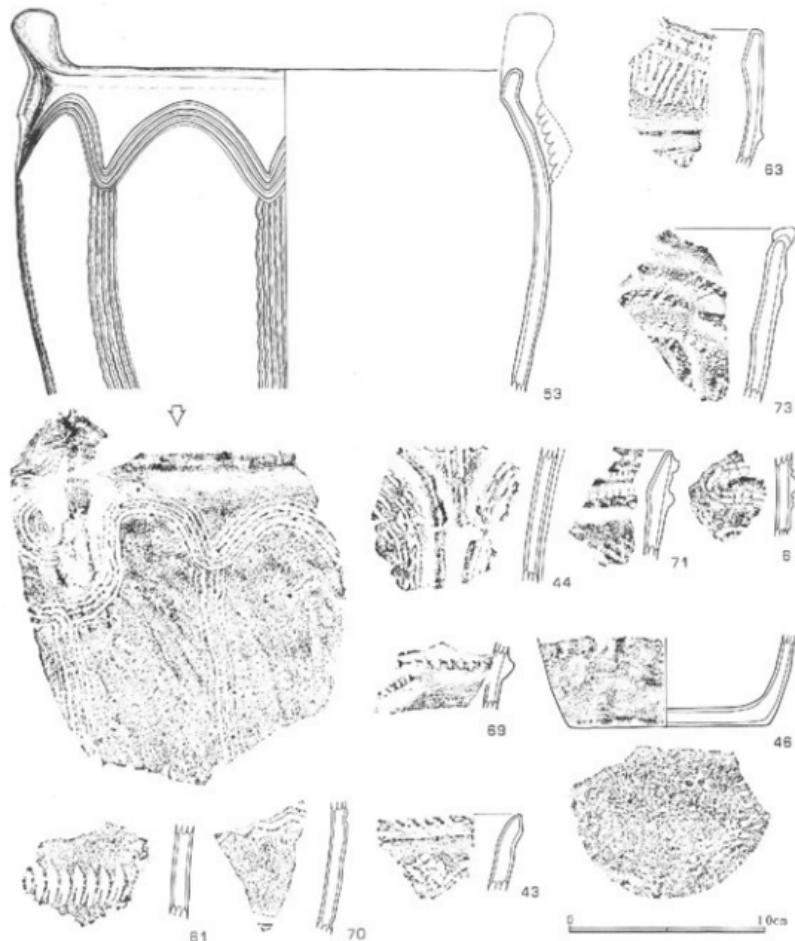
埋没土 土砂は 3 層に区別でき、底面から褐色土 a、ローム粒子やロームの小ブロックを混入した黒褐色土 b、その上部に暗褐色土 c が堆積する。底面上の褐色土中には、炭化物や焼



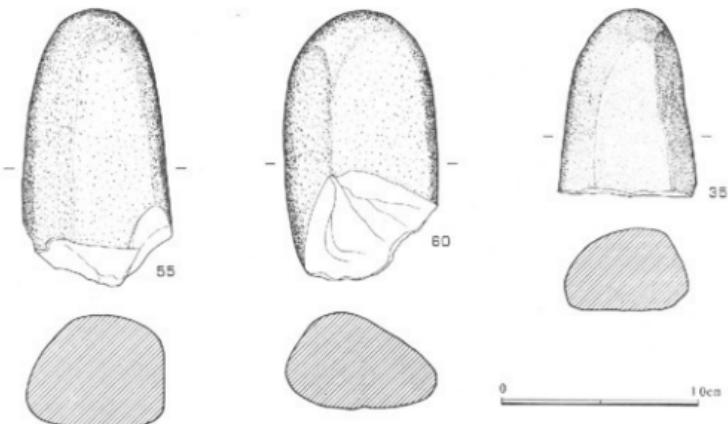
第二七図 第一〇号土壙遺物分布図

土が少量含まれており、いずれも人為的に廃棄した土砂と考えることができる。

遺物の出土状態 平面分布の状態は、開口部内から周囲に拡散するようなありかたを示すが、特に変った傾向は指摘できない。A-B セクションに投影した分布を観察すると、底面上の a 層上面に僅かに存在する他は、大部分が b・c 両層にまたがって出土している。土器の破片は 53 △ 15 を除くとすべて図示したような小破片である。接合資料は抽出できなかった。



第二八図 第一〇号土壤出土遺物実測図(1)



第二九図 第一〇号土壌出土遺物実測図(2)

土器破片は、表19個(44%) +裏14個(33%) +立ち10個(3%) = 43個(100%)という関係を示す。

遺物の概要 総数は77個である。内訳は土器破片43個、石器(敲石)3個、自然石28個に別れる。

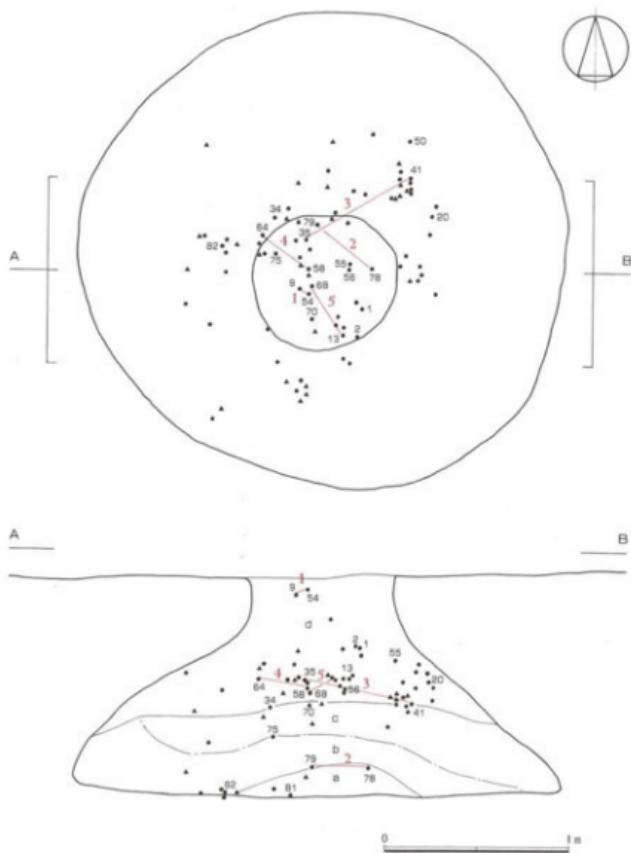
縄文土器 深鉢形の大型破片53は、口縁部に突起を有し、多条の櫛歯状工具で横位に波状文を描き、さらに各波底部から同一施文具による沈線を垂下させている。6・44・71は、隆起線に沿って有節沈線が施され、69は隆起線上に刻目をともなう。63・73は波状口縁の破片である。前者は隆起線で区画した内部に縄文を施し、さらに口縁に沿って複列の刺突を加えている。後者は低平な隆起線上から斜縄文を押捺する。43は縄文を押捺した口縁部である。胴部破片の61には爪形文列、70には鋸歯状の沈線が認められる。46は底部の破片で底面に文様は付されていない。以上の破片が本土壌の主要な土器である。

石 器 砂岩質の長目の自然砾の一端を打欠したもので、打欠面に打撃痕が残っている。敲石として使用されたものであろう。55は現存長14cm、最大幅7.5cm、重量760g。60は現存長13.5cm、最大幅8cm、重量590g。35は現存長9.5cm、最大幅7cm、重量330gを測る。

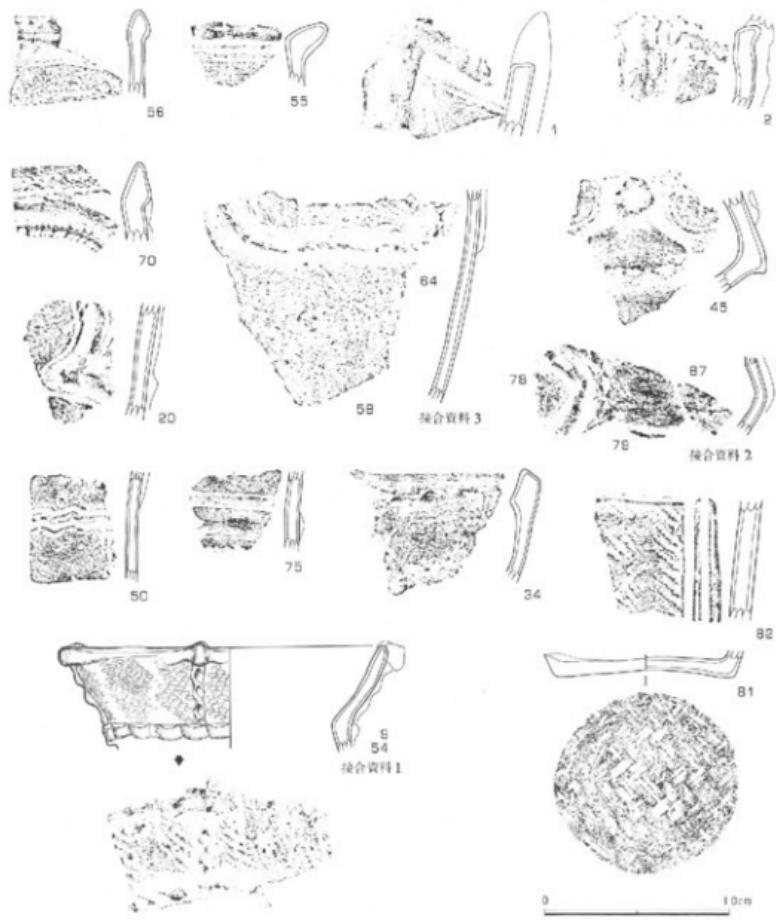
10 第一一号土壤 (第三〇・三一図。図版第一四・一五)

遺存状態 開口部と頸部はほぼ良好な状態で残っている。頸部直下から底部に移行する壁面のうち、北東側と南東側の2か所には、長さ100cm、厚さ15cm前後におよぶ崩落がみられる。

形状・規模　開口部、頸部、底部とも略円形を呈する。開口部径は東西約 80 cm、南北約 75 cm。頸部は僅かに狭くなつて 75 cm を測り、底部径は東西が 265 cm、南北が 250 cm と若干短くなる。確認面からの深さは 120 cm である。A-B セクションに残る断面形は、比較的形の整った袋状を呈する。



第三〇図 第一一号土壤遺物分布・接合関係図



第三一図 第一一号土壤出土遺物実測図

埋没土 底面の中央にロームを主体とした明褐色土 a があり、その上部に炭化物を少量含んだ暗褐色土 b、黒褐色土 c、さらにローム粒子を僅かに混入した黒色土 d の順序で堆積する。北東壁と南東壁面の崩落ロームは、c・d 層中に介在している。

遺物の出土状態 ドットで記録した平面分布は、開口部を中心にして周囲に拡散するようなありかたを示し、第一〇号土壙の分布状態に類似し、底部周縁にはほとんど散在しない。これを断面図に投影してみると、接合資料 2 を含む若干のドットが底面またはその付近に存在し、多くのドットは d 層の下部を中心に集中する傾向が認められる。

なお口辺部 45 の破片は、第八号土壙出土の 150 と同一個体となるので、こうした破片は複数の土壤にまたがって廃棄されているものと考えられる。整理期間があれば類例は増加しよう。

土器破片の表裏関係を調べてみると、表 37 個 (60%) + 裏 18 個 (30%) + 立ち 6 個 (6%) = 61 個 (100%) という比率になる。

接合資料は北西—南東を指向するものが 4 例、北東—南西方向のものが 1 例、合計 5 例が抽出できた。各接合資料間のレベル差は 20 cm 以内に収まる。

接合資料 1 〈深鉢形口縁部〉 9△110・54▽112

接合資料 2 〈深鉢形頸部〉 78△14・79▽16

接合資料 3 〈深鉢形胴部〉 35△64・41△50

接合資料 4 < 同 > 58▽58・64△65

接合資料 5 < 同 > 13△64・68△56

遺物の概要 総数は 86 個である。内訳は上器破片 61 個、自然石 25 個 (29%) になる。本土壙の土器破片も全体に小破片が多く、器形や文様構成などが十分に把握しえない。

縄文土器 破片は無文地に隆起線文、沈線文などを施した一群と、縄文や隆起線文、沈線文などを組合せた一群とに大別できる。口縁部 55 は肥厚して外反し、口縁に沿って複列の半截竹管内側を使った有節沈線文が深く押され、56 には浅く施文される。1 は波状口縁の波頂部で太い隆起線で区画し、複列の内側有節沈線を施す。2 の口縁部は半截竹管の外側を使って有節沈線文を描いている。70 の有節沈線は棒状区画に沿って浅く施される。45 の口辺部は第八号土壙の 150 と同一個体であり、盲孔を有する円形浮文を起点として、半截竹管の内側を使い有節沈線を描出す。接合資料 2 の隆起線には単列の外側有節沈線が付随する。接合資料 3 の隆起線上には刻目が加えられる。20 は円弧を描きながら垂下する隆起線で、両側に沈線や有節沈線が付加される。50 は半截竹管の内側で引いた鋸歯状沈線である。34 は波状口辺部で無文の浅鉢形であろう。

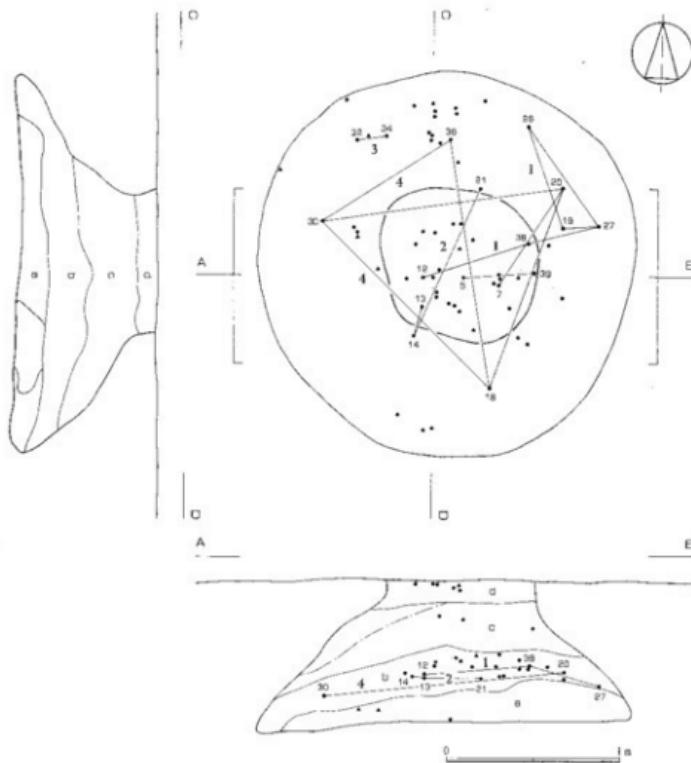
接合資料 1 は口辺部を弱く内湾曲させて開く深鉢形で、口縁に小さな突起を付し、そこから隆起線を垂下させ、頸部の横位に貼付した隆起線と方形の区画を構成する。器面に縄文を押捺した粗雑な上器である。82 の胴部は縄文を継位に回転し、太目の沈線で方形に区画している。

11 第一二号土壤（第三二・三三図、図版第一五・三二）

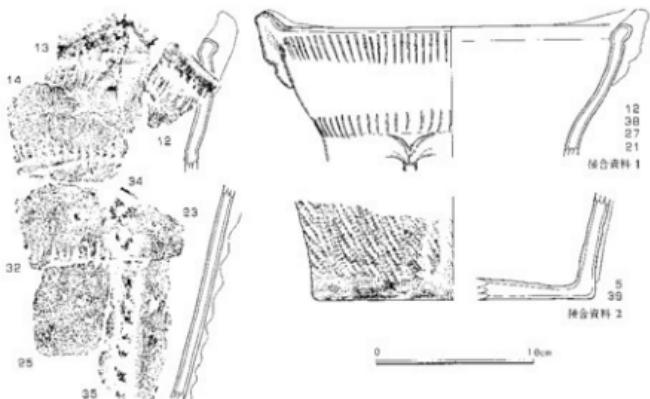
遺存状態 開口部から頸部にかけて崩落が認められ、著しく変化している。頸部直下の壁面で崩落が著しい部分は北西側である。

形状・規模 確認時の開口部、頸部の形状は、周縁部に崩落がみられ不整円形を呈する。底部は略円形である。開口部は東西 90 cm、南北 85 cm を測るので、構築時の直径は 80 cm 程度と思われる。底部は 215 ~ 220 cm の大きさを有する。確認面から底面までの深さは 80 cm である。断面形は第一一号土壤と同様に底部が外方に張りだす袋状である。

埋没土 層序は 4 層に区分できる。底面には黒色土・赤橙色ブロックを含むローム a、その上に黒色土 b、さらにローム c（西壁付近は黒色土がやや多く混在する）、最上部に黒色土 d



第三二図 第一二号土壤遺物分布・接合関係図



第三二圖 第一二号土壠遺物水測圖

が堆積する。各層は全体にやわらかく廃棄した土砂であることがわかる。

遺物の出土状態 平面分布の状態は、第一〇・一一号土壙の分布傾向とほとんど変わりない。こうした開口部を中心に拡散する遺物または接合資料のありかたは、遺物を廃棄（投棄）した場合もっとも自然な事象の好例と考えられる。垂直分布は、底面付近と開口部に若干の遺物が散在するけれども、4例の接合資料を含む遺物は、b層中から集中的に出土しており、主としてこの層が堆積している時に廃棄された遺物が大部分である。

接合資料は下記の4例が抽出できたが、1～3は同一個体の破片である。この他にも未接合の破片が若干存在する。

接合資料1 〈深鉢形口脚部〉 12△22・38△32・27▽21・19▽23・26▽11

接合資料2 < 同 > 13▽24・21▽25・14▽25

接合資料3 <深鉢形胴部> 32△4・34△10

接合資料4 < 同 > 36△12・30△19・20△28・7▽27・18▽26

遺物の概要 総数は56個であって、土器の破片が47個、自然石が9個である。拓影図に使用した以外のものは大部分小破片であり、接合資料1に関係する同一個体と思われる。

縹文土器 接合資料1は、口辺部を内湾曲させて開く深鉢形の器形を呈する。復元すると口径約25.0cm、器高は28.0cm前後になろう。口縁部は波状を呈し、そこに縦長の突起が付加される。文様は爪形文列が口縁部、頭部、胴部にはほぼ等間隔でめぐらされ、さらに頭部から太い隆起線が垂下する。この隆起線上には刻目が施される。接合資料2は底部の破片である。底径17.5cmの大型土器で、隆起線を垂下させた上から縹文を同軸押捺している。

12 第一三号土壤 (第三四~三六図、図版第一六・三三)

遺存状態 開口部、頸部、底部上半の壁面周囲には、著しい崩落が認められ、遺存状態はすこぶる悪い。

形状・規模 開口部、頸部と底部上半の形状は、いずれも周縁部を崩落しているが、円形を基本に掘り込んでいる。開口部は東西約130cm、南北もほぼ同様であり、頸部は約110cmを測る。この数字は、崩落がみられるために、構築当時より若干大きくなっていると思われる。底部径は東西が長く225cm、南北が僅かに短くなり200cmである。深さは約120cmになる。断面図をみると、埋没土の中に崩落したローム (A-Bセクション右側) が落ち込み、これを壁面に接合復元すれば袋状を呈する。左側壁面のくぼんだ部分も同様である。なお南北に設定したC-Dセクション北側の土層の状態から、壁面の崩落過程をつぶさにうかがい知ることができる。

埋没土 比較的層序の区分は明瞭である。粘性の強いロームを主体とした暗褐色土a、ローム粒子や小ブロック、木炭細片を含む暗褐色土b、赤橙色土や木炭細片を混入する黒褐色土c、ローム小ブロックを含んだ暗褐色土d、ロームや赤褐色土が混在する黒色土eの順で堆積し、c-d層の付近には崩落土の大小ブロックが介在する。

遺物の出土状態 遺物の出土量は他の土壤に比較して多い方である。平面分布のありかたを観察すると、開口部の中央部分とそこからやや北東に離れた部分に集中し、周縁に移行するにしたがいまばらになる。この分布の状態をA-Bセクション(幅1m)に投影してみると、中間の層にはほとんど存在せずに、開口部～頸部付近の上層と、袋状を呈する下層に分離する傾向がうかがわれる。遺物の廃棄行為は、この事実から少なくとも2回にわたり集中的に投棄されていることが理解できよう。

また、実測図29の口辺部(接合資料1と同一個体)は、第一四号土壤からでた接合資料2と接合する。第一三号と第一四号土壤は近接しているので、本例の他にいくつかの破片が、両者の土壤に廃棄されている疑いがある。さらに第一〇号土壤出土の63も同一個体の可能性が認められる。

土器破片の表裏関係は、表52個(37%) +裏69個(48%) +立ち22個(15%) = 143個(100%)という比率になる。

接合資料は下記の9例が抽出できた。

接合資料1 〈深鉢形口縁部〉 18▽92・101▽98……29▽

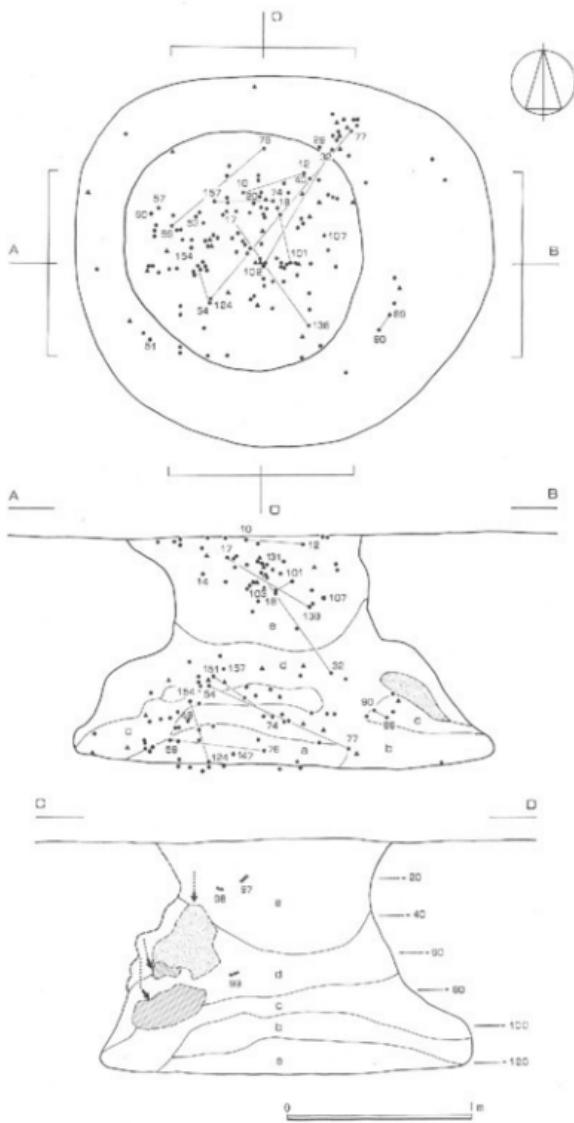
接合資料2 < 同 > 59△13・76▽8

接合資料3 〈深鉢形胴部〉 90▽31・89▽27

接合資料4 < 同 > 74△25・157▽48

接合資料5 < 同 > 77△10・54△40

接合資料6 〈深鉢形胴部〉 154△33・124▽2



第三四図 第一三号土壤出土遺物分布図

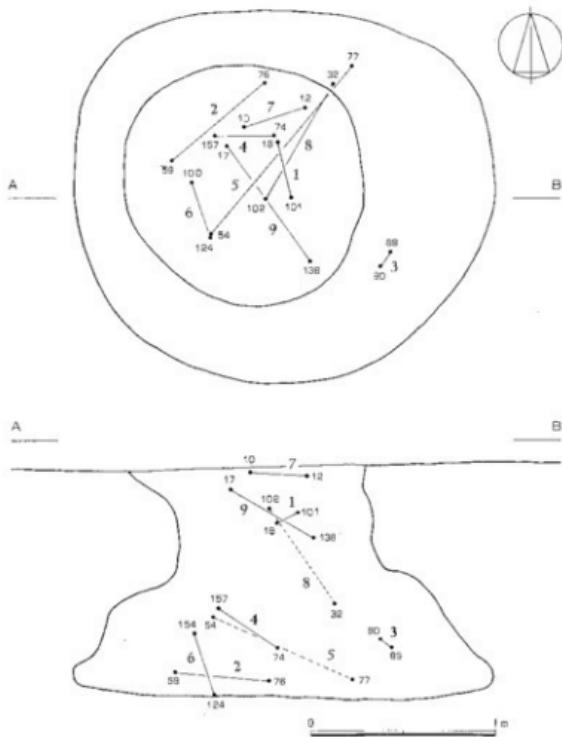
接合資料7 < 同 > 10▽120・12△118

接合資料8 < 同 > 102△103・32▽50

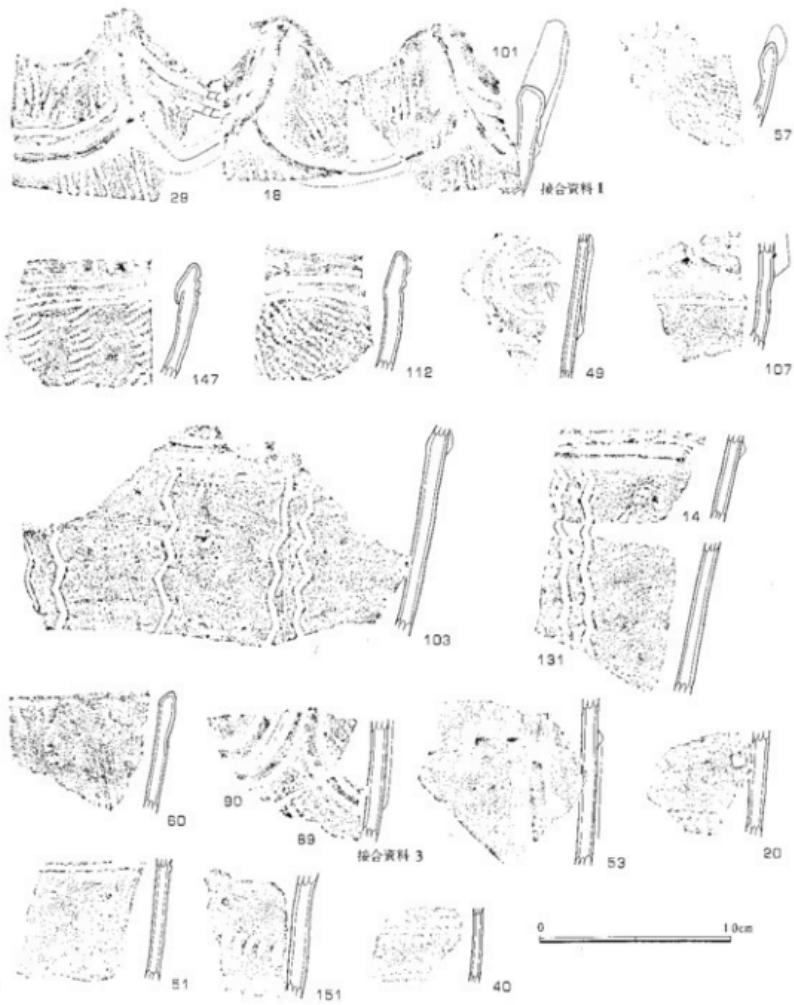
接合資料9 < 同 > 17▽110・138▽86

遺物の概要 遺物の数量は167個である。その内訳は、土器破片143個と自然石24個に分けられる。土器の破片は小さく割れたものが多い。

縄文土器 接合資料1は口辺部の破片であって、口縁に波状の小突起を造出している。この突起は2個一組となって等間隔に複数が存在する。波頂部から円弧を描くように断面三角形の隆起線を貼付し、口縁や隆起線に沿って複列の外側を使った有節沈線文が施文される。隆起線の区画内には縄文を押捺するが、胴部の文様構成は不明である。この土器は先に述べたように第一四号土壙出土の破片と接合する。57は波状口縁で波頂部の破片である。縄文地の上に2本の細い内側



第三五図 第一三号土壙接合関係図



第三六圖 第一三號土壤出土遺物實測圖

の有節沈線を縦と横に引いている。147と112も波状口縁の一部であって、前者の口唇上には竹箒を押し、口縁に沈線、その下に繩文を縦位に施文する。後者は繩文地を2本の沈線で区画する。接合資料3は繩文地に隆起線を貼付し、その両側に沈線が加えられる。

繩文を施文しない土器には、隆起線や各種の沈線、爪形文などを組合せて文様が構成される。60は小型の無文深鉢形である。103、14、131は同一個体の胴部であって、頸部付近に横位の隆起線を付し、ほぼ等間隔に太口の沈線を鋸歯状に垂下させる。49の胴部には棒状の隆起線が区画され、複列で内側の有節沈線が施される。53は隆起線で方形または長方形区画をつくり、隆起線の両側に有節沈線文を附加している。20は隆起線を伴わない有節沈線文のみで区画を構成する。爪形文列を押した151も胴下部の破片である。図示したような小破片が多く文様の構成は部分的にしか窺知できない。

13 第一四号土壤（第三七・三八図、図版第一七・三四）

遺存状態 土壤の南側部分は調査区域外となるために未発掘である。発掘した北側部分については、開口部と頸部に崩落が認められる。

形状・規模 発掘した北側のプランは、開口部、底部ともに円弧を描くので、他の土壤と同様に略円形を呈するものと考えてよい。開口部は東西約130cmを測るが、壁面に崩落もみられるので、この数字より若干小さかったと思われる。底部の直径は230cmである。確認面からの深さは約145cmになる。断面形は袋状土壤の形状を呈する。

埋没土 本土壤付近の上層の状態は、最上部に黒色土が堆積し、現地表面から深さ30cm前後までを耕作のために攪拌している。その下に厚さは一定しない赤橙色の軽石層が薄く介在し、さらに1m前後のローム層があり、黄白色ないし黄褐色の鹿沼層に移行している。土壤の底部付近はこの鹿沼層に達する。

土壤内の上層区分は比較的明瞭である。底面上に木炭、焼土粒子を混入した黒色土a、ローム粒子を多く含んだ明褐色土b、その上部に暗褐色土cが厚く堆積する。この層の下部は黒色土がやや多く混在しているが、特に明瞭な区分線は引きがたい。底部に近い周壁寄りにはロームの大きい崩落土がブロック状に存在する。このブロックはおそらく頸部付近から落下したものと考えられる。断面図をみると、土壤は赤橙色の軽石層上面から掘り込んでいることがわかる。

遺物の出土状態 土壤の南半部が調査区域外となるために未完掘である。このために平面分布の全体像は遺憾ながら把握できない。北半部にかぎって観察すると、開口部を中心にまばらに散在している。こうした分布のありかたが、南半部にまでひろく及ぶのか、集中的に存在するのかわからない。一方、A-Bセクションを使った投影図によると、底面上にはほとんど遺物がなく、西壁のc層下部から東壁方向に拡散分布する傾向がうかがわれる。この投影図を基に考えれ

ば、北半部の大部分の遺物は東側から廃棄したことになろう。

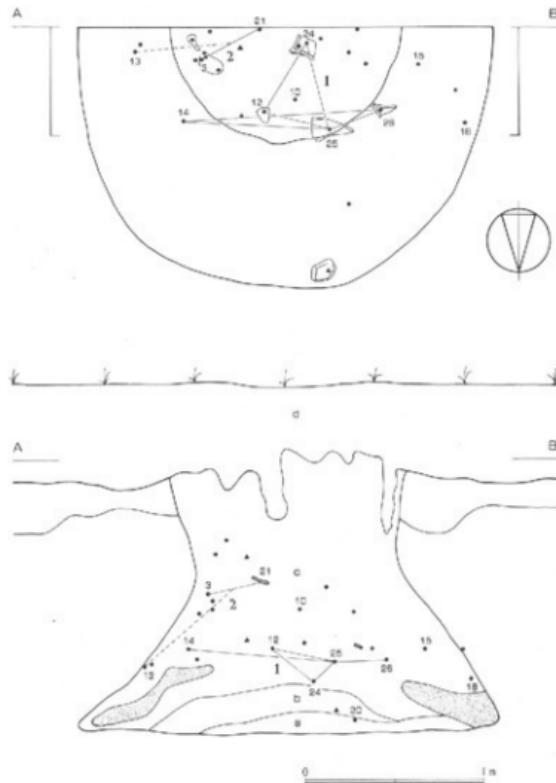
出土土器の中で接合資料2の口辺部は、第一三号土壤の29と接合し、同一個体の破片が複数の土壤にまたがって廃棄されている。

接合資料は下記の2例が抽出できた。

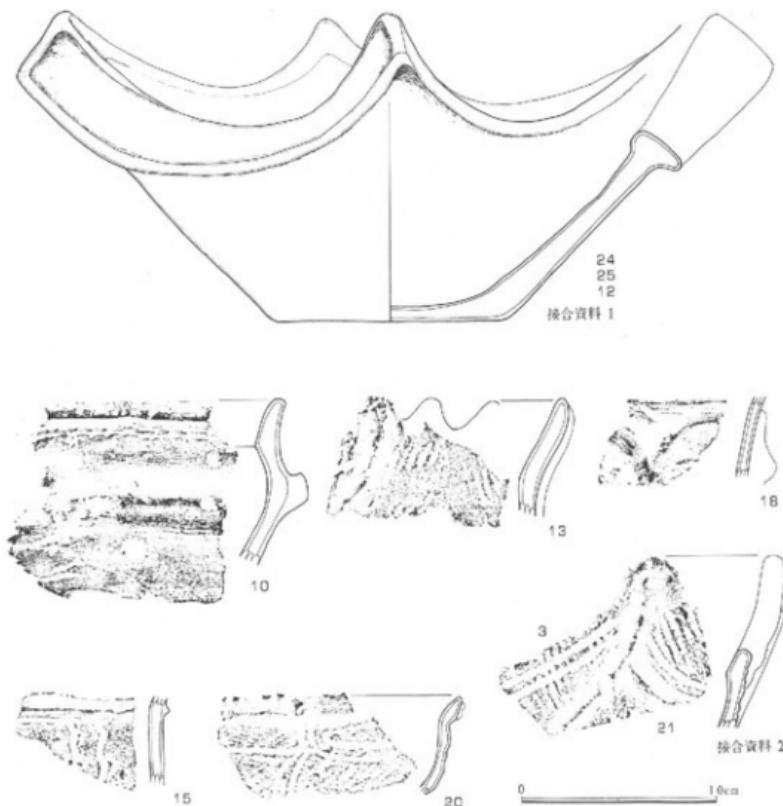
接合資料1 〈浅鉢形口底部〉 24△30・12△46・25△40・26△40・14▷47

接合資料2 〈深鉢形口辺部〉 3▷78・21△85

遺物の概要 出土遺物の総数は僅かに28個である。内訳は土器破片25個と自然石が3個である。接合資料1の浅鉢形土器は、一個体の土器となるには若干破片が不足しているので、おそらく未発掘の部分に存在しているのかもしれない。



第三七図 第一四号土壤遺物分布実測図



第三八図 第一四号土壙出土遺物実測図

縄文土器 接合資料 1 は波状口縁を呈する浅鉢形土器である。口唇部は内側と外側に肥厚させ、上面を平坦に大きく作出している。器面は無文である。10 は口辺部が内湾曲して開き、口縁に至って外反する深鉢形の土器である。太い隆起線文を貼付し、口縁と隆起線文に沿って半截竹管の内側で施文した有節沈線文が押される。接合資料 2 は 13 の口縁部と同一個体である。18 は脣部の Y 字状隆起線、15 は断面三角形の隆起線文の下から 2 本の沈線が垂下する。20 は口縁を短く外反させた浅鉢形を呈する。器面は縄文を押捺し、さらに有節沈線文で意匠文が構成される仲間で、阿玉台式に属さない土器群である。

第七章 横穴状遺構の調査

1 第一号横穴状遺構（第三九図、図版第一八）

形状・規模 形状は楕円形を呈する。大きさは長径約130cm、短径約90cm、深さ約20cmである。横穴状に浅く掘り込んで、底面は平坦な遺構である。底面には炉址やピットは全く認められない。

埋没土 赤橙色土の粒子を僅かに含んだ暗褐色土である。土砂の性状からみて自然流入ではなく埋め戻したものと考えられる。

遺物の出土状態 遺物は大型の破片を含めて10個の縄文土器が出土した。大部分の破片は、A-Bセクションの北側に存在し、垂直分布のありかたをみると、東側のドットの床上レベルが高く、北西壁に移行するにしたがい低くなる傾向がみられる。北東-南東を指向する接合資料からもほぼ同様の傾向が窺知できる。この事実に基づけば遺構内への遺物の廃棄は東側から行われたことになろう。

遺物の概要 遺物はすべて土器の破片であり、確認面から2個、遺構内から10個出土している。破片数が少ない割には良好な縄文中期前半の資料である。

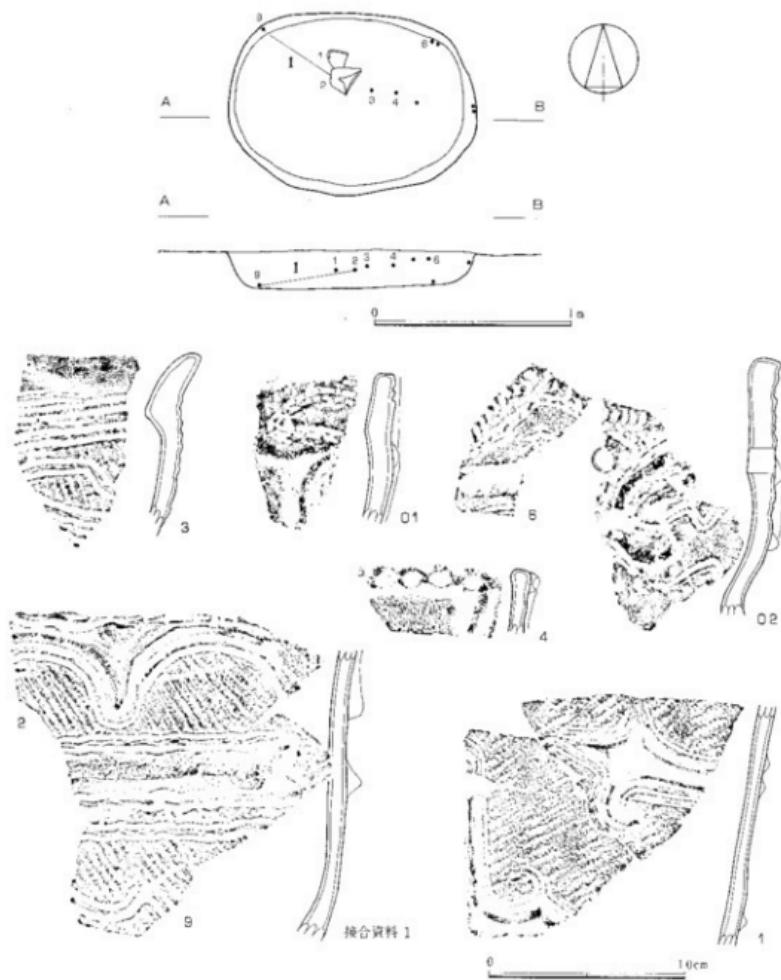
縄文土器 01は確認面出土の口辺部である。円弧を描く隆起線で区画をつくり、内部に半截竹管工具の内側で複列の有節沈線を施す。6と02は同一個体の口辺部で、口縁は波状を呈する。文様の構成は不明であるが、口縁に沿って刻目、複列の内側有節沈線が付され、隆起線の両側に有節沈線文を伴い、半截竹管を使って鋸齒状、山形状の平行沈線文が配される。4の口縁部は、口縁に隆起線を貼付し指頭で押圧を加え、さらに1条の隆起線を斜行させている。

縄文を施し半截竹管工具の内側で有節沈線文、平行沈線文などを配した3は、波状口縁で内面に段を有する。接合資料1は、斜行する縄文地の上に断面三角形の隆起線を弧状あるいは横位に貼り、平行沈線で加飾した胴部の破片である。平行沈線文には有節沈線文的手法はみられない。1も縄文を押捺した胴部破片で、細く貼付した隆起線は先端部が渦巻状を呈する。この隆起線にも片側あるいは両側に平行沈線が付加されている。

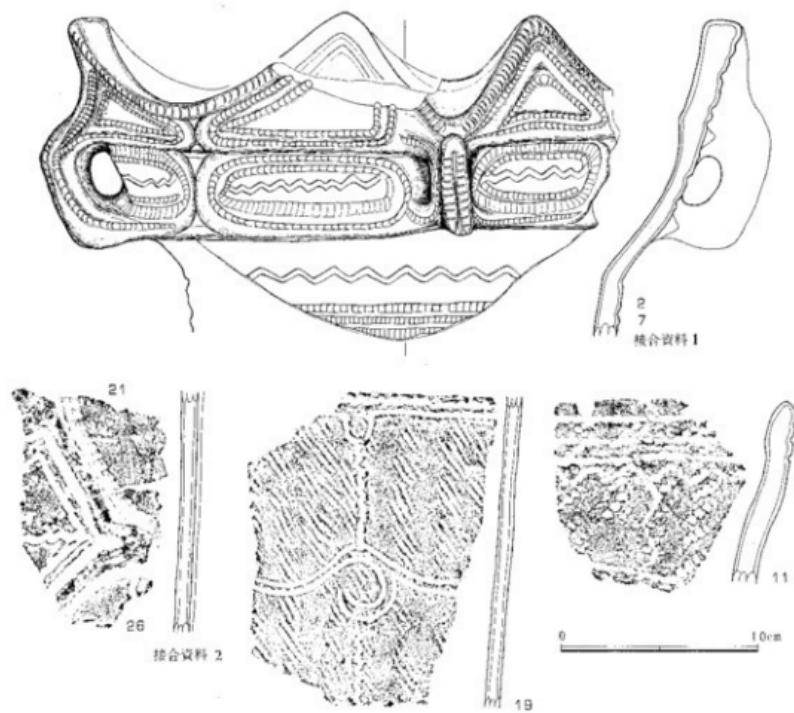
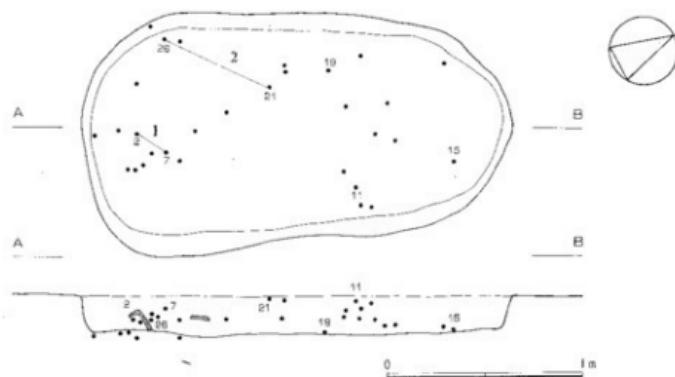
2 第二号横穴状遺構（第四〇図、図版第一九）

形状・規模 形状は南北に長い不整形を呈する。大きさは長径約220cm、短径約110～120cm、深さ約20cmを測る。横穴状に掘り込んだ遺構で、底面は平坦となり、第一号遺構と同様に炉址やピットは存在しない。

埋没土 赤橙色土や木炭粒子が僅かに混入した黒褐色の土砂である。中央付近より北側はややロームが多く混在する傾向がみられた。すべて廃棄した土砂と思われる。



第三九圖 第一號竖穴狀遺構・出土造物実測図



第四〇図 第二号竖穴状遺構・出土遺物実測図

遺物の出土状態 平面分布の状態は、南東側の一部が皆無であり、その他の部分においてはまばらに散在する。A-B セクションに投影すると、底面から確認面の間に分布し、一般的な廃棄のありかたと変わりがない。ちなみに土器破片の表裏関係を調べると、表 12 個 (45%) + 裏 10 個 (37%) + 立ち 5 個 (18%) = 27 個 (100%) という比率になる。

接合資料は 2 例抽出でき、いずれも西壁近くから中央の東側方向に接合する。同一方向から廃棄した資料と思われる。

遺物の概要 総数は 30 個である。内訳は土器破片 27 個、自然石 3 個となる。実測図に使用した以外の土器破片は、小破片と無文の破片である。

接合資料 1 は、2 個の山形状突起を組合せた波状口縁の深鉢形である。口辺部の形状は、内湾曲しながら外方に大きく開き、内面に稜を有する。口辺部の文様帶は、山形状の突起部から環状の把手を造出し、棒状区画を横位に並べ、突起部を三角形状に区画する。把手部と口縁に刻目を施し、各区画に沿って半截竹管工具の外側を使った有節沈線文、鋸齒状沈線文、角押文などが施文される。胴部の上半には、鋸齒状の沈線文、有節沈線文などを配する。接合資料 2 は、円弧状に隆起線が貼付されて、半截竹管工具外側を利用した有節線文、角押文などが付随している。こうした文様構成は阿玉台式に属する土器である。

縄文を綴位に回転押捺した胴部の 19 は、半截竹管工具の外側を使った直線文や有節沈線の曲線文、鋸齒状文などが施文される上器であり、日立市諏訪遺跡出土の第 7 群土器に類似する。

口辺部 11 は、縄文を斜行させて、さらに口縁と頸部に縄文原体の側面圧痕を押捺している土器である。側面圧痕文は口縁に沿って 3 条と頸部に 1 条認められる。この側面圧痕文土器は大木 7 b 式の特徴をもっている。

第八章 ピット状遺構の調査

1 第一号遺構（第四二・四三図、図版第二〇）

形状は略円形を呈する。大きさは東西南北とも約70cm、深さは約35cmである。壁面は斜めに堀り込まれ、底面はほぼ平坦である。

埋没土は2層に大別でき、底面上のaはロームを主体とした褐色土で炭化物粒子を少量含む。bは黒色土にローム粒子、焼土などを微量に含んだ土砂である。

遺物は縄文土器の破片と自然石が各6個出土した。平面分布は中央よりやや南側にまとまって存在し、垂直分布も中間付近より底面上に集まる傾向がみられる。これらの遺物はほとんど一括的に廃棄されたように思われる。無文の底部破片1・2・4・11の4個は接合する。

文様が窺える資料は僅かに7の口辺部破片だけである。口辺部の形状は口縁が短く外反して開く。頸部付近には2本の細い隆起線の貼付がみられる。この隆起線は枠状区画の一部であろう。隆起線の上部に斜縄文が押捺され、下方の隆起線に沿っては、半截竹管工具の外側で施した有節沈線が1条付されている。胴部の文様はおそらく口立市御跡遺跡出土の第7群土器に類似した構成になるものと考えられる。

2 第二号遺構（第四二・四三図）

形状は不整円形を呈し、南側は円弧を描くが、北側は尖り気味に細くなる。東西約90cm、南北約100cm、深さは40～50cmである。壁面は斜めに堀り込まれている。

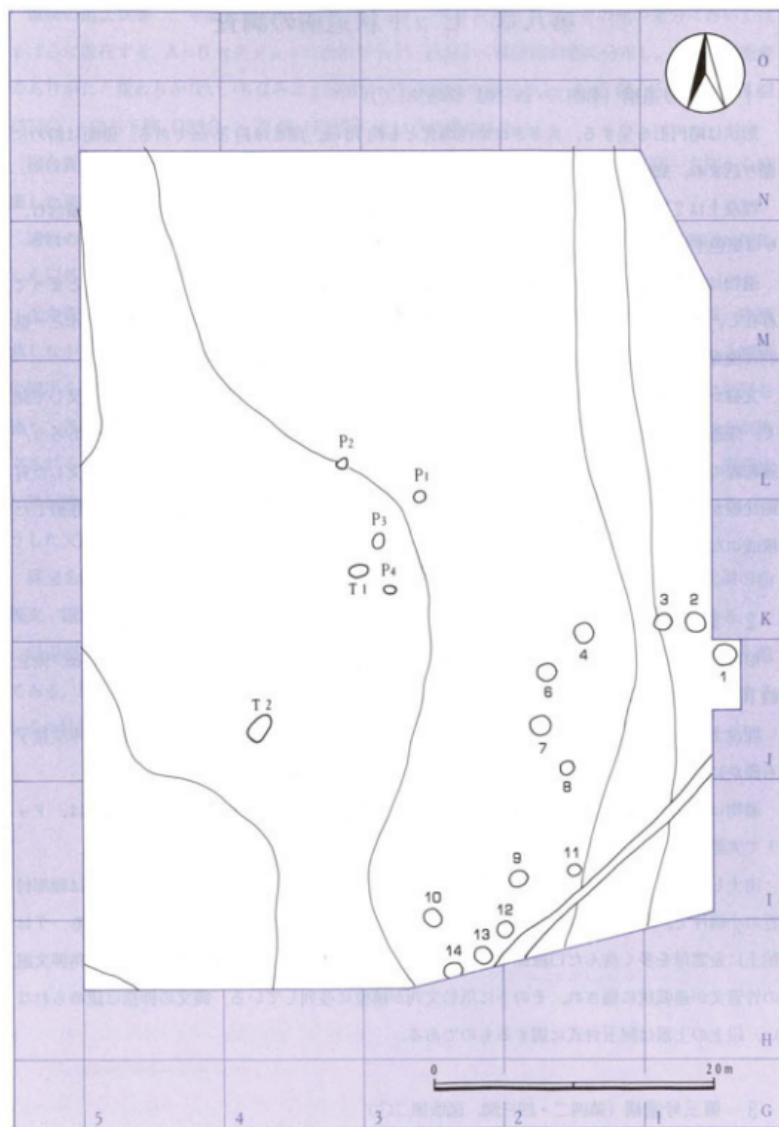
埋没土の性状は、上部に黒色土が多く、下層にはローム粒子が多く含まれる。焼土や木炭粒子も僅かに混入する。土砂の色調は全体に暗褐色を呈する。

遺物は縄文土器の破片7個と自然石が1個出土した。これらの平面ならびに垂直分布は、ドットで実測図に記録したような状態で散在する。

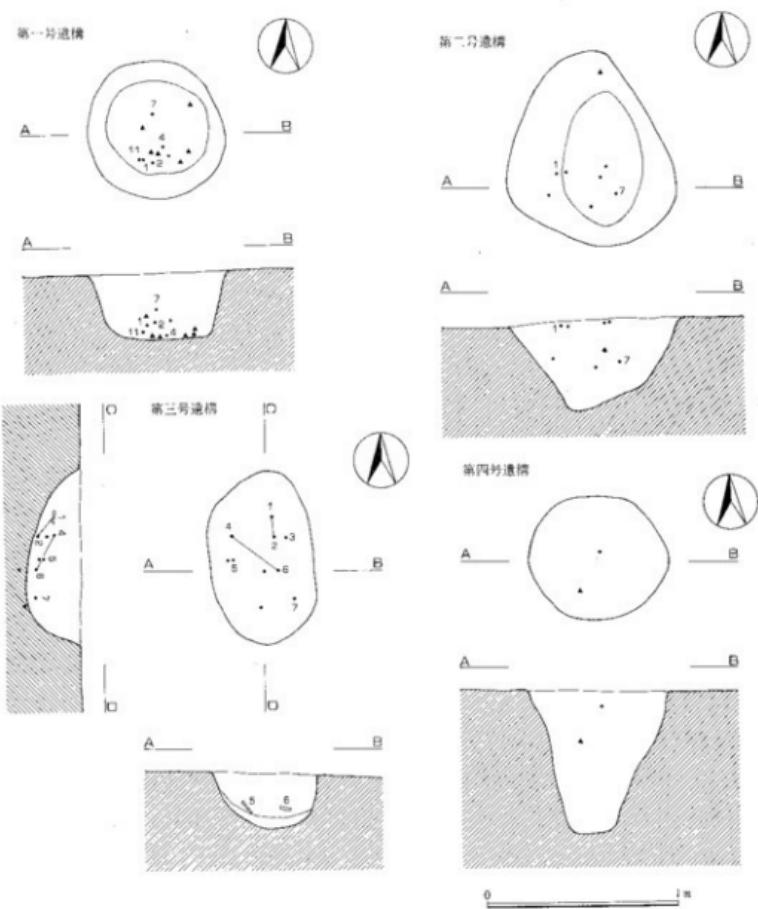
出土した縄文土器はすべて小破片であって、文様が窺えるのは僅かに2個である。1は頸部付近の小破片で、細い隆起線に沿って半截竹管の外側を施した有節沈線が1条認められる。7は胎土に金雲母を多く含んだ口縁部で、内側に弱い稜を形成する。刻目を伴う口縁に沿い角押文風の竹管文が連弧状に施され、その下に爪形文列が横位に並列している。縄文の押捺は認められない。以上の土器は阿玉台式に属するものである。

3 第三号遺構（第四二・四三図、図版第二〇）

形状は長椭円形を呈し南北方向に長い。長径約90cm、短径約55cm、深さ約35cmを測り、断面形は、南側が深く北側に移行するにしたがい浅くなり、C-D断面でみると形状は舟底状に近い。

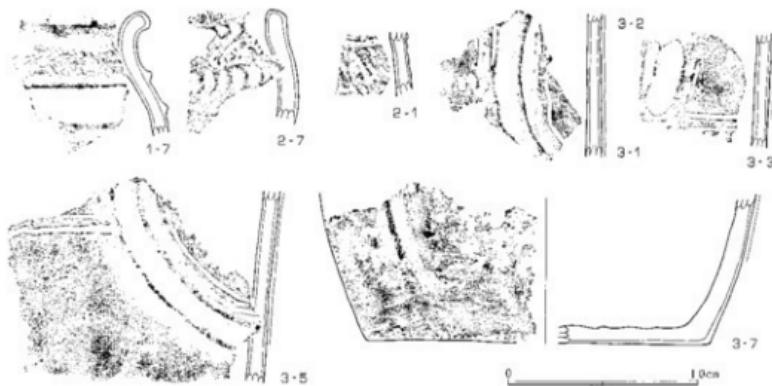


第四一図 ビット状遺構・土壤・堅穴状遺構分布図



第四二図 ピット状遺構（第一・二・三・四号）実測図

埋没土は、全体にローム粒子が混入した土砂で、色調は暗褐色を呈する。遺物の出土状態は、平面分布上で観察すると、中央付近にまばらに散在し、周壁近くにはほとんど認められない。C-D セクションに投影したドットは、大部分が中層から底部の間に存在する。接合資料は 2 例抽出でき、南一北と北西一南東を指向する。接合資料を含めた破片の数は 10 個である。胎土、色調、焼成、文様などを比較すると、はなはだしく類似しており、これらの破片は同一個体のものであると思われる。おそらく破損した深鉢形土器の一部を投棄したもので



第四三図 ピット状遺構（第一・二・三号）出土遺物実測図

であろう。

接合資料は下記のとおりである。

接合資料1 〈深鉢形胴部〉 $1\triangle 5 \cdot 2\square 2$

接合資料2 〈深鉢形底部〉 $4\triangle 10 \cdot 6\square 8$

出土した破片は、口辺部から頸部付近と胸部の大半を欠失している。底部の7を復元すると直径は約17cmの大きさになるので、大型の土器であるようと思われる。接合資料1と3、5の破片にみられる文様には共通性が認められる。無文の器面に断面が三角形の細い隆起線2条を貼付し、その構図は円弧を描く、多分連弧状に垂下する種類であろう。隆起線の内側に沿っては半截竹管工具による沈線が引かれ、外区の空間には平行沈線文や爪形文列などが横位に施文される。こうした文様構成は阿玉台式の範疇で理解できるものである。

4 第四号遺構（第四二図）

形状は略円形を呈する。大きさは東西約75cm、南北約65cm、深さ約75cmである。壁面は斜めに掘り込みU字型に近い断面を示す。

埋没土は2層に区別できる。下層のaは木炭や焼土粒子を混入した黒褐色土、上層のbは部分的に赤橙色上のブロックや木炭粒子などを含み、全体に黒色味の強い土砂である。この土砂は自然に流入したものではなく廃棄土と考えられる。

遺物は、上部の確認面近くから無文の胴部破片（縄文土器）が1個、中間付近に自然石が1個出土しただけである。出土土器は胎土の特徴から阿玉台式の仲間にに入るであろう。

第九章 溝状遺構の調査

溝状遺構は、第二調査区において、まず最初に確認され、次いで第一地点。最後に第一調査区の東南隅に当たるバックネットの裏側に発見された。各溝状遺構は、後述するように相似した内容のもので、構築年代も明確にできなかった。多分年代的には新しいものであるかもしれない。

第一号溝状遺構（第四四・四五図、図版第二二・二三）

第二調査区内において発見した唯一の遺構である。本遺構は、分布図からうかがわれるよう、調査区の東端に近くほぼ南北方向に走り、南側は支谷に移行している。おそらく地形的にみてこの調査区外で消滅するのではないかと思われる。溝状遺構は、発掘区の北端から南へ約58mまで確認できる。溝幅は一定せず狭いところで約1m、広いところで約2mを測り、確認面から10～20cmの深さに浅く彫り込まれている。溝の底面を観察すると、水が流れたような形跡（たとえば底面に砂粒が堆積する）は全く認められないので、溝イコール排水溝と見做すにはいささか問題がある。溝の周囲には、所々に小さな搅乱が存在し、これが溝の内部に及んでいるところも認められる。

溝の内部からは、自然石および無文の土器細片が若干出土している。

本遺構は、第一地点で発見した第一号溝状遺構の方向に延びており、未発掘の部分を延長すれば、南北に走行する一条の溝となるようにうかがわれる。

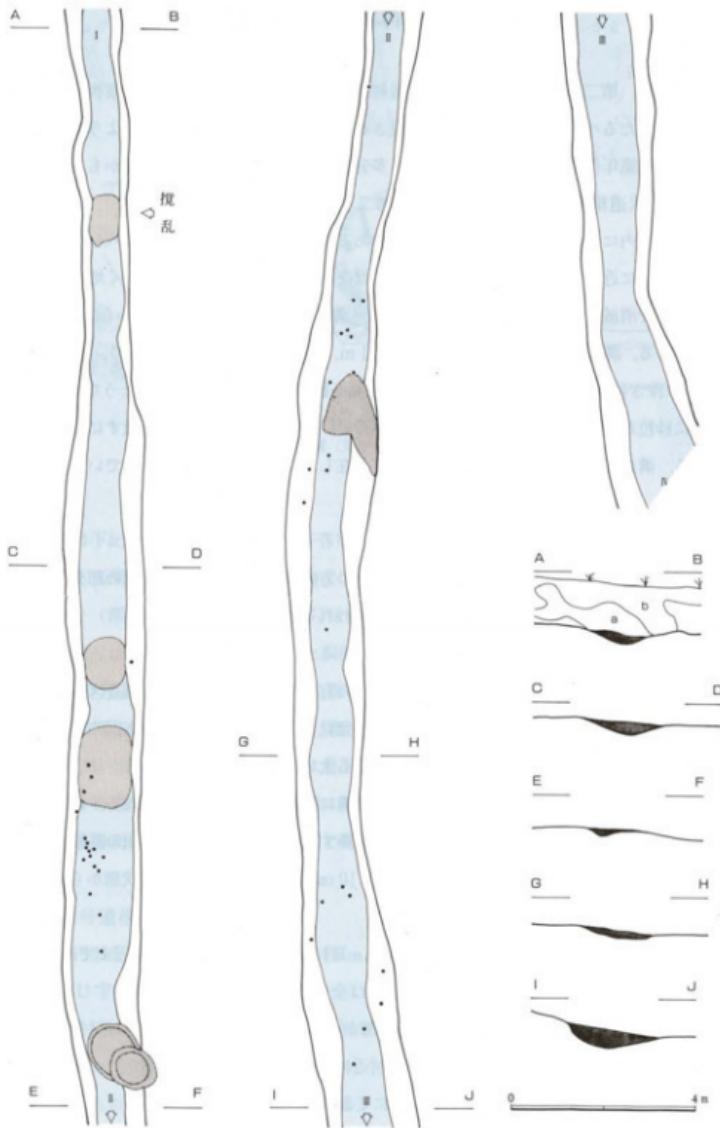
第二号溝状遺構（第四五図、図版第二三）

第一調査区の東側約15m離れた地点に、遺構の有無を確認する目的で小調査区を設定した。本地点（第一地点）においては、土壤や住居址の発見はなかったが、第二調査区の南側方向に延びる細い溝（第一号溝状遺構）と、東西方向に走る太い溝（第二号溝状遺構）を確認した。第一号溝状遺構は、すでに記述した第二調査区発見の溝に接続するものと考えられる。第二号溝状遺構は、第一調査区中央部の深い支谷に向かって下降する溝である。両者は西側の先端部付近で二方向に分岐する。A-B断面が示すように、深さ10cm前後の深い土砂の堆積状態からは、両者の新旧関係を明確に把握できなかった。

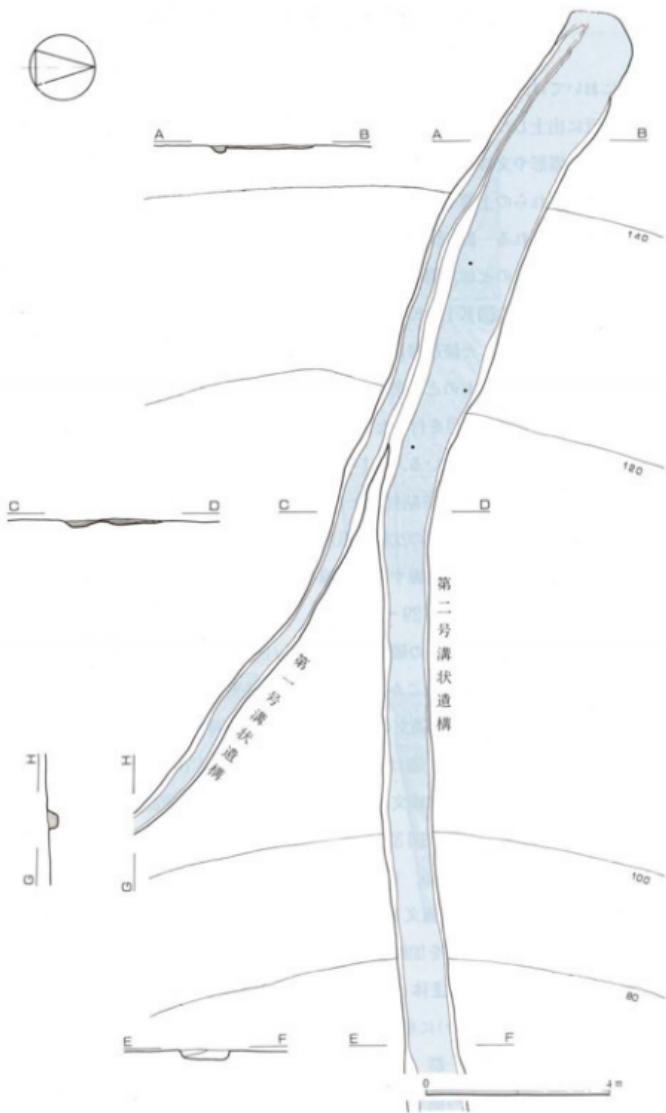
第一号溝状遺構は、幅が60cm前後、深さはA-B付近で約20cm、C-D付近までが約20cm、G-H付近が約30cmと深くなる。溝の内部からは全く遺物が出土しない。

第二号溝状遺構は、幅2m前後、深さは先端部からC-D付近で約15cm、E-F付近で約20cmを測る。C-D付近の埋没土は黒色土、E-F付近は上層に褐色土、下層は黒色土である。溝の内部においては挙大の自然石が3個発見されたにすぎない。

また、第一調査区の東南隅においても、北東-南西方向に走る溝状遺構が検出されている。溝の幅や深さなどが第一号溝状遺構に類似し、ほぼ時期を同じくして掘られたものであろう。



第四四圖 第一號溝狀遺構實測圖



第四五図 第二号溝状遺構実測図

第一〇章 確認調査区出土の遺物

確認調査区においては、第一調査区の東南部、すなわち住居址、堅穴状土壙群、ピット状遺構群が散在する付近に出土した破片が多い。破片類は野球場造成工事で大部分移動している。

出土した土器は、器形や文様の構成が窺えるまでに復元できた一部のものを除くと、大部分の資料は破片である。これらの土器を概観すると、①阿玉台式に該当する一群、②原体を押捺した側面圧痕文に特徴づけられる一群、③隆起線と有節沈線を組合させて文様を構成する一群、④纏文地に沈線文を加飾させたものとに大別できよう。なお整理期間に制約があり細別は行っていない。

①阿玉台式系土器（第四六図 K 1～K 6、第四七図 1～17、第四八図 18～28）

口縁部の尖起や棒状に区画した隆起線に沿って、半截竹管の外側・内側で有節沈線文や角押文を配する一群には、1～2条のものと3条のものが認められる。1と2の沈線はⅠ類の手法を思わせる。6の波頭部には周縁に刻印を付した円形把手が加えられ、16の波頭部は3条の有節沈線文、側面に幅広い角押文を施文している。K 1～K 3などはⅡ類に包括しうる好資料である。

外反する口辺部にY字形の隆起線を貼付した17には、爪形文列が横位に配され、18～21は隆起線に付随して半截竹管や櫛状工具の沈線、爪形文を施すⅢ類である。27と28、K 4～K 6は纏文を地文とし隆起線に伴って有節沈線や平行沈線を施す。23～26は無文土器の一群である。

②原体側面圧痕文系土器（第四八図 29～31）

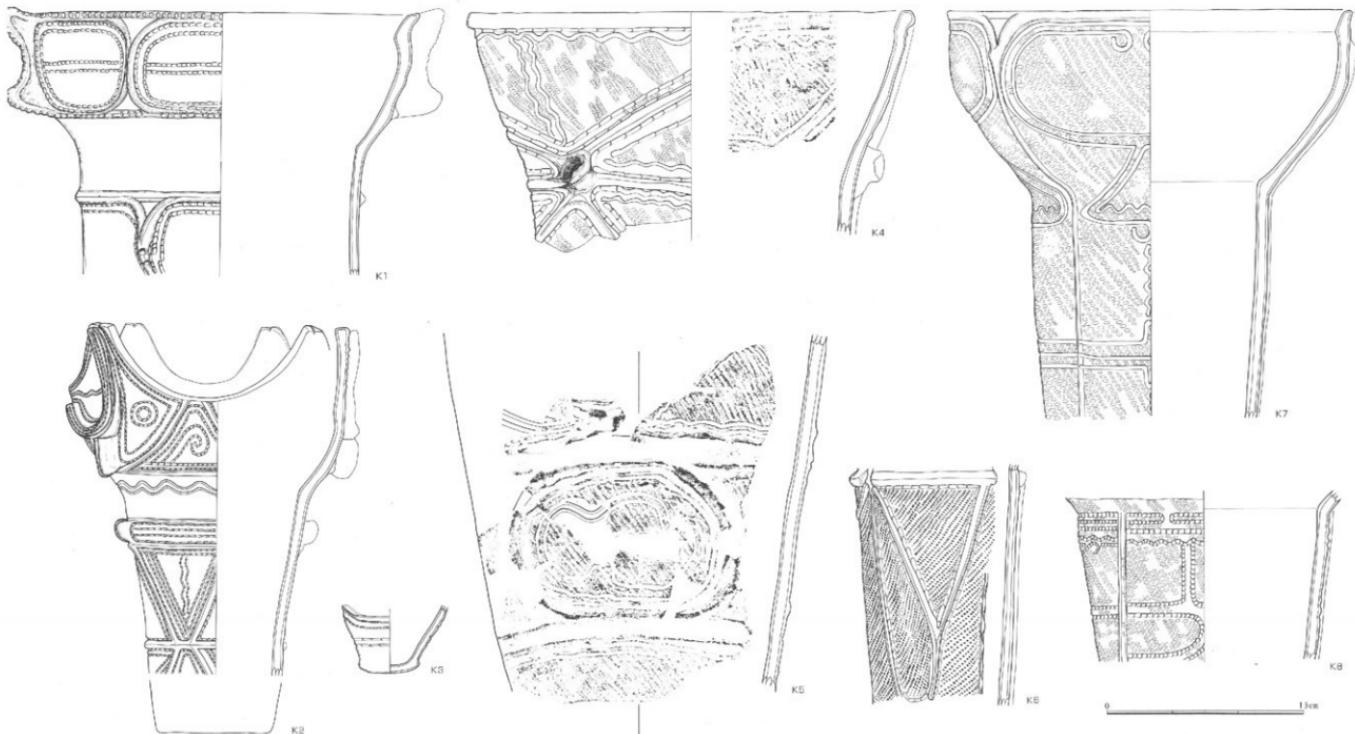
原体側面圧痕を施した土器で若干の破片が存在する。29は口縁部を肥厚尖起させた部分に長楕円形のくぼみをつくり把手化し、そこからY字形と左右を棒状に区画する圧痕文がみられる。30は無文の口縁に沿って2条、31は斜纏文の外反する口縁に3条押捺されている。捲糸圧痕はいずれもLの原体である。これらの圧痕文土器は阿玉台式に併行する大木7b式土器と考えられる。

③纏文地に隆起線を貼付し、有節沈線文が盛行する一群で、日立市御訪遺跡出土の第7群に対比できる土器（第四六図 K 8、第四八図 32～34、第四九図 35～37）

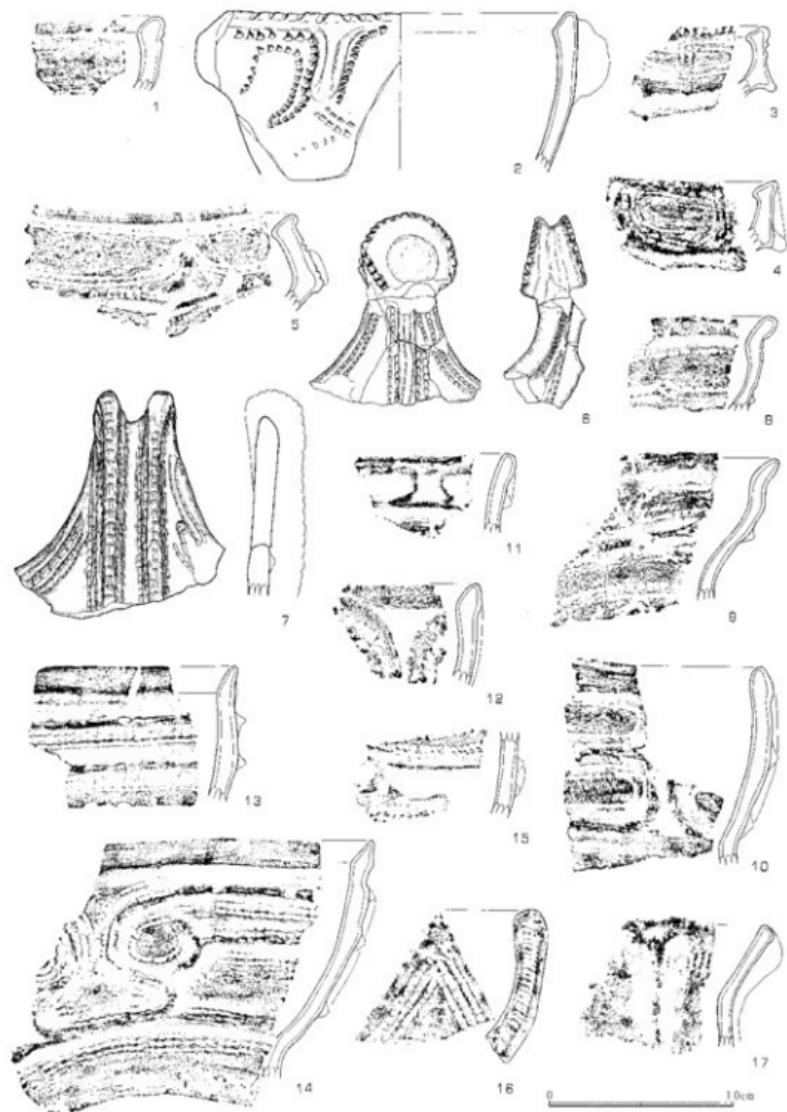
口縁部の形状には平縁と波状がある。有節沈線は半截竹管工具の外側を使用しやや太目である。32の口縁部は有節沈線を横位に施し、36と37には隆起線による棒状の凹凸を行い、それに沿って直線状、鋸歯状に有節沈線を加飾している。胴部の33～36は同一個体と思われ、そこには羊歯状、渦巻文などの曲線を主体とした文様が構成される。53は外反する口縁部を欠失した深鉢形で、隆起線を等間隔(四等分)に垂下し、その内部に有節沈線で各種の文様を配している。

④纏文地に沈線文が多用される一群（第四六図 K 7、第四九図 38～45）

有節沈線に代わって半截竹管の外側を使用した沈線文が旺盛にみられる一群である。口縁部は横位の直線文、山形文などを数条施文し、胴部に曲線その他の文様が加飾される。大木8a式の古い段階を規制する土器であろう。52はY字形隆起線を垂下し、③に類似した文様構成である。



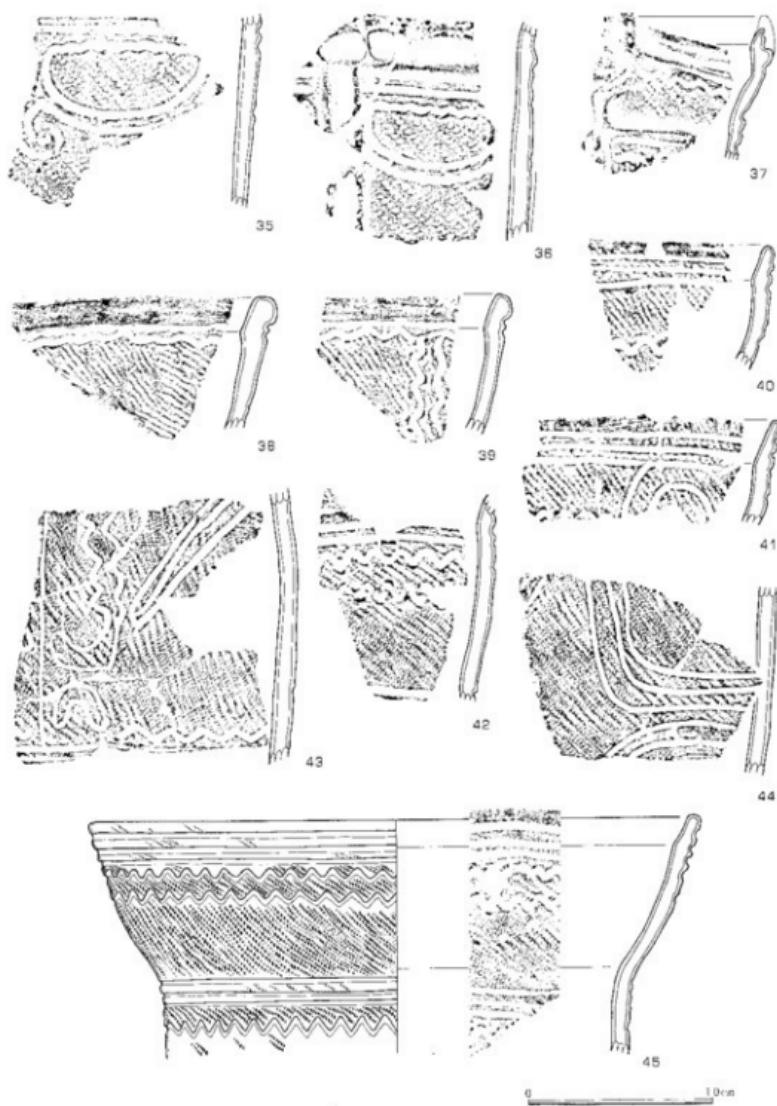
第四六图 确認調查区出土遺物実測図(1)



第四七図 確認調査区出土遺物実測図(2)



第四八図 確認調査区出土遺物実測図(3)



第四九図 確認調査区出土遺物実測図(4)

第一章 ま と め

諏訪台遺跡における発掘調査によって出土した遺構の内容と遺物の概要是、以上に記述してきたとおりである。

本遺跡については、現地踏査によって第一調査区を中心に縄文時代中期前半の土器破片少量、第二調査区内に土師器の小破片が若干採集されていた。縄文時代の中期前半には、昭和59年に発掘調査した梶巾遺跡（『茨城県梶巾遺跡』昭和60年3月）の事例から考えて、袋状土壙群を主体とした遺構、古墳時代前期の住居址が発見されるものと期待していた。しかし、実際に表土除去作業を行ってみると、第一調査区内では、住居址、袋状土壙、竪穴状遺構、ピット群などが確認され、第二調査区その他の確認区域内では、当初の予想に反して住居址を発見できなかった。けれども、両調査区と第一確認地点においては、時期不明の溝状遺構を3条検出することができた。

住居址および袋状土壙の発掘に当たっては、遺構が確認された時点から記録することにした。すなわち、すべての遺物は原位置のままで柱状に残し、出土地点をはじめ出土レベルの記録を行い、その状態を観察して収納する方法をとった。これは個々の遺物を研究の基礎資料に昇華させるために重要な作業と考えられる。したがって、從来からの基本方針である『原位置』論的調査法を、今回の調査においてもつとめて実践するよう心掛けた。

また、袋状土壙はその名が示すとおり、開口部から頸部が著しく狭小であり、深さ1m前後の下底部に移行するにしたがい、外方へ大きくひろがる特徴を持っている。この種の土壙は、発掘中にしばしば口頸部の崩落がみられ、調査員や作業員に危険を伴う場合がある。このために埋没土観察用のベルトを残し、半截または四戦方式による平面発掘を実施した。こうした発掘の方式は、結果的に埋没土の観察と記録において、非常に有意義な役割を果たしていると思う。

縄文時代中期の前半は、土器の型式に置き換えると、東関東では下小野式にはじまり阿玉台各式（I・II・III・IV）が該当し、東北の大木7a式、大木7b式、大木8a式が対応する。本遺跡の遺構を特徴づける袋状土壙群は、大略この阿玉台式期を中心構築されたものが多く、有節沈線を多用する諏訪系の土器群、原体側面圧痕文を特徴とする大木7b式系の土器群などが併存し、さらには沈線の意匠が旺盛となる人木8a式系の古式土器群が出土している。こうした一連の土器の姿相については、鈴木裕芳や海老沢稔氏らにより誠意検討が行われているので、両氏の研究成果に期待するところが大きい。

竪穴住居址は、僅かに1例の発見ではあったが、遺物の出土状態を検討することによって、不鮮明なプランの全容をほぼ推定し、出土土器と合わせて住居址に関する資料も獲得できた。

本調査区内で発掘した袋状土壙群は、未完壙のものを含めて13基である。個々の内容は一覧表のようにまとめられる。

縄文時代土廣一覧表

番号	土壤番号	平面形	開口部	頭部	底部	深さ	出土遺物	備考
1	D 1	略円形	145	—	275	135	土器・石器	頭部崩落
2	D 2	同	110	90	225	140	土器	
3	D 3	同	125	90	230	135	土器・土偶・石器	
4	D 4	同	115～135	150	270	95	土器・石器	
5		不整円形	150	—	—	50	土器細片他	攤乱穴
6	D 6	略円形	105	105	260	110	土器	
7	D 7	同	130	130	260	127	土器	
8	D 8	同	80	—	240	107	土器・石器	頭部崩落
9	D 9	同	120	—	260	150	土器・石器	同
10	D 10	同	90～100	100	230	95	土器・石器	
11	D 11	同	75～80	75	250～265	120	土器	
12	D 12	同	85～90	—	215～220	80	土器	頭部崩落
13	D 13	同	130	110	200～225	120	土器	
14	D 14	同	130	—	230	145	土器	頭部崩落

(計測単位cm)

筑北地方における袋状土壤は、これまでに日立市諏訪遺跡で29基、大宮町梶原遺跡で14基、同諏訪台遺跡で13基、その他水戸市飯富塙東遺跡や同高天原遺跡でも数基発掘され、ようやく60例を上回る数となってきた。

この種の土壤については、形状、遺物の出土状態などの検討結果から、食料の貯蔵穴、墓壙、さらには原料土採掘場などの機能が考えられてきた。いずれの考説も個々の土壤に則した見解として、それなりに十分評価できるものである。

今回発掘した土壤を観察すると、墓壙や原料土採掘場を思わせる有力な証左はえられていない。土壤の大きさと深さは、食料や栽培用の根茎類を貯蔵して越冬させるには最適の規模である。現今においても農民たちは、冬期に食料（芋類・球根類）を保存する場合、直径約1m、深さ70cm前後の穴を掘り、内部に食料を収納し、掘削土を被せた上に、さらに防寒用のワラで編んだ傘状の蓋をする。この一見原始的とも思われる貯蔵法は、温度や湿度などを保つ上でまさに合理的である。袋状土壤も、このような方法によって貯蔵穴の機能は十分に果たせたように思われる。

なお、土壤から出土した遺物の中で特筆すべきものに、第三号土壤出土の板状土偶、第八号土壤の蛇の顔面を表現したと思われる把手付深鉢形土器が挙げられる。

板状土偶は、頭部を発見できなかったけれども、各部位は完全な形で残っている。県内における出土例は福敷郡阿見町宮平貝塚をはじめ8遺跡の資料が知られている。本土偶は阿玉台式に伴う角押文（有節沈線文）を施した好資料である。土壤が栽培用の根茎類を冬期に貯蔵したものであれば、生命の再生や豊かな収穫を願って製作し、そこで桐原 健氏らが説くような共同の呪術

的なまつりを行ったことも推測できよう。

土器の口縁部に付された動物形把手（鳥形または蛇形）は、昭和 57 年に佐藤次男氏が集成した県内の資料によると、12 遺跡 22 例が挙げられている。分布の様相は東半部に多く認められる。時期的な出土数は、中期前半 1 例、中期末葉 2 例、後期初頭 19 例であって、中期末葉から後期の資料が圧倒的に多いことがわかる。中期前半の 1 例は、日立市諏訪遺跡（昭和 50 年発掘）の資料であって、これは本遺跡の第八号土壙出土の蛇形装飾把手に非常によく似ており、後期初頭のものに比較して形態上からの分離が可能である。

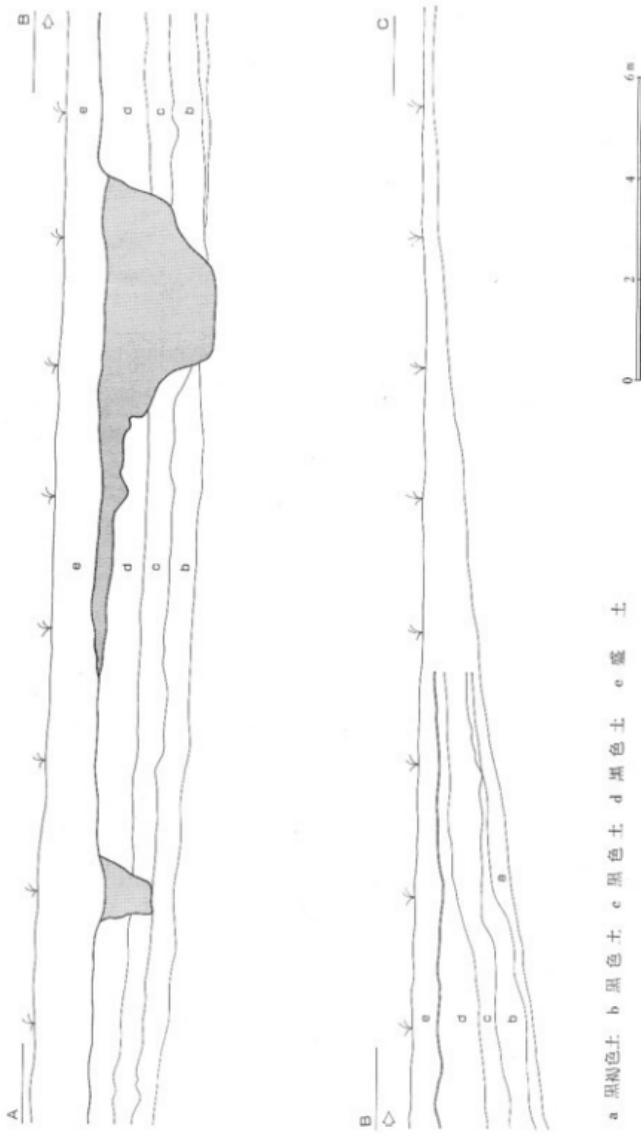
この特異な遺物が意味する問題については、佐藤氏が先学の業績に再吟味を加え、民族・民俗事例、考古資料などを使い多方面から考察を行っている。蛇形装飾付土器の性格を理解する上で、この考説の中には参考とすべき事柄が多い。

なお資料の点で付言するならば、大宮町においては、^{大宮}本宮遺跡（縄文時代中期）の出土遺物の中に、微隆起線文を伴う加曾利 E 4 式土器の口縁部破片があり、環状把手の上部には、両眼を付し口部を細長く尖らせた鳥形または蛇形を想わせる資料が 1 点存在する。これもまた上述の板状土偶とともに重要な資料である。

本遺跡の土壤群発掘において、縄文時代中期前半に属する板状土偶、蛇形装飾付土器の新資料を見つけていた意味は、久慈川中流域の縄文社会の生活構造をうかがう上で大いに役立つものと考えられる。

参考文献

- 桐原 健 「土偶に見られる卑観的な姿相について」信濃 20 - 10 信濃史学会 昭和 43 年 10 月
塙 静夫他 『添野遺跡の研究』下野古代文化研究会 昭和 49 年 3 月
馬目順一他 『大畑貝塚調査報告』福島県いわき市教育委員会 昭和 50 年 3 月
川崎純徳 『フ拉斯コ状土壙小考』常総台地 10 常総台地研究会 昭和 54 年 4 月
鈴木裕芳他 『諏訪遺跡発掘調査報告書』日立市教育委員会 昭和 55 年 3 月
村田健二他 『千 天』大洗地区遺跡発掘調査会 昭和 55 年 5 月
佐藤次男 「縄文時代における蛇形装飾付土器について」茨城県立歴史館報 9 昭和 57 年 3 月
海老沢稔 「茨城県内における縄文中期前半の上器様相（2）」斐良岐考古同人会 昭和 59 年 4 月
西村正衛 『石器時代における利根川下流域の研究』昭和 59 年 12 月
瓦吹 堅 「茨城の土偶」特別展「土偶」縄文人の祈り 水戸市立博物館 昭和 60 年 2 月
井上義安他 『茨城県櫛巾遺跡』大宮町教育委員会・櫛巾遺跡発掘調査会 昭和 60 年 3 月
井上義安他 『高大原』水戸市高天原古墳発掘調査会 昭和 60 年 5 月
鈴木裕芳 「諏訪遺跡出土土器群の再検討」茨城県史研究 59 昭和 62 年 10 月



a 黑褐色土 b 黑色土 c 黑色土 d 黑色土 e 灰土

第五〇圖 調查區土壤剖面圖 (A-C)

写 真 図 版



発掘現場説明会（平成2年10月23日）



遺跡の遠景（東から）



遺跡の近景（南から）



第一調査区の現状（西から）



第二調査区の現状（北から）



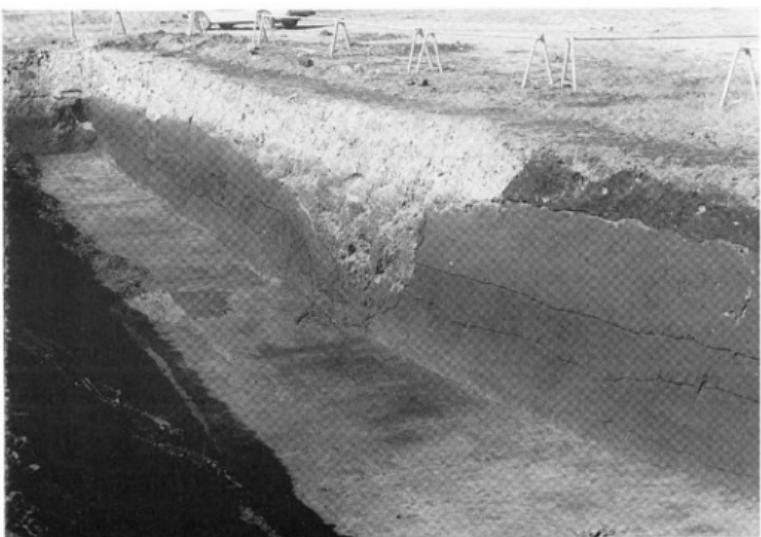
第一調査区の遺構確認状況（西から）



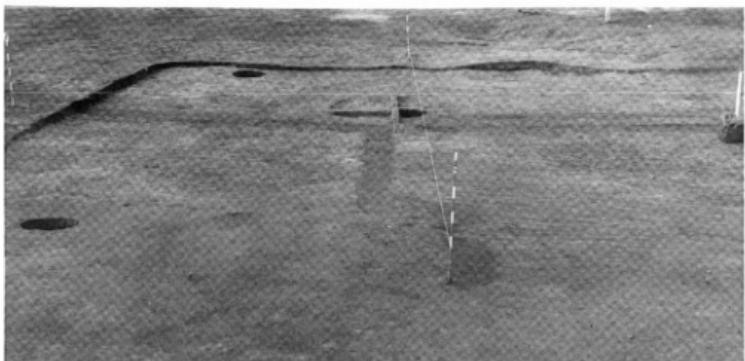
第一調査区の遺構発掘状況（西から）



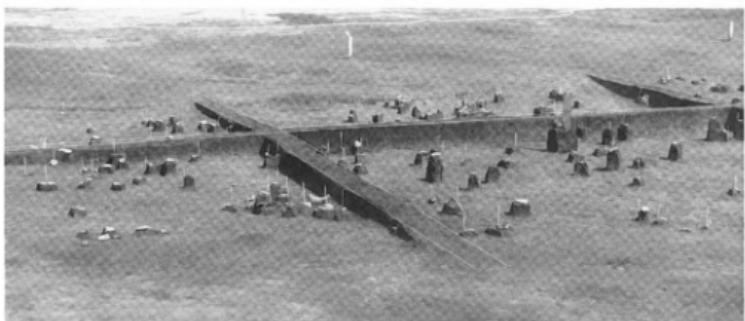
第一調査区中央部（A—C）の発掘状況（東から）



第一調査区中央部（A—C）の土層断面（東から）



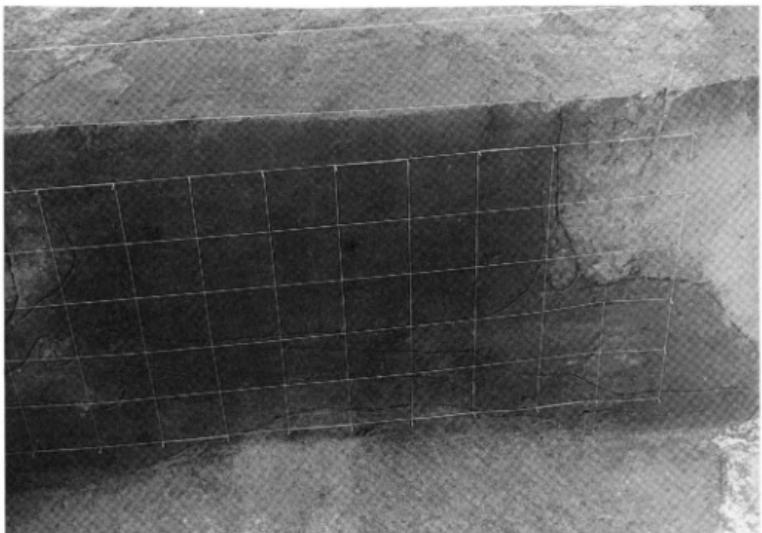
第一号住居址の全景（南から）



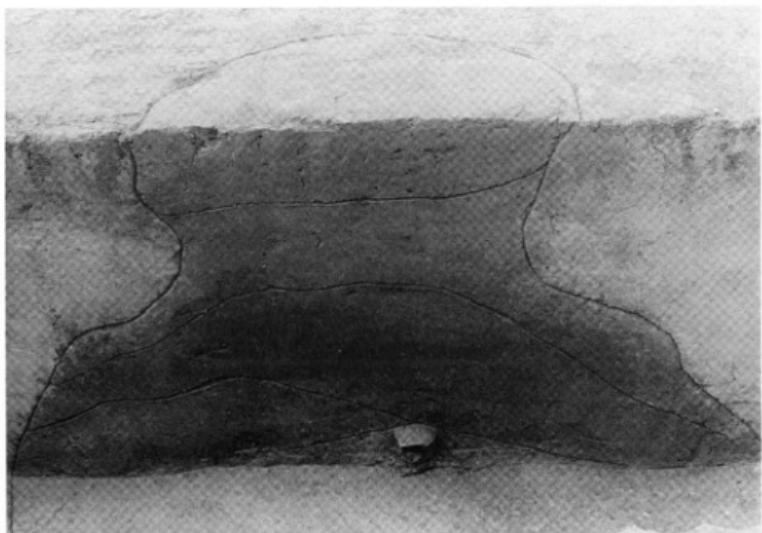
第一号住居址の遺物出土状態（東から）



第一号住居址の遺物出土状態（南西から）



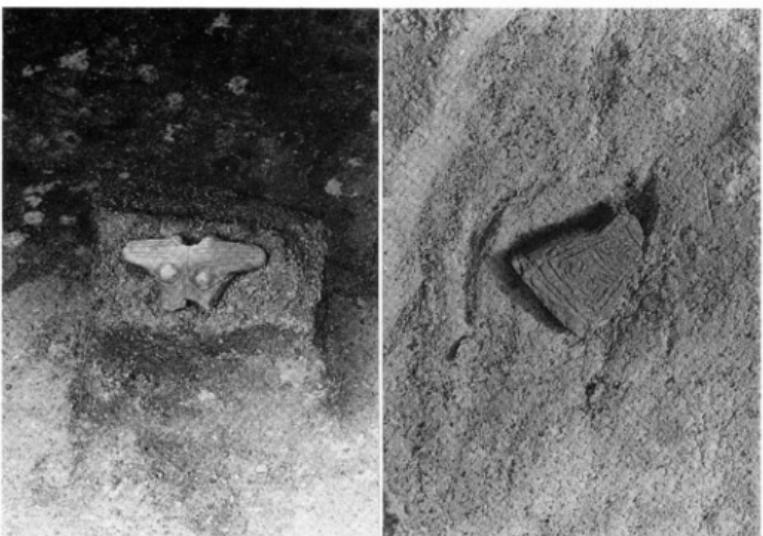
第一号土壤の土層断面（南から）



第二号土壤の土層断面（南から）



第三号土壙の遺物出土状態



第三号土壙の土偶出土状態



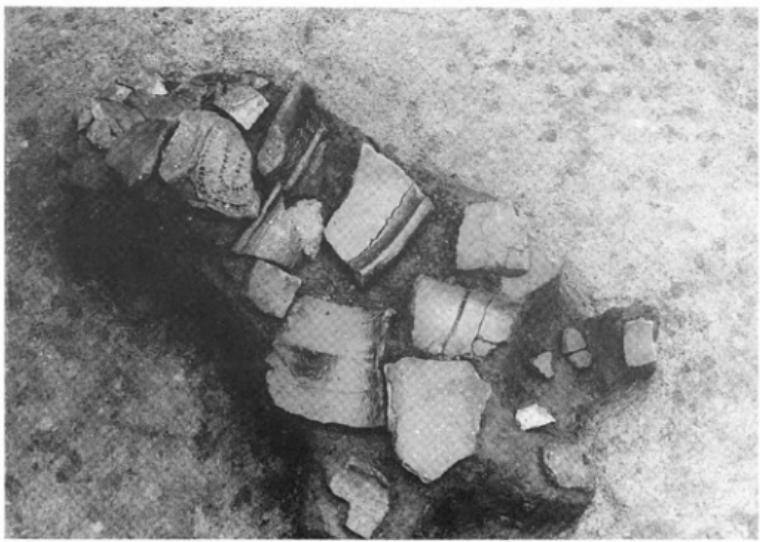
第四号土壙の全景



第四号土壙の遺物出土状態



第四号土壙の遺物出土状態



第四号土壙の遺物出土状態



第六号土壙の全景



第六号土壙北半部の遺物出土状態



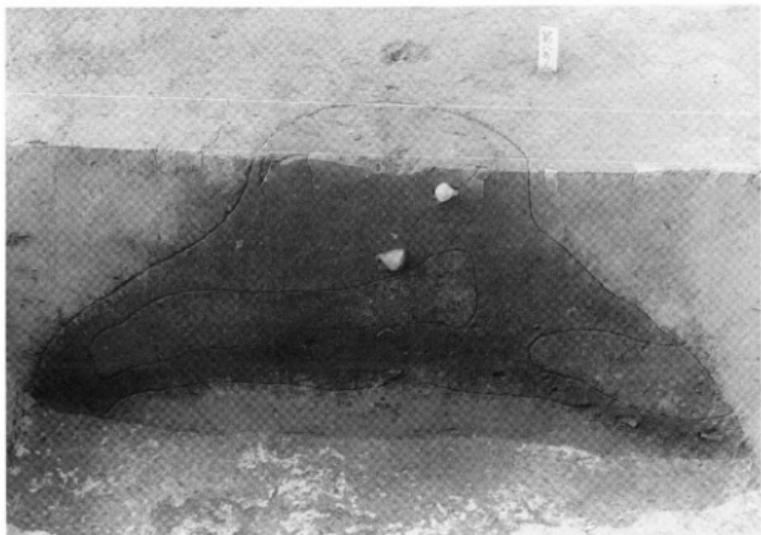
第六号土壙の遺物出土状態



第六号土壙の遺物出土状態



第七号土壤の全景



第八号土壤の土層断面



第九号土壙の遺物出土状態



第九号土壙の遺物出土状態



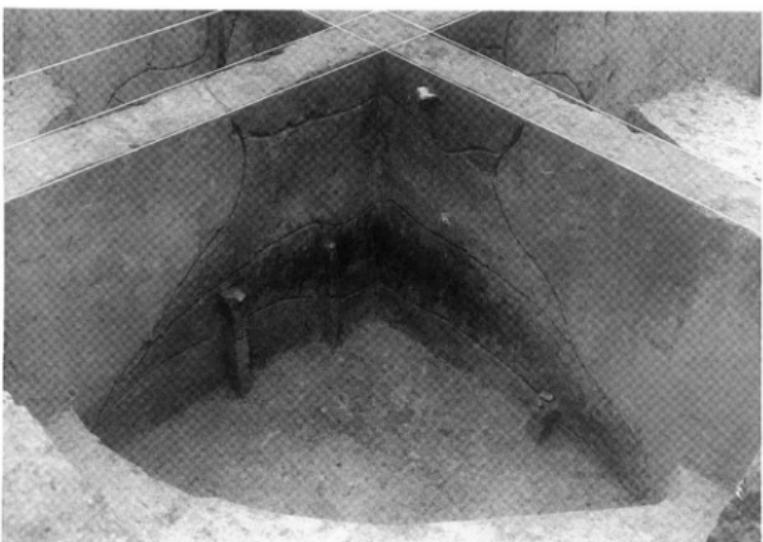
第一〇号土壤の遺物出土状態



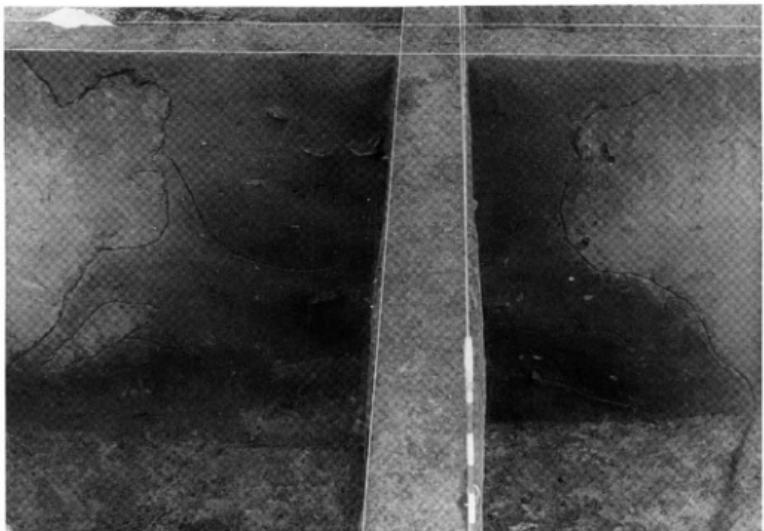
第一一号土壤の断面と遺物出土状態



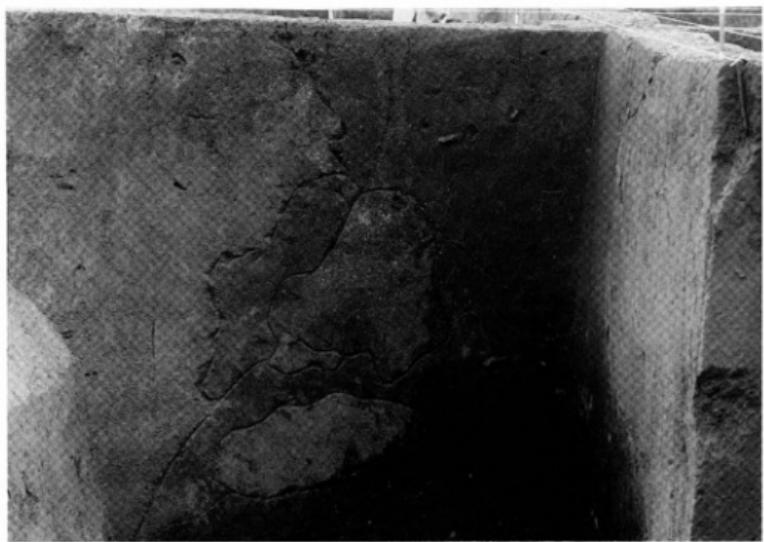
第一一号土壤の断面と遺物出土状態



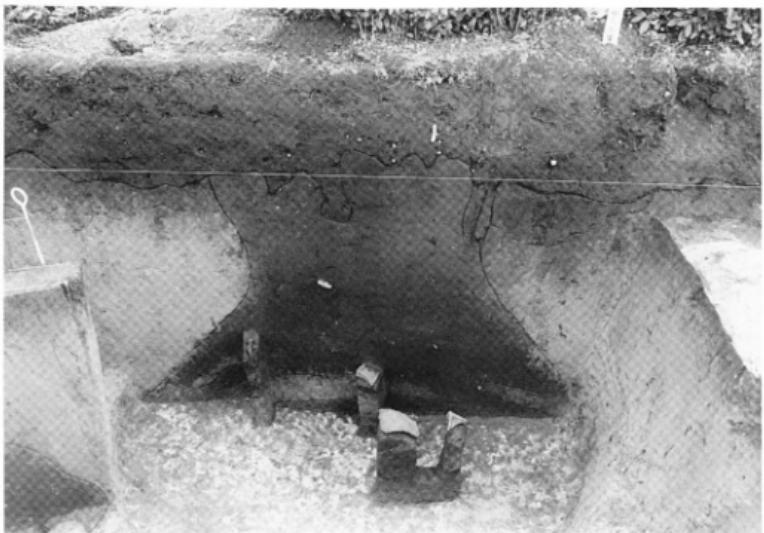
第一二号土壤の土層断面



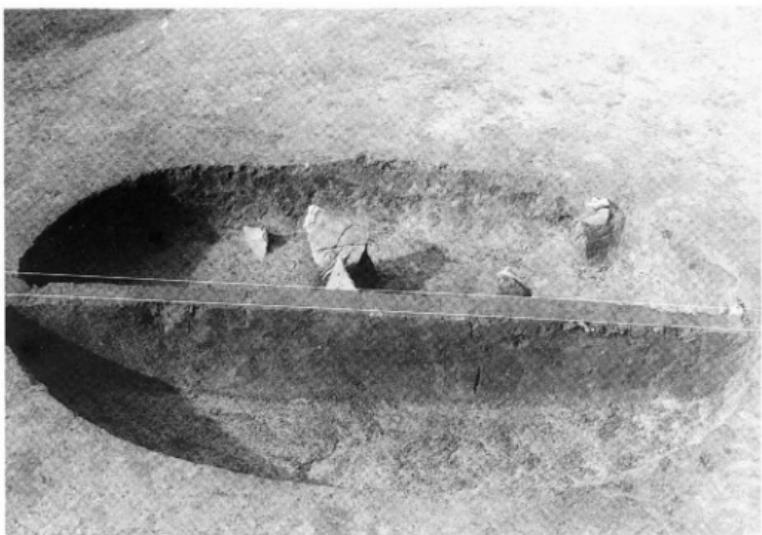
第一三号土壤の土層断面



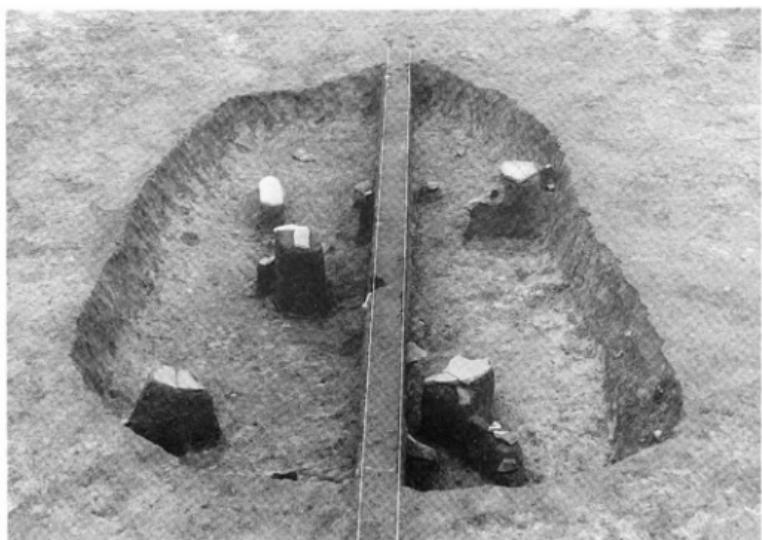
第一三号土壤の崩落状態



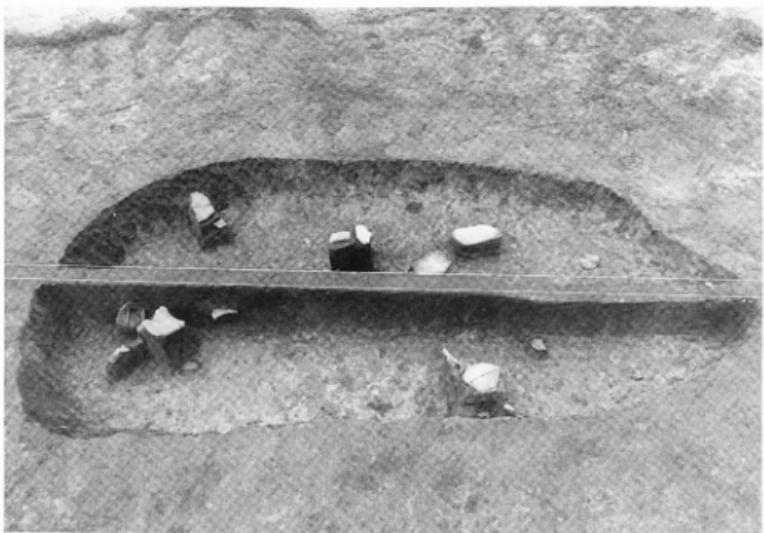
第一四号土壤の断面と遺物出土状態



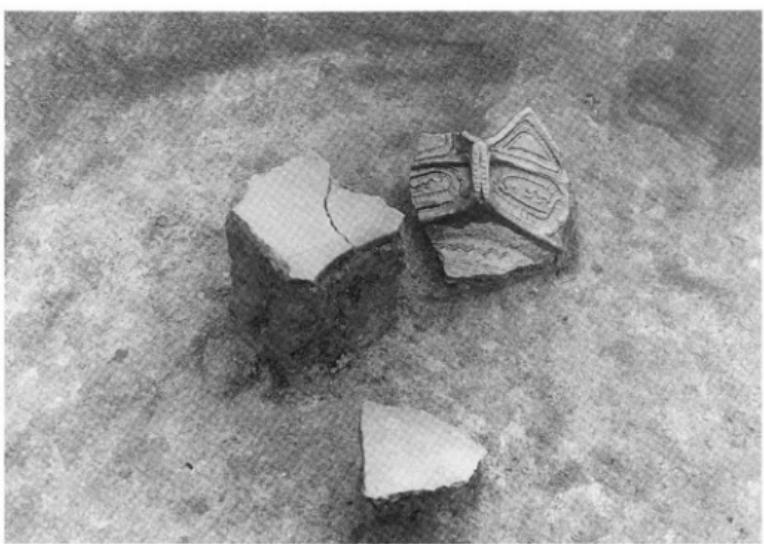
第一号竪穴状遺構の遺物出土状態



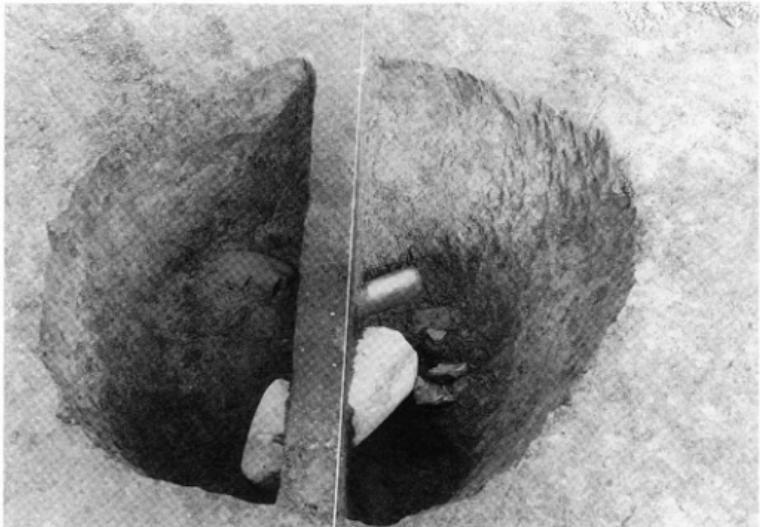
第二号竪穴状遺構の遺物出土状態



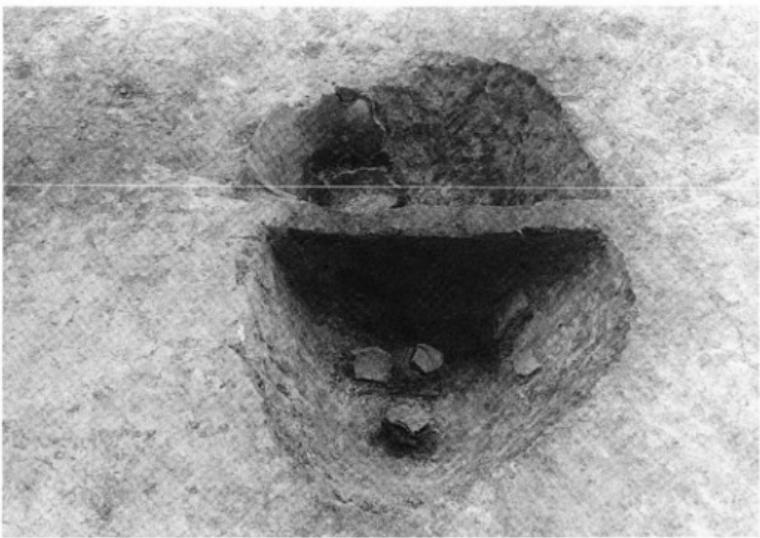
第二号竪穴状遺構の遺物出土状態



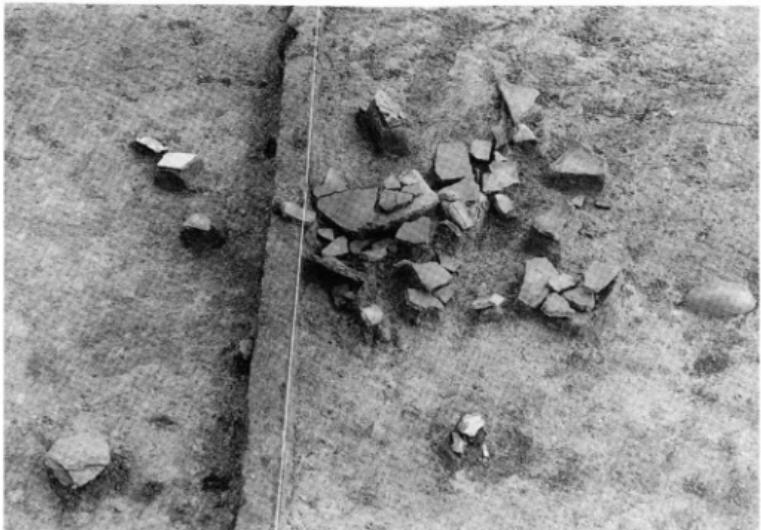
第二号竪穴状遺構の遺物出土状態



ピット状第一号塚構（西から）



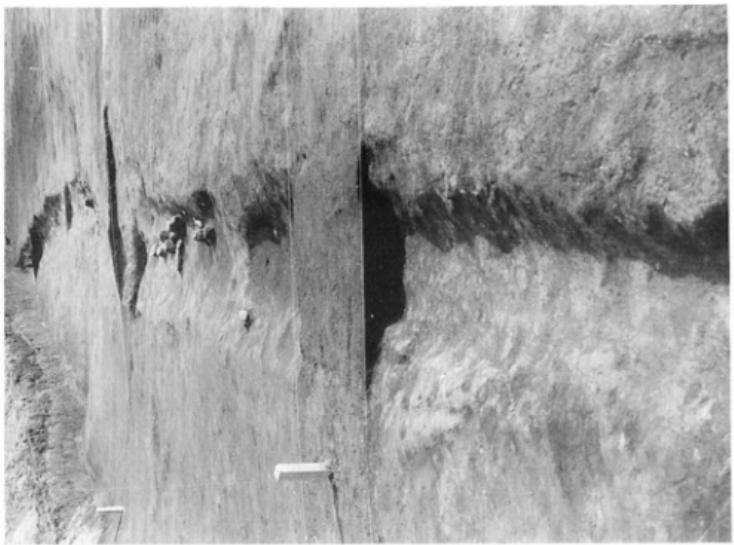
ピット状第三号塚構（北から）



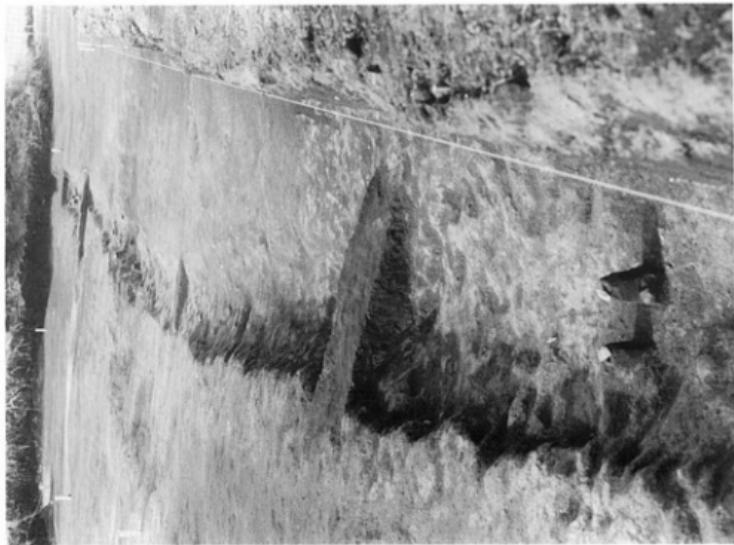
遺構確認面の遺物出土状態



遺構確認面の遺物出土状態



第一号溝伏通橋（北から）



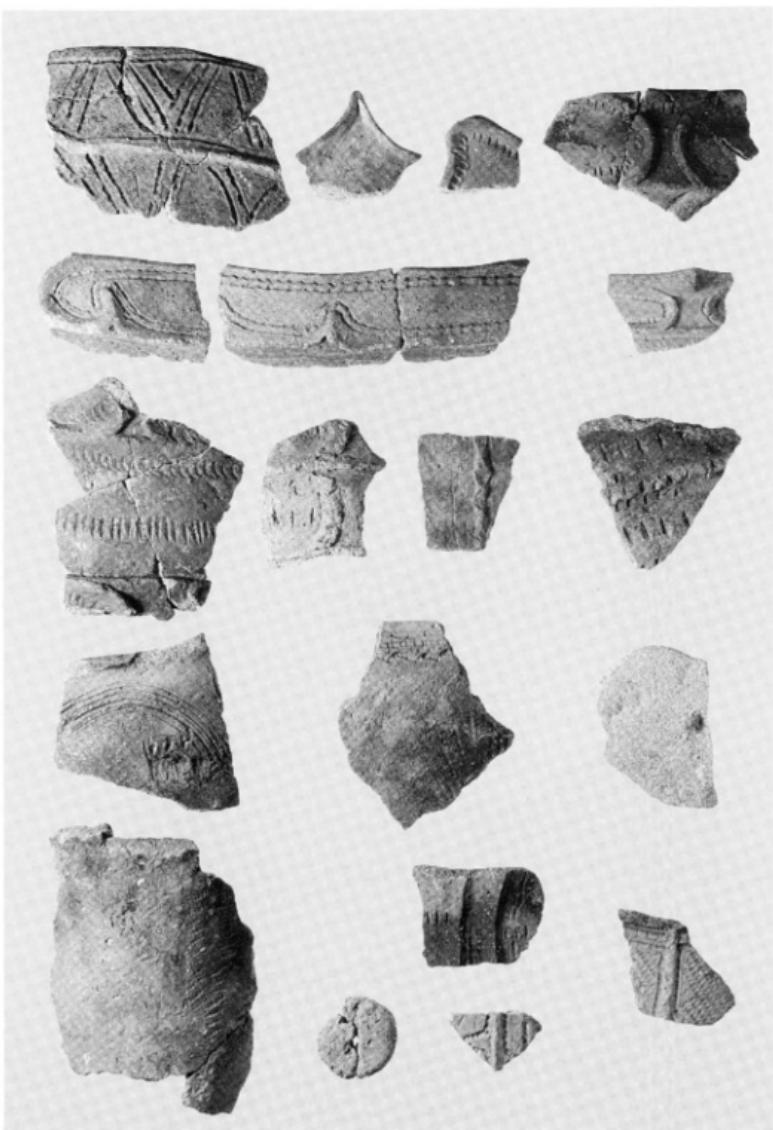
第一号溝伏通橋（南から）



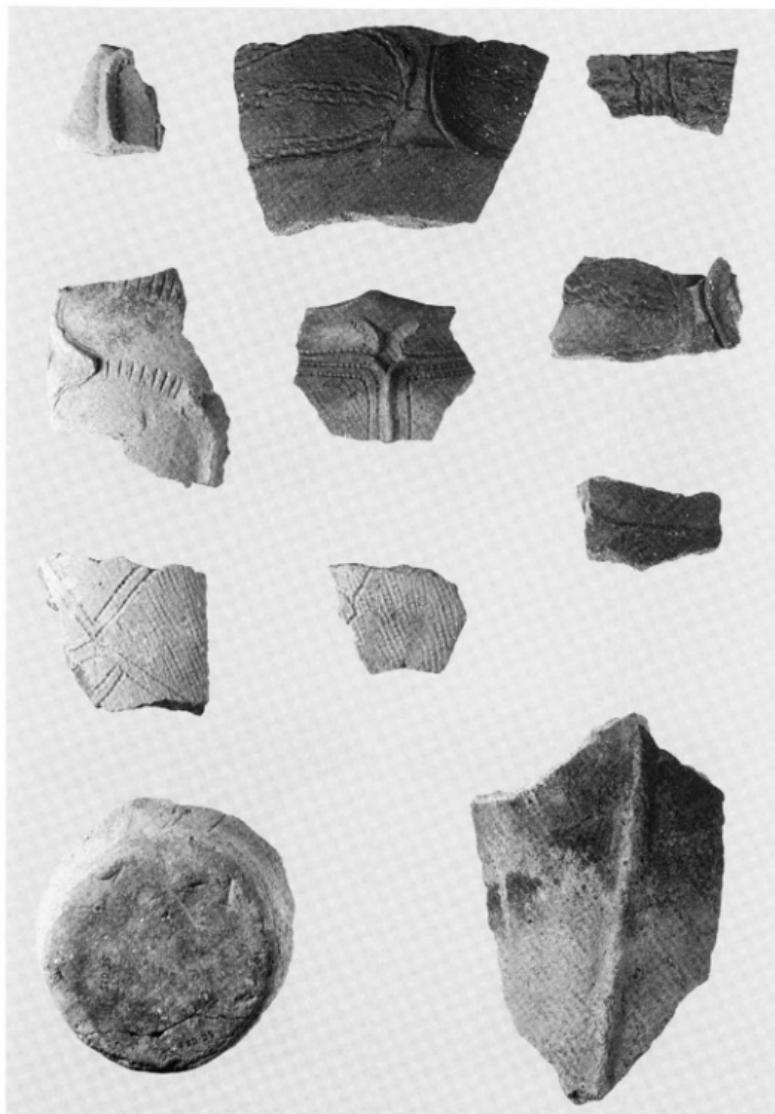
第一号（左）第二号（右）溝状遺構（東から）



第一号（上）第二号（下）溝状遺構（東から）



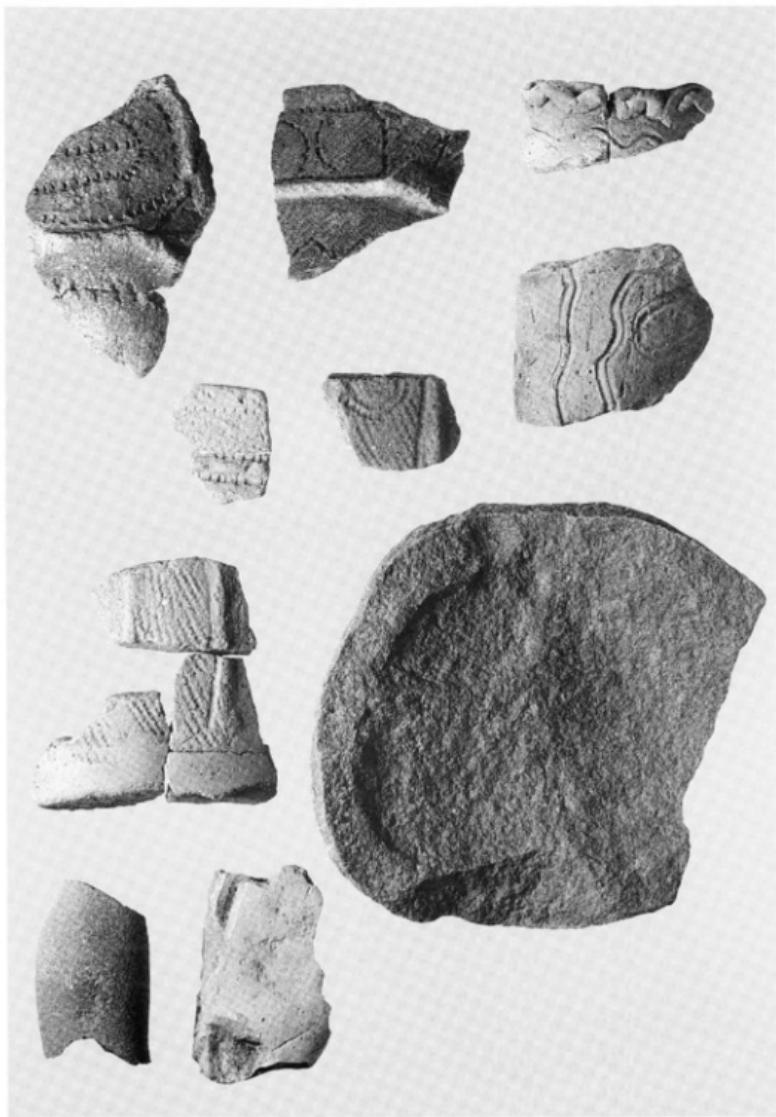
第一号住居址出土遺物



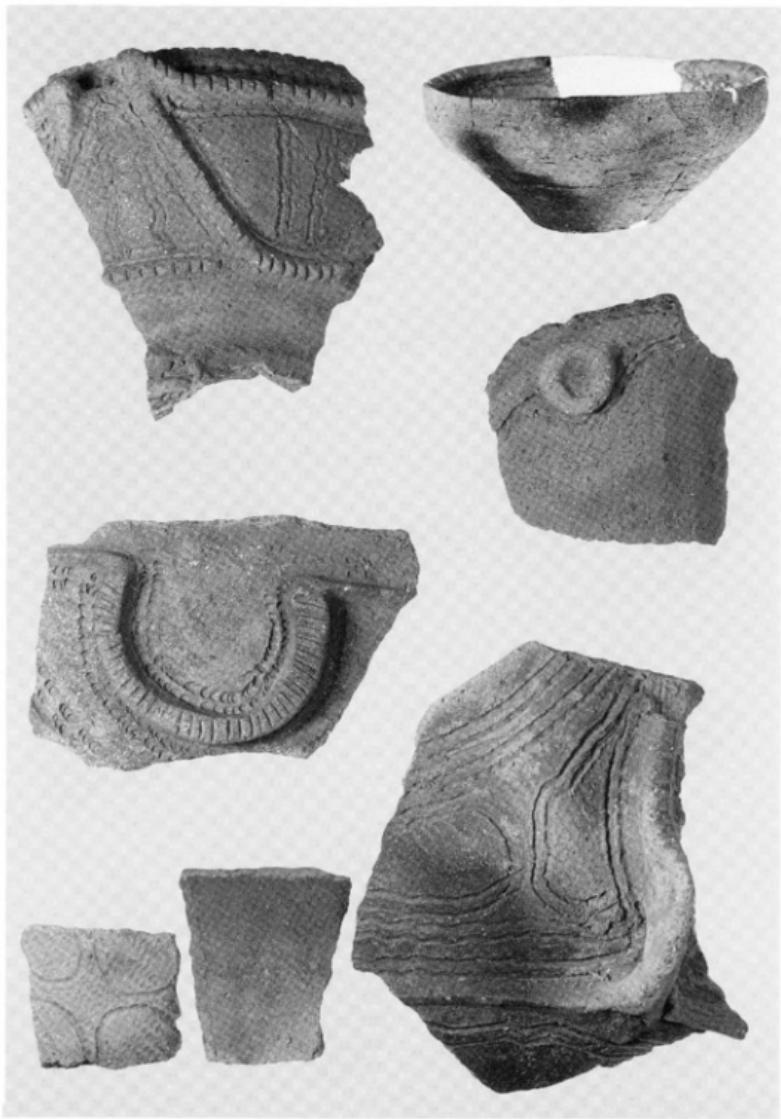
第二层土壤出土遗物



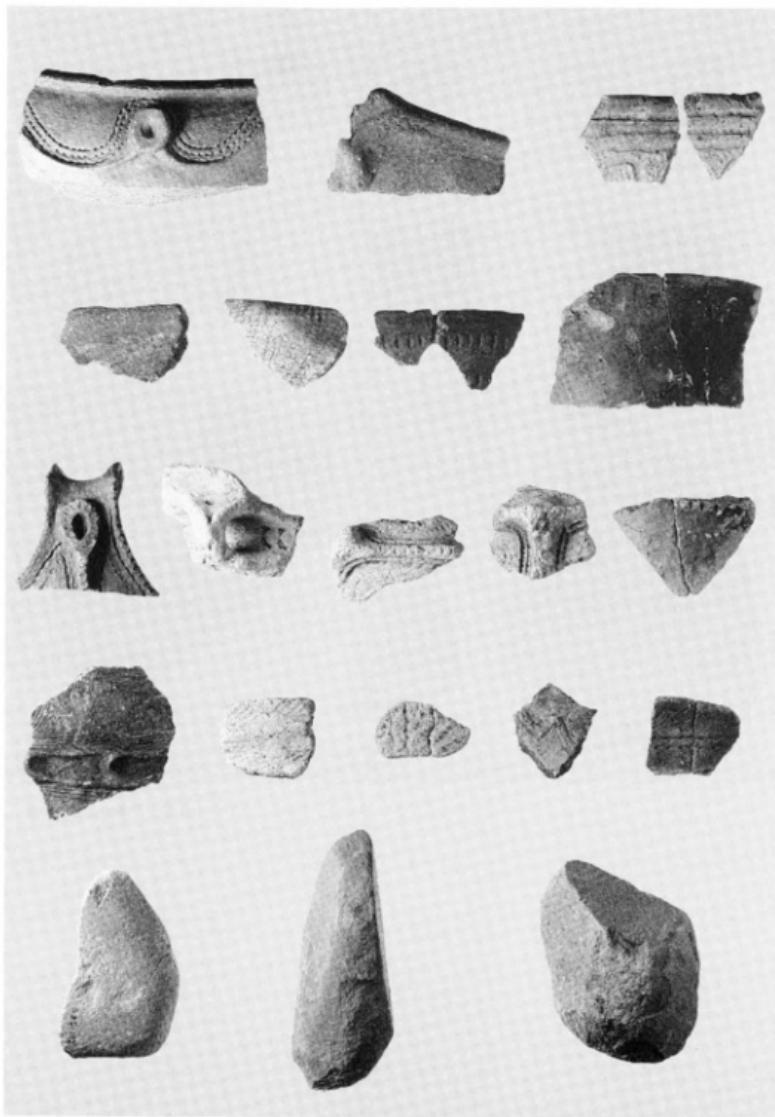
第三号土坡出土遗物



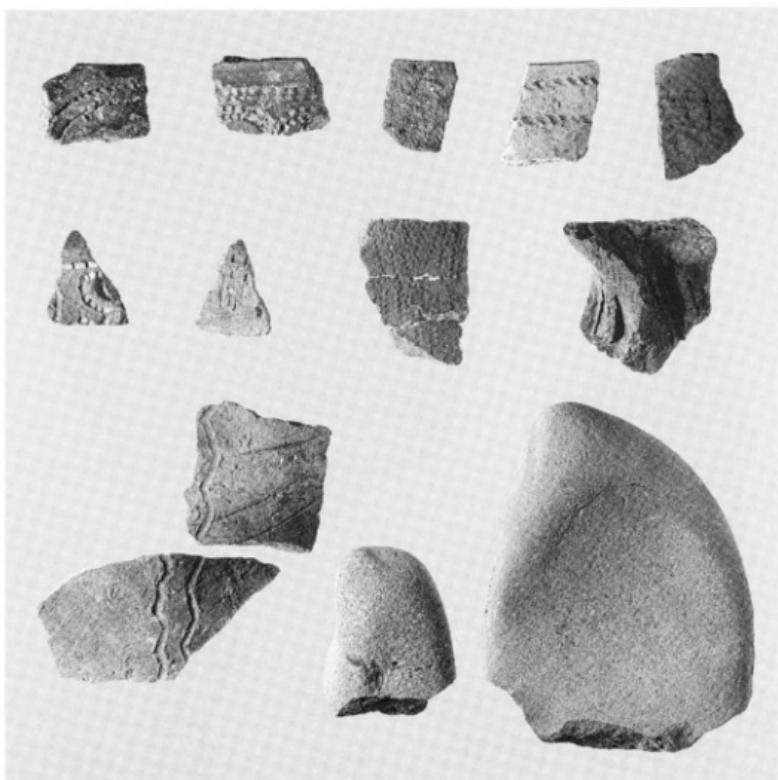
第四号土塚出土遺物



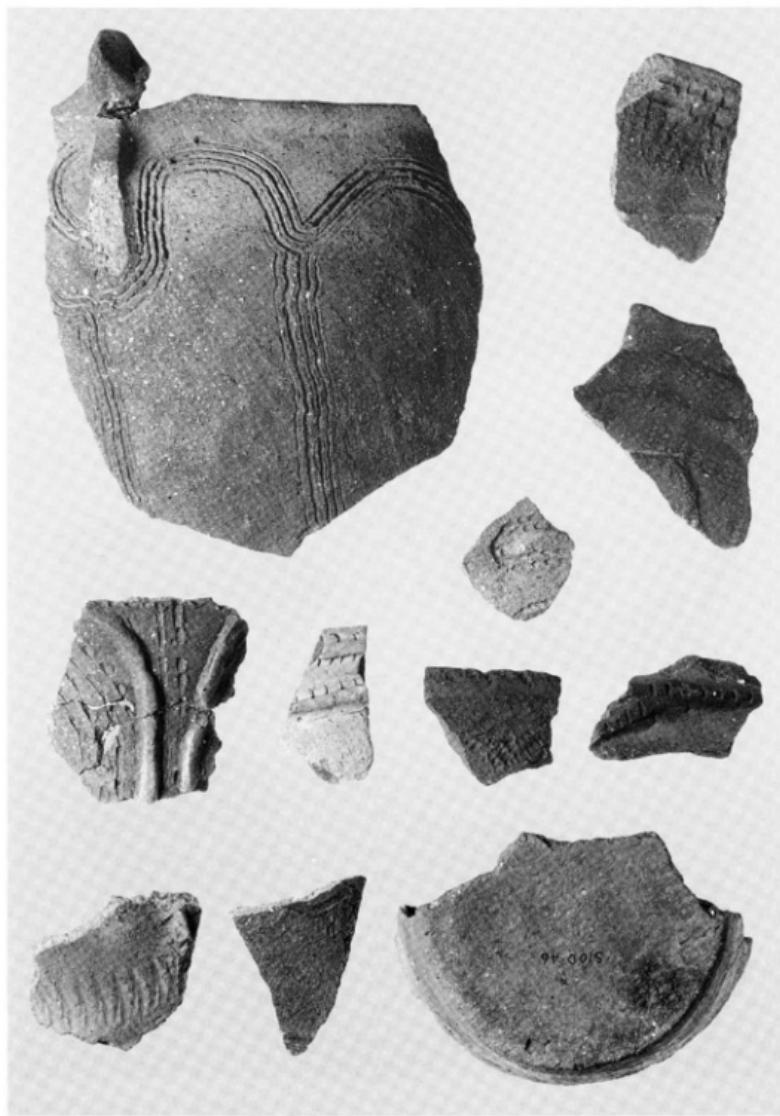
第八号土壙出土遺物



第九号土壤出土遺物



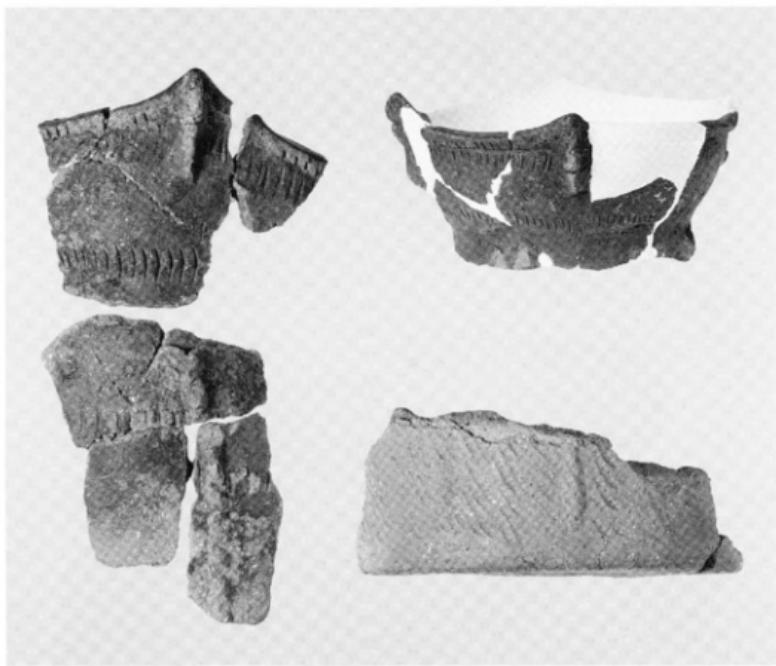
第一〇号土壤出土遗物



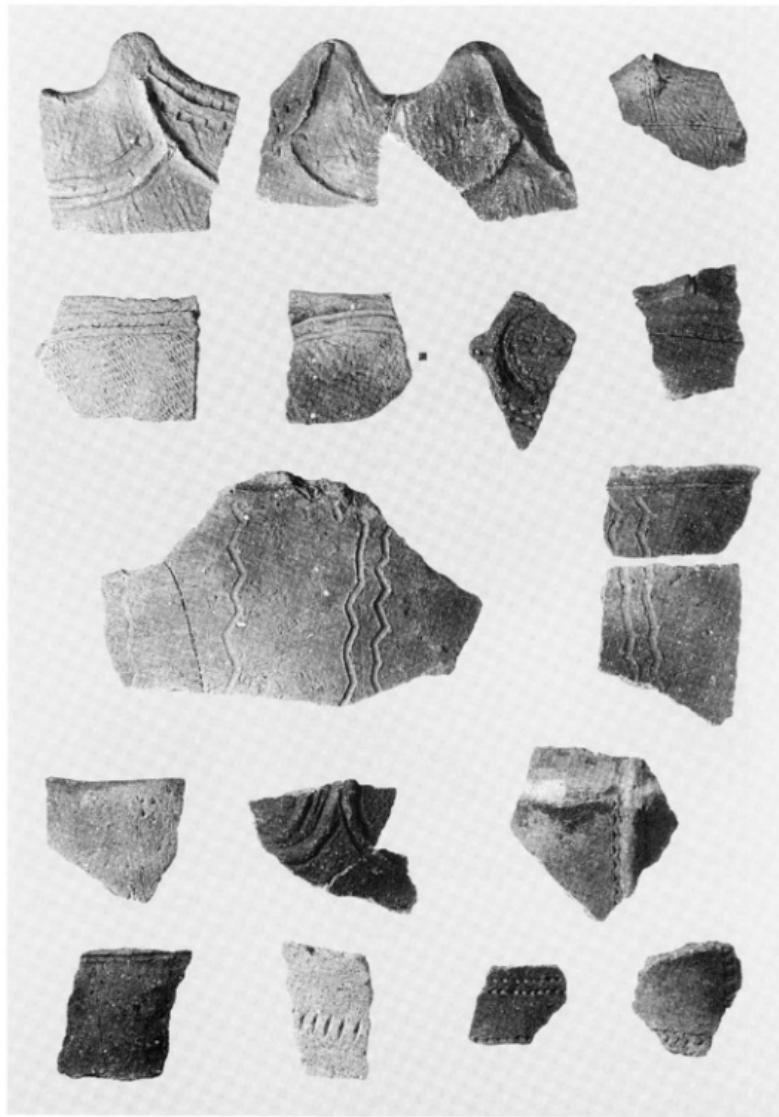
第六号土壤出土遺物



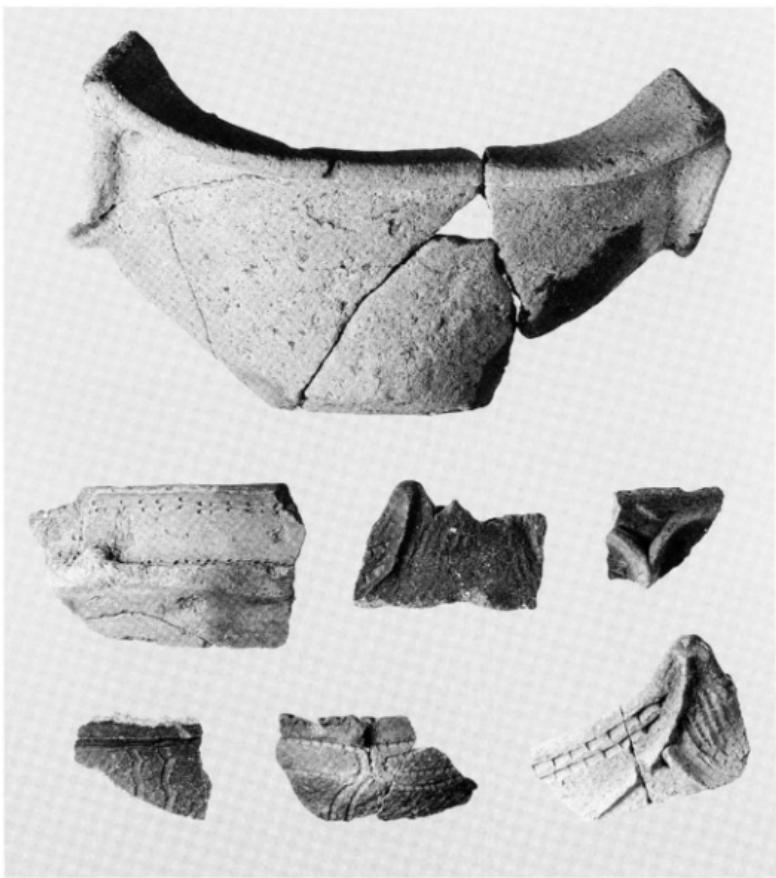
第一〇号土壤（上）



第一一二号土壤（下）出土遗物



第一三号土壤出土遗物



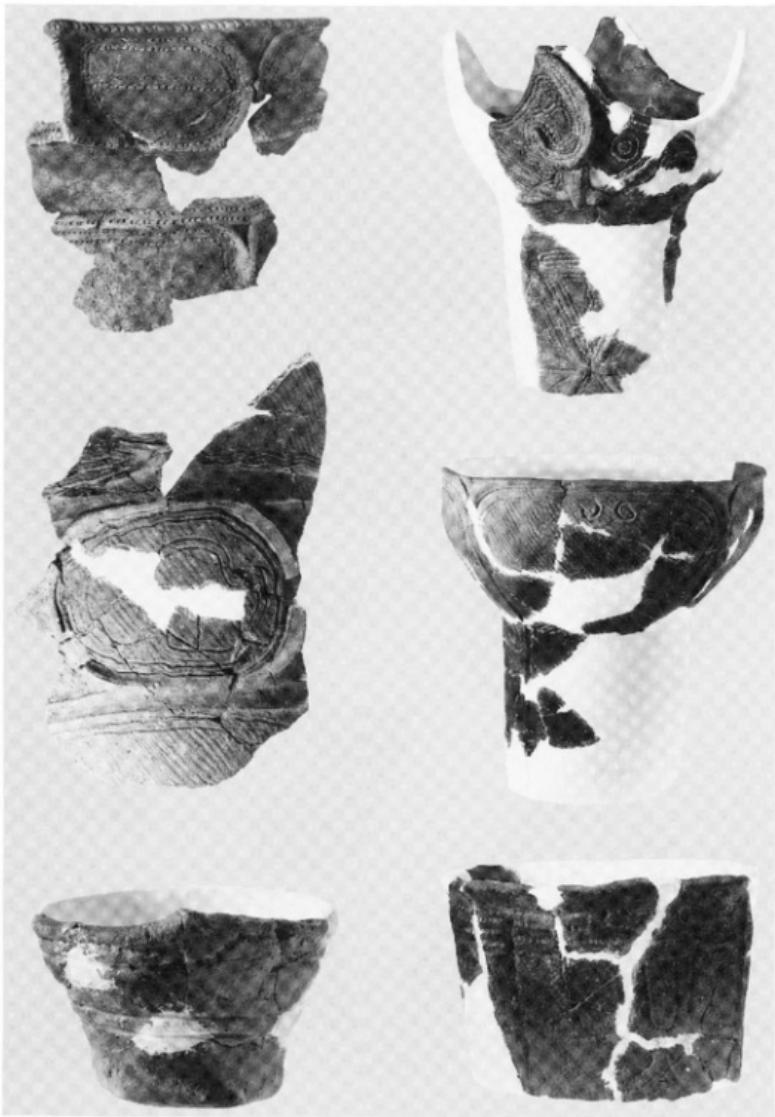
第一四号土塘出土遺物



第一号竖穴状遗構出土遺物



第二号窑穴状遗物出土遗物



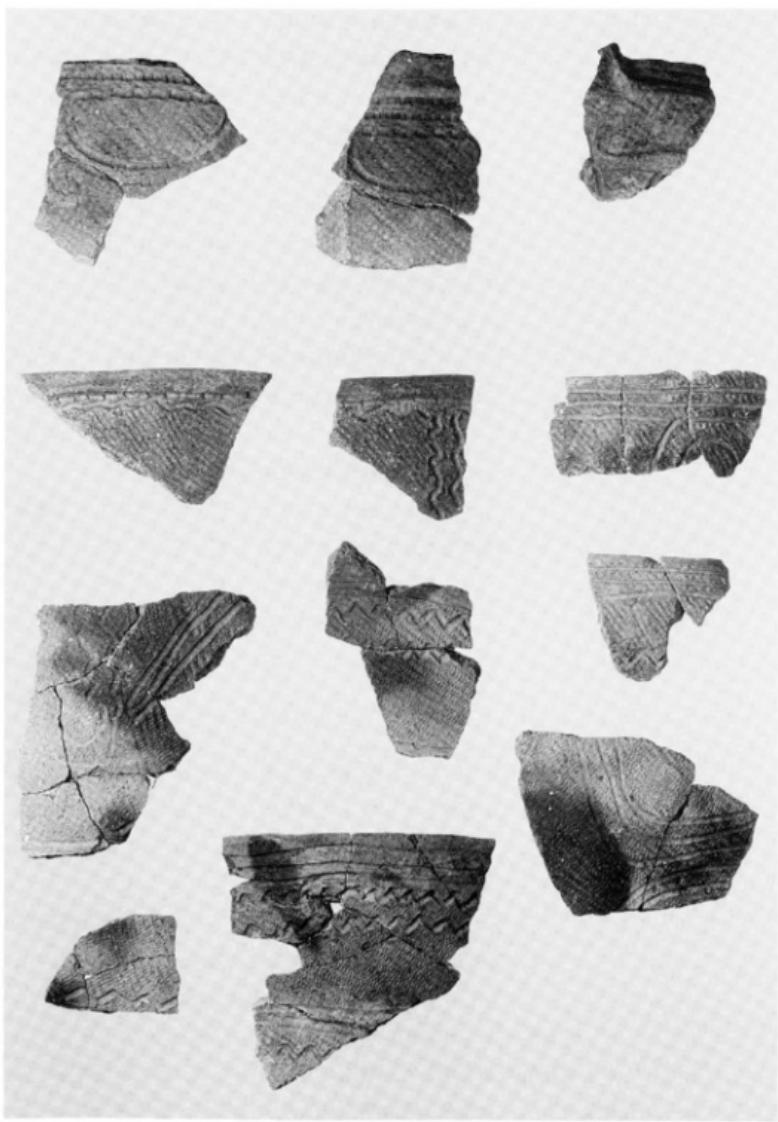
確認調査区出土遺物(1)



確認調査区出土遺物(2)



確認調査区出土遺物(3)



確認調査区出土遺物(4)

諫訪台遺跡発掘調査会役員

会長	浅野長衛	大宮町教育委員会教育長
副会長	鈴木勝一	大宮町文化財保護審議会会长
理事	小野剛	大宮町助役
	住谷順	大宮町総務課長
	生天目巣	大宮町教育委員会教育次長
	金田薰	大宮町企画課長
	森島伍	大宮町建設課長
	井上義安	大宮町諫訪台遺跡発掘調査団長
	中村淳公	大宮町文化財保護審議会副会長
	小野瀬正明	大宮町鷹巣区長
	中橋織二	地元町議会議員
監事	内藤勝利	大宮町会計課長
	梶勇一	大宮町総務課長補佐
事務局	宇留野治男	大宮町教育委員会主査
	宮本正詞	大宮町教育委員会社会教育係長
	野上繁	大宮町総務課管財係長
	桐原英夫	大宮町教育委員会主幹

発掘調査従事者

団長	井上義安				
補佐員	大芦あさ子	小堤静江	高橋陽子	富岡清子	
作業員	大曾根辰一	小野瀬いの	小野瀬幸子	柏密子	
	河井みよ	吉川けさ	山本つる	三次寿恵	

遺物整理従事者

井上義安	(遺構図整理・原稿執筆・レイアウト・校正)
大芦あさ子	(土器接合複元・拓影図・写真図版)
小堤静江/大芦久美子	(土器実測・遺構図トレース・拓影図)
高橋陽子/富岡清子	(土器接合複元・土器実測・遺構図トレース)
中川美和/鈴木浩子	(土器・石器実測・遺構図トレース・拓影図・レイアウト)
神永義彦	(拓影図・写真図版・原稿執筆・レイアウト・校正)

謝 辞

諏訪台遺跡の発掘調査記録が上梓されるにあたり、発掘から出土遺物の整理期間中、大宮町教育委員会、大宮町文化財保護審議会、諏訪台遺跡発掘調査会の諸氏からご高配とご指導を賜ったことに対し、深い感謝の意を表する次第である。また鷹巣区長の小野瀬正明氏のご尽力による地元作業員の方々と、楽しい有意義な発掘作業を実施することができた。ここにあらためて謝意を表したいと思う。（調査員一同）

諏訪台遺跡

発 行 平成三年三月

編 集 諏訪台遺跡発掘調査会

印 刷 ワタヒキ印刷株式会社
